

神奈川大学建築学研究

REPORTS FOR ARCHITECTURE AND BUILDING
ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY

NO. 3

神奈川大学建築学研究所

INSTITUTE FOR ARCHITECTURE AND BUILDING
ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY

目 次

1.	「神奈川大学建築学研究」第3号発刊にあたって……………	藤田正則……………	1
2.	建築学科教育・研究費重点配分採択研究報告		
2-1	鋼管杭の施工データを用いた支持層推定手法に関する基礎的研究 ……………	朱牟田善治, 落合努……………	2
2-2	鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける構面外座屈の防止に関する研究 ー強制面外変形を与えた高剛性接合部を用いた繰返し載荷実験ー ……………	中村慎, 藤田正則……………	4
2-3	水平クリープ性を有する免震支承の水平クリープ特性確認試験方法の構築 ……………	楊曉雨, 吉江慶祐……………	6
2-4	近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究（2） ー近代日本・韓国における社宅についての視察報告ー ……………	印牧岳彦, 須崎文代……………	8
2-5	横浜市における創造都市政策のプロセス検証と今後の展開に関する調査研究 ……………	上野正也……………	10
3.	科学研究費間接経費を資源とする研究報告		
3-1	三次モーメント指数正規変換と構造信頼性への応用 ……………	白井佑樹, 蔡嘉儀, 趙衍剛, 島崎和司……………	12
3-2	韓国の教会建築に関する研究 ー戦前期に建設された「韓屋教会」にみる伝統性の表現についてー ……………	姜明采……………	14

3-3	能登半島地震の被災・復旧・復興状況の調査……………	落合努, 朱牟田善治……………	16
4.	研究紹介 (2024年度)		
4-1	研究分野紹介および研究活動……………		18
4-2	講演会開催記録……………		34
4-3	卒業研究・修士論文・博士論文テーマ……………		36
5.	研究室紹介 (2025年度)……………		40
6.	建築学研究執筆規程……………		64
7.	原稿執筆要領……………		66

「神奈川大学建築学研究」第3号発刊にあたって

藤田 正則*

On the Publication of the Third Issue of “Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University”

Masanori FUJITA*

1. 建築学研究所の概況

建築学研究所は2022年4月に、建築学部建築学科の同時に設立され、2025年度末には教育カリキュラム上の1期生の卒業生を送り出すことになります。本研究所は、「建築学に関する研究・調査を行い、建築学研究の発展に資すること」を目的としています。調査・研究を中心に、共同研究、プロジェクト研究などを行っています。

建築学研究所の主な活動内容には下記があります。

- (1) 学内外及び産学間での特定課題の研究プロジェクトの構築とそれに基づく共同研究の推進
- (2) 各種研究成果の発表及び刊行
- (3) 研究会、講演会、セミナー等の企画・開催
- (4) 研究及び調査の委託及び受託
- (5) 関係図書及び資料の収集及び整理
- (6) 学内共用機器利用の推進
- (7) 卒業生の会「かなな会」と共同事業としての在校生・卒業生への情報発信
- (8) その他研究所の目的を達成するために必要な事項

2. 建築学研究所の主な研究

建築学研究所が推進する研究には以下の3つがあります。

(1) 建築学研究所研究（プロジェクト研究）

建築学研究所研究は工学研究所のプロジェクト研究にならったもので、予算措置のある「研究A」、予算措置のない「研究B」、外部資金を得て行う「研究C」の3種類があります。

研究Aは、建築学会の経費で実行します。研究Bは、研究組織を充実して実行する研究であり、研究活動において客員教授、客員研究員、特別研究員を採用することで、学内外の人材を積極的に招聘して幅広い研究活動の推進や競争的資金の獲得に活用できます。研究Cは、外部研究資金を獲得して実行する研究です。建築学研究の採択は、学科主任、建築学系および都市生活学系の両学系主任、大学院運営委員と研究所所長によって構成される選考委員会によって行います。

(2) 建築学科教育・研究費重点配分採択研究

（以下、学科内重点配分）

若手を中心とした研究に助成し、科研などの外部資金の獲得に繋げるものです。

(3) 文科省科学研究費補助金の間接経費を原資とする研究

（以下、間接経費）

文科省科学研究費補助金の間接経費を原資とする研究として2022年9月に初めて運用され、現在まで継続しています。研究費利用は間接経費の利用範囲内にとどまりますが、有効な研究助成といえます。

上記の(2)(3)の研究の採択は、建築学研究所研究と同様に選考委員会によって行います。また、その成果は、各翌年の建築学研究に報告することになっています。これに従い、2025年度の建築学研究第3号では、2024年度の成果が報告されることになります。

3. 建築学研究第3号の発刊について

建築の助成を受けた研究における研究成果の発表として2023年度に初めて『建築学研究』第1号が発行され、2024年度に第2号が発行されました。建築学研究第3号では、2024年度の成果をもとに、学科内重点配分5件と間接経費を原資とする研究3件の成果をまとめました。また、2024年度の研究所所員の研究室紹介及び研究活動、講演会開催記録として連続講演会及び60周年記念講演会、卒業論文・修士論文・博士論文の各テーマ一覧も掲載しました。

4. 今後の建築学研究所の活動

今後の建築学研究所の活動として、従来の活動に加えて、プロジェクト研究や国際会議シンポジウムなどを建築学研究において積極的に情報発信したいと思います。既に、分野横断型研究として、文化遺産の保全・活用・防災に関する研究（研究者代表：島崎和司）が実行されました。継続して、建築学科の専門分野の異なる各コースに加えて、工学研究所などと連携したゼロカーボン強化研究など、共同研究を通して分野横断型研究を推進できればと思っています。また、各コースの研究活動、卒業生の紹介、留学生便り、各種表彰の紹介なども取り入れたいと考えています。

最後に、本冊子の執筆者の方々、編集委員をはじめ、所員の皆様に御礼申し上げます。

*建築学研究所 所長
President, Institute for Architecture and Building Engineering,
Kanagawa University

鋼管杭の施工データを用いた支持層推定手法に関する基礎的研究

朱牟田 善治* 落合 努**

Fundamental Study on Estimation Method of Bearing Stratum Using Construction Data of Steel Pipe Piles

Yoshiharu SHUMUTA* Tsutomu OCHIAI**

1. はじめに

本報告は、2023 年度卒業研究^[1]（入倉福氏）と 2024 年度卒業研究^[2]（森下静空氏）をベースに一部修正したものである。

鋼管杭工事では、掘削深度の決定が施工者の経験や直感に頼る部分が多く、ボーリング柱状図と実際の地層に相違があるため、正確な掘削深度の判断が難しい。判定方法はボーリング柱状図と杭貫入時の施工データを用いているものの、その方法論は未だ確立されていない。本研究は、杭貫入時の施工データから基盤層を判定する方法を提案することを目的とする。

2. データベースの構築

共同研究として株式会社三誠から提供して頂いた施工地点付近のボーリング柱状図・施工データ(CSV データ)を用いてデータベースの構築を行った。施工データとは鋼管杭貫入時にリアルタイムで出力される杭貫入時パラメータである。深度[cm]、施工時間[s]、貫入速度[m/min]、貫入量[mm]、回転トルク[N・m/10]の値が 10cm 区間で出力される。貫入量とは鋼管杭が 1 回転した時の深度と定義されている。速度は、一分間あたりに進んだ掘削距離である。回転トルクとは、杭掘削時に杭を回転させるのに必要な力を意味する。ボーリング柱状図からは土質名と貫入試験結果から導き出された N 値の値を各地点の N 値として用いた。ただし N 値は貫入試験結果の特性上 10cm のような細かい区間で値を求められないので、1m 区間ごとで一つの値として換算している。そこから値の情報を整理するため、10cm 間隔の深度ごとに記録されている施工データに、ボーリング柱状図から読み取った N 値、地層境界、土質名の情報を追加したデータベースを構築した。地層境界とは土質名が変化する箇所に数字を 1 から順番に振り分けたものである。この作業を 97 地点で行い、横須賀、三浦、逗子、相模原、横浜先端地盤変更、目黒区、大田区、世田谷、川崎、東京その他、横浜から構成される 11 種類の地域に分類したデータセットを構築した。

3. N 値と速度の相関

図 1、図 2 は貫入速度と N 値の相関関係を示している。縦軸が貫入速度、横軸が N 値でそれぞれを対数目盛で表示している。青色の曲線は、速度と N 値から指数回帰モデル(1)を用いて計算を行った予

測値である。

$$y = a \cdot \exp(b \cdot x) \quad (1)$$

(1)の式は、 a と b の値は回帰係数、 x の値には N 値を入れることで予測値を導き出している。その予測値をモデルの精度を示す指標である決定係数 R^2 を元に相関関係を調べていく。一般的に値が 1 に近いほど相関が高いことを示す。図 1 の決定係数は 0.36 という値になり、相関があるとは言えない。そこで N 値は、基盤層判定に実務で活用されることから、N 値と掘削速度 V との相関を上げて、掘削速度 V から基盤層判定を行うことを試みる。具体的には、10cm 区間で記録されている掘削速度 V を 1m 区間ごとに平均化し、N 値と掘削速度 V のデータ解像度を一致させた。図 2 は、この操作を行ったあとの掘削速度 V と N 値との相関を示す。決定係数は 0.56 になり、図 1 と比較して相関が高くなることが確認できた。

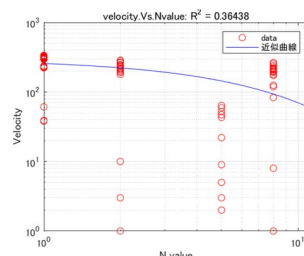


図 1 速度と N 値の相関

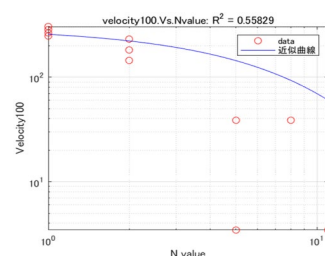


図 2 平均加速度と N 値の相関

4. 基盤層判定について

図 3、図 4 で多少の相関がみられた N 値と平均化速度を比較した。

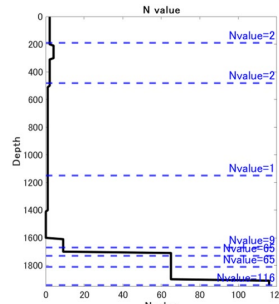


図 3 深度と N 値

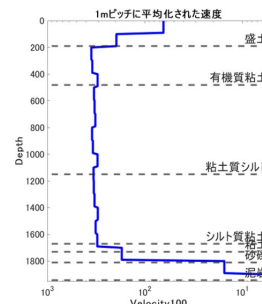


図 4 深度と平均化速度

両方の図が縦軸は深度、横軸はそれぞれの値となっている。二つを比較すると深度が深くなるにつれて N 値は上昇、平均化速度は低下して元に戻らない事が分かる。そこに着目し、基盤層付近になる

*教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

と継続的な速度低下が起こると一つ目の仮定をした。

また、一般的に建物に必要な N 値は 30 以上とされている。基盤層とは、必要な N 値を 30 以上となる地層と本論では仮定した。この前提をもとに、基盤層判定のための基本的な考え方を図 5 に示す。まず、 N 値と掘削速度 V の関係を以下の 4 つのグループに分類した。

①＝掘削速度基準値以下かつ N 値 30 以下

(基盤誤判定領域)

②＝掘削速度基準値以下かつ N 値 30 以上

(基盤判定領域)

③＝掘削速度基準値以上かつ N 値 30 以下

④＝掘削速度基準値以上かつ N 値 30 以上

(基盤判定取りこぼし領域)

この判定領域に基づいて掘削速度基準値を変化させ、それぞれの領域の精度を比較した。

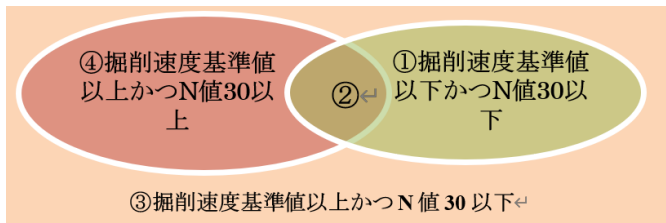


図 5 基盤層判定の領域

5. 分析方法

図 5 の考えを元に、基盤層判定に関わるプログラムを MATLAB にて構築し、97 地点の施工データを対象としたデータベースを CSV データとして一括で読み込むことを可能とした。これにより、貫入速度・深度・ N 値・土質の関係性を可視化した。

基盤層と判定される N 値の閾値と掘削速度 V と基盤層の有無を判定していく。具体的には、各深度の N 値が 30 を超えている元に、 N 値と掘削速度がそれを超えるかどうかで判定される基盤層かどうかの判定結果と掘削速度 V との関係を定量化していく。具体的には、掘削速度基準値を設定し、同基準値と掘削速度の大小関係から図 5 の 4 つのカテゴリごとに、その個数をカウントしていく。カウントしたものを CSV ファイル毎に集計し、それを一つのファイルにまとめるように作業を行った。

6. 結果

6.1 基盤判定率

図 5 に示した①～④のグループに分類してまとめられたデータを、それぞれの割合に変換し比較を行った。この割合というのは、各グループのカウント数を N 値 30 以上のデータ数で割ったもので、②の割合を基盤判定率、④の割合を取りこぼし率と定義する。③の場合は、各グループのカウント数を N 値 30 以下のデータ数で割り、割合を求めた。この割合を誤判定率として定義した。そして基準値を 110~10[cm/min]まで変化させた場合の判定率の推移と関係性を図 6 に示した。図 6 のグラフから、掘削速度基準値を変化させることで基盤判定率が常に一定の精度の保っていることが確認できた。誤判定率も一割以下の低い割合になっていて、特に掘削速度基準値を 20[cm/min]以下に絞るとほぼ 0 になることが読み取れる。また取りこぼし率は比率が 30[cm/min]以下に絞ると、割合が特に大きく変化

することが分かる。

6.2 基盤層判定の精度と検討

結論として、判定に関して掘削速度が基準値以下になれば基盤層と確定して問題ないと言える。なぜなら基盤判定率と誤判定率の安定した精度が大きな理由である。どちらの割合も許容範囲内の値に収まっていて重大な問題は無いと考える。取りこぼし率の割合に変動があることに關しては、図 5 の定義から判定の過剰さを示しているもので、判定自体の間違いに影響するものではないのでこれも問題ない。よって掘削速度基準以下で基盤層とする判定方法は問題ないというのが本研究の結論である。

また今後は、掘削速度基準値の変化について検討を行っていく予定である。現時点では、基準値の範囲を緩める事で取りこぼし率を小さくすることができるが、基盤判定率が約 7 割、誤判定が 1 割以下の精度に落ち着く。仮にこれを「緩和的判定」とする。そして基準値の範囲を絞る、特に 10[cm/min]程にすると、基盤判定率が約 9 割、誤判定率に関してはほぼ 0 の高精度にすることができる。ただし取りこぼし率が非常に大きくなり、 N 値 30 以上の箇所をほとんど取り逃していることが分かる。これを「安全側判定」とする。この二つはそれぞれの利点があるので一概に片方に決めつけるのは難しく、その場の実務的な判断で変わってくることを今後考慮しなければならない。

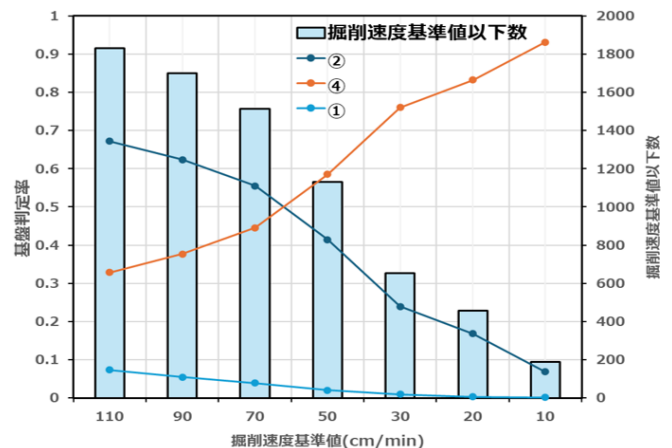


図 6 基盤判定の感度解析

7. まとめ

本研究では、目的である基盤層の判定自体は導くことができた。また掘削速度基準値を変化させることで基盤判定率の精度の安定、誤判定率・取りこぼし率の比率が大きく変化することが確認できた。これらの割合の変化によって「緩和的判定」と「安全側判定」の二つの目的の違いがある。これにより、妥当な基盤層判定閾値を実務的、定量的な判断の基に議論できることを示した。

【参考文献】

- [1] 入倉福，鋼管杭貫入データを用いた基盤層判定に関する研究，神奈川大学卒業論文，2023。
- [2] 森下静空，鋼管杭貫入データ用いた基盤層判別に関する研究，神奈川大学卒業論文，2024。

鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける構面外座屈の防止に関する研究 ー強制面外変形を与えた高剛性接合部を用いた繰返し載荷実験ー

中村 慎* 藤田 正則**

Study on Prevention of Out-of-Plane Buckling in Buckling-Restrained Braces Using Steel Mortar Planks - Cyclic Test Using High-Stiffness Joints Subjected to Forced Out-of-Plane Deformation -

Makoto NAKAMURA* Masanori FUJITA**

1. 序

座屈拘束ブレース(以降、BRB)により大きい変形性能を期待する場合、芯材の脆性破壊を含む早期の引張破断と拘束材の早期の部材座屈および局部破壊を防止する必要がある。あわせて、BRBを主架構に接合し、その最終状況に至るまで、安定した復元力特性を発揮させるためには、接合部を含むBRBの構面外座屈を防止することも重要となる。この構面外座屈の防止に関する設計法(以降、構面外座屈防止設計法)は、鋼構造制振設計指針¹⁾(以降、制振指針)、鋼構造座屈設計指針²⁾(以降、座屈指針)などで整理されており、その考え方は以下の2つに大別される。

①芯材の塑性化に伴い、拘束材端部で塑性ヒンジ形成を許容し、拘束材および接合部に関する安定条件により構面外座屈を防止する(以降、安定条件1)。

②拘束材端部で曲げモーメントの伝達に期待し、接合部と拘束材の連成系に対する安定条件を用いて構面外座屈を防止する(以降、安定条件2)。

鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレース(以降、BRBSM)の既往の研究では、低剛性のガセットプレート(以降、G.PL)に接合したBRBSMを中心に、強制面外変形を加えた部材実験を行い、その実験結果を安定条件2を用いて検証している³⁾。

本研究では高剛性のG.PLに接合したBRBSMに強制面外変形を加えて部材実験を行い、実験結果を安定条件1および安定条件2を用いて検証する。

2. 実験計画

2.1 試験体概要

本研究の試験体は図1に示す2つの形状とした。P15、P15Eは、リブ貫入部長さを芯材幅の約1.5倍とした試験体である。拘束材端部に作用する補剛力(拘束材端部に作用する付加曲げによって生じるせん断力)が過大にならないよう、座屈指針で推奨されるリブ貫

入部長さを確保し、P15は強制面外変形なしで、P15Eは強制面外変形ありで載荷する計画とする。P05Eは、リブ貫入部長さを芯材幅の約0.5倍とした試験体である。P05Eも強制面外変形ありで載荷することで、強制面外変形の有無およびリブ貫入部長さの違いが復元力特性や載荷回数などに及ぼす影響を確認できる計画とした。

その他の試験体諸元を表1に示す。拘束材の局部破壊などに影響するクリアランス比(クリアランスを芯材板厚で除した値)は芯材塑性化部の弱軸方向の平均値が約8%となるよう管理し、クリアランス調整材の貼付面積比(芯材塑性化部に貼付するクリアランス調整材の合計面積を、芯材塑性化部面積で除した値)は全試験体で11.3%とした。

2.2 載荷計画

載荷装置を図2に、載荷パターンを図3に各々示す。載荷柱の柱脚部はピン支持とし、試験体を45度の角度で設置する。BRBSMの接合部は文献1)の標準ディテール2に相当する高剛性のG.PLとし、構面外方向については、載荷柱上下のパンタグラフおよび載荷柱側面のローラー支承で面外方向の変形および回転を拘束する。強制面外変形を加える実験では、試験体を図2のように設置した後、下部のG.PLと架台の間の高力ボルトを緩め、レバーブロックを用いて下部のG.PLを構面外方向に27mm(層間変形角1/100相当を想定し、架台から加力点までの高さの1/100)移動させる。移動させた後、G.PLは再度架台に高力ボルトで緊結する。

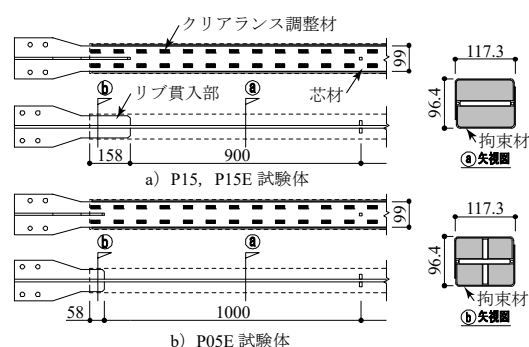


図1 試験体形状

* 客員研究員 工学研究所

Visiting Researcher, Inst. for Architecture and Building Engineering

**教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

表 1 試験体一覧

試験体	芯材 (S400B)					拘束材		拘束指標 ($R=P_v/P_y$)	充填材		クリアランス比 (平均値)(%)	構面外変形
	t _c mm	B _c mm	σ _y N/mm ²	P _y kN	L _{in} /B _c mm	板厚 mm	σ _y _r N/mm ²		種類	圧縮強度 N/mm ²		
P15	9	99	340.9	303.7	1.59	2.3	314.0	1.9	モルタル	64.5	8.2	なし
P15E					0.58					67.0	8.0	あり (27mm) (層間変形角 1/100相当)
P05E										63.6	8.7	

表 2 実験結果

試験体	終局時の軸歪 と載荷回数	最終状況	P _{cu} kN
P15	3.0%歪 7回目引張側	引張破断	549.5
P15E	3.0%歪 6回目引張側	引張破断	595.1
P05E	3.0%歪 5回目圧縮側	局部破壊	621.7

表 3 圧縮側最大軸力を用いた構面外座屈の判定

試験体	N _{cu} kN	N _{lim} kN	N _{lim1} (3.5.7)式 kN	N _{lim2} (3.5.8)式 kN	検定比 N _{cu} /N _{lim}	検定比	
						M _f /M _y (3.5.3a)式	N _d /N _y (3.5.3b)式
P15	549.5	472.1	472.1	564.3	1.16	0.01	0.68
P15E	595.1	218.3	218.3	395.2	2.73	0.30	0.73
P05E	621.7	347.0	347.0	388.4	1.79	0.37	0.76

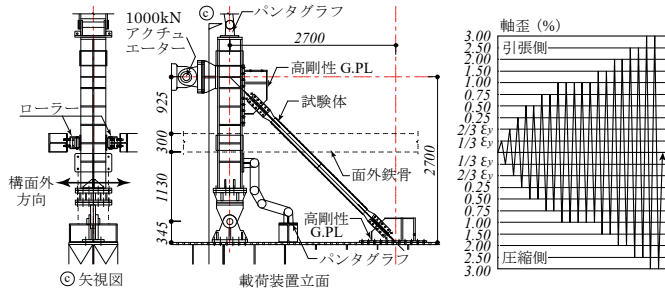
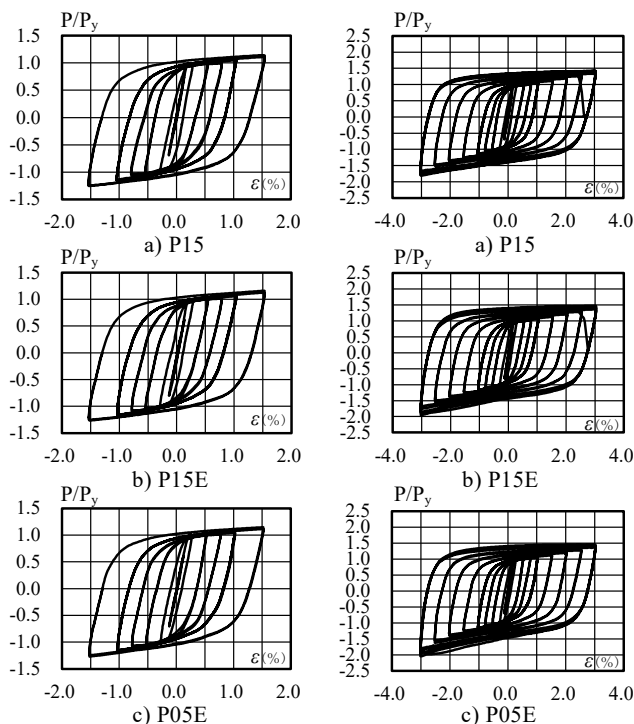


図 2 載荷装置

図 3 載荷パターン

図 4 P/P_y-ε 関係
(軸歪 1.5%まで)図 5 P/P_y-ε 関係
(載荷終了時まで)

3. 実験結果および考察

3.1 復元力特性

各試験体の軸歪 1.5% 載荷までの降伏耐力比 (P/P_y) と芯材の軸歪 (ϵ) の関係を図 4 に、各試験体の載荷終了時までの P/P_y - ϵ 関係を図 5 に、実験結果を表 2 に各々示す。既往の研究の実験モデルによれば、P15 および P15E の軸歪 1.5% は層間変形角でおよそ 1/70 に、P05E の軸歪 1.5% は層間変形角でおよそ 1/60 に相当する。高剛性 G.P.L. に接合した各試験体は層間変形角 1/100 相当を超えても非常に安定した復元力特性を示し、載荷終了に至るまで構面外座屈を生じないことを確認した。

3.2 構面外座屈の検討

構面外座屈の防止について、制振指針には安定条件 1 の検討に対応する (3.5.3a) および (3.5.3b) 式が、座屈指針には安定条件 2 の検討に対応する (3.5.7) および (3.5.8) 式が、各々示されている。ここでは、

制振指針、座屈指針に示される各式と実験時の圧縮側最大軸力 P_{cu} を用いて各試験体の構面外座屈を検討する。

各試験体の構面外座屈の判定を表 3 に示す。座屈指針の (3.5.7) および (3.5.8) 式を用いた評価では、強制面外変形なしの P15 を含む全ての試験体で検定比が 1.00 以上となり、構面外座屈 (構面外機構不安定) に至る可能性がある判定結果となった。一方で、実験では構面外座屈は発生せず、余裕度の高い判定結果を得た。

制振指針の (3.5.3a) および (3.5.3b) 式を用いた評価では、実験時の圧縮側最大軸力を用いても、全ての試験体の検定比が 1.00 未満となり、構面外座屈 (構面外機構不安定) に至らない判定結果となった。実験結果と対応する判定が得られており、高剛性の G.P.L. に接合した BRBSM には安定条件 1 による構面外座屈防止設計法も適用できるものと考えられる。

4. 結

本研究では高剛性の G.P.L. に接合した BRBSM に強制面外変形を加えた部材実験を行い、以下の知見を得た。

- 1) 高剛性の G.P.L. に接合した BRBSM の構面外座屈を安定条件 1 (拘束材端部の塑性ヒンジ形成を許容する構面外座屈防止設計法) で検討し、構面外座屈を生じない判定結果を得た。対応する部材実験でも構面外座屈は発生せず、BRBSM にも安定条件 1 による構面外座屈防止設計法が適用できる。
- 2) 高剛性の G.P.L. に接合した BRBSM の構面外座屈を安定条件 2 (拘束材端部の曲げモーメント伝達に期待する構面外座屈防止設計法) で検討し、構面外座屈を生じる判定結果を得た。対応する部材実験では構面外座屈は発生せず、BRBSM に安定条件 2 による構面外座屈防止設計法を適用すると、余裕度の高い判定結果となる。

参考文献

- [1] 日本建築学会編：鋼構造制振設計指針 (2014. 11).
- [2] 日本建築学会編：鋼構造座屈設計指針 (2018. 2).
- [3] 竹内徹，松井良太，三原早紀，大家貴徳，岡本勇紀，小崎均，岩田衛，鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの構面外機構安定性，日本建築学会技術報告集，20 (45)，569-574 (2014. 6).

水平クリープ性を有する免震支承の水平クリープ特性確認試験方法の構築

楊 暁雨* 吉江 慶祐**

Development of an Experiment Method for Clarifying Horizontal Creep Behavior of Base Isolation Members under Wind Loads

Xiaoyu YANG* Keisuke YOSHIE**

1. はじめに

近年、免震建築物の高層化が進み、風荷重の影響が大きくなり、慎重に耐風設計を行う必要のある免震建築物が増加している。このため免震建築物の実用的な耐風設計技術の整備が強く求められるようになっている^[1]。免震部材の中には、静的な外力に対して変形が時間とともに進行する特性（「水平クリープ変形特性」とする）を有するものがある。免震部材の水平クリープ変形特性に関する研究はまだ少なく、合理的な耐風設計を行うためには基礎的な性能確認実験が必要である。風荷重は静的な平均成分と、動的な変動成分を有するが、水平クリープ変形は平均成分が大きく影響すると考えられる。つまり水平クリープ変形特性の確認には、平均荷重を加えた状態で免震部材の非線形挙動を調べる必要がある。しかし、非線形挙動を呈する試験体の荷重制御による載荷は、制御が難しい。また、耐風設計が問題となる水平変形は2または3cm～5cm程度の範囲であり、鉛直荷重の数%以下の水平力が対象となるため、試験機の摩擦力やノイズに影響されない試験・計測方法が必要となる。このように免震部材の水平クリープ変形特性の確認のためには小振幅領域での高精度の測定と風荷重の条件を模擬できる試験方法（荷重制御と長時間加振）の検討が必要である。

本研究は、免震部材の小振幅実験用の載荷装置を製作し、免震部材の縮小試験体に対する小振幅・長時間載荷実験を行い、測定方法の検証、試験機の荷重制御と変位制御の特性の確認を行い、水平クリープ変形特性の確認実験のための基礎資料を得ることを目的とする。天然ゴム系積層ゴムアイソレータ（以下NRB）を用いて、計画した装置による載荷実験を行い、本装置の試験精度を確認し必要な補正方法等の検討、荷重制御と変位制御の比較を行い、変位制御を荷重制御のように扱うための試験方法の基礎資料を得る。

2. 実験計画

2.1 試験体

試験体には実大の1/3~1/4スケールのNRBを用いる。試験体特性を表1、試験体形状を図1に示す。

*助教 建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering
**教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

表1 試験体特性

試験体	NRB
ゴム直径(mm)	300
ゴム総厚(mm)	58.5
2次形状係数	5.1
水平剛性(kN/mm)	0.35

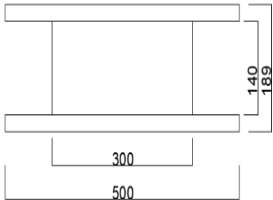


図1 試験体

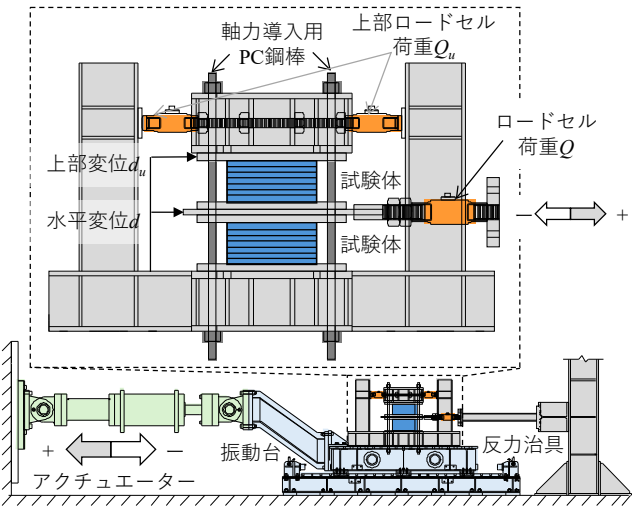


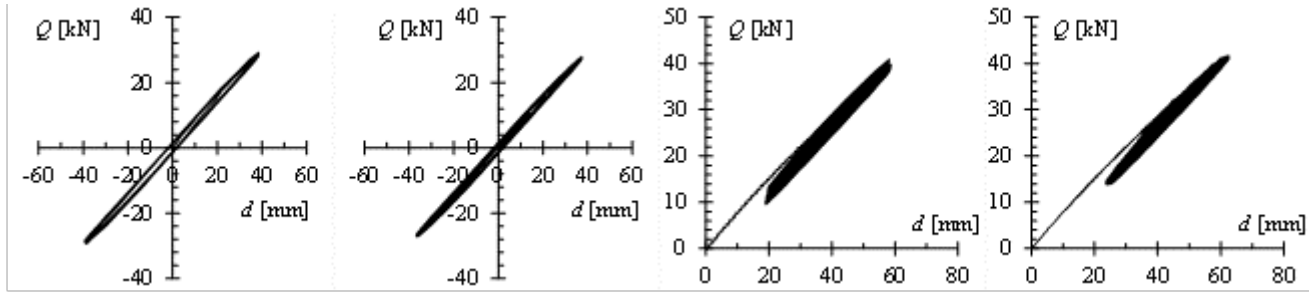
図2 セットアップと計測計画

表2 加振方法

No	制御	振幅(平均±変動)	加振周期	サイクル数
1	変位	0±40mm	6s	1200
2	荷重	0±28kN	6s	1200
3	変位	40±20mm	3s	2400
4	荷重	28±14kN	3s	2400

2.2 セットアップと計測計画

セットアップと計測計画を図2に示す。本試験では積み重ねた2体の試験体の上下を固定し、中央部に変形を与えることで摩擦力の影響を受けずに試験体に与える水平力を計測することができ、小振幅の小さな荷重を高精度で実験を行うことが可能になる。鉛直方向では、PC鋼棒で250kNの荷重を4箇所、計1000kNの鉛直荷重を作



(a) No.1 変位制御 0±40mm (b) No.2 荷重制御 0±28kN (c) No.3 変位制御 40±20mm (d) No.4 荷重制御 28±14kN

図3 荷重変形関係

用させた。面圧は約 14.1MPa である。試験体を反力治具にて固定し、水平アクチュエータにより加振試験を行った。

計測について、2 体の試験体中央部にあるロードセルの荷重を水平荷重 Q 、中央部の変位を水平変位 d とした。また、上部の試験体荷重 Q_u を上部のロードセルにより計測し、上部のベースプレートの水平変位を d_u とする。サンプリング周波数は 100Hz である。

2.3 加振条件

加振方法を表 2 に示す。本実験では制御方法、振幅、平均成分の有無、周期、サイクル数を変化させ、それぞれ 2 時間の繰り返し載荷試験を行った。荷重および変位の振幅は、試験体の水平剛性を考慮し、No.1 と No.2、No.3 と No.4 の挙動が同程度となるように設定した。

3. 実験結果

実験データは 10Hz のローパスフィルタを通し、ノイズ成分を除去したものを使用する。水平荷重 Q と水平変形 d の関係を図 3 に示す。本試験により、水平荷重-28kN~+42kN、水平変位-40mm~60mm の範囲の繰り返し載荷を連続で最大 2 時間行い、荷重制御、変位制御とも目標通り安定した載荷が実現できた。

4. 上部試験体荷重の計測精度の検討

本試験では 2 個積み重ねた試験体の上下を水平方向に固定し、中央部に水平変形を与える載荷方式であるが、上部治具はロードセルを介して反力を確保しており、載荷時には微小な水平変位が生じる。このため、鉛直荷重用の PC 鋼棒が傾き、鉛直力による水平分力が生じる。文献^[2]より、この水平分力を(1)式より評価する。

$$F_H = 1.2 * N * \frac{d_u}{L} \quad (1)$$

ここで、 F_H : PC 鋼棒の傾きによる水平分力、 N : PC 鋼棒の軸力、 d_u : 上部のベースプレートの水平変位、 L : PC 鋼棒の有効長さ（上下ナット間の距離）。

この水平分力を補正後の上部試験体荷重($Q_u + F_H$)と全体の水平荷重 Q に対する比率を α とし(2)式より求め、補正前の比率 α を(3)式より求めた。

$$\alpha = \frac{Q_u + F_H}{Q} \quad (2)$$

$$\alpha = \frac{Q_u}{Q} \quad (3)$$

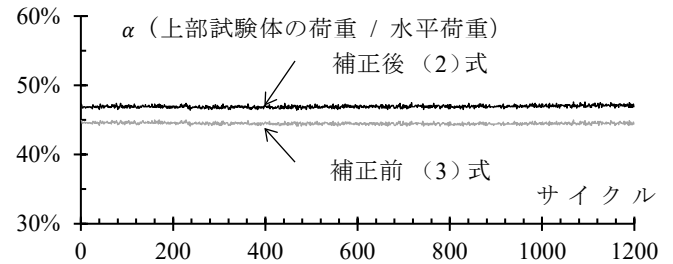


図4 上部ロードセルの計測精度 (No.4)

各サイクル載荷の最大荷重の補正前後の α 値を図 4 に示す。サイクルによる影響は小さい。補正前では、上部試験体は全体荷重の約 45%を負担しているが、補正により約 47%を負担していることが確認でき、PC 鋼棒の水平分力は約水平荷重の 2%となることが確認された。上下 2 つの試験体の水平剛性はほぼ同じであるのに対し、荷重の補正後も 2 つの試験体の水平荷重の差があり、この原因についてはさらに検討が必要である。

5. まとめ

本研究では、 $\phi 300$ の NRB を用い、風荷重を模擬する繰り返し載荷を行った。結論は以下に示す：

- ・試験機の実験能力を明らかとした。水平荷重-28kN~+42kN、水平変位-40mm~60mm の範囲の繰り返し載荷を連続で最大 2 時間、荷重制御、変位制御とも安定した載荷が実現できた。
- ・試験体荷重に対する上部試験体荷重の比率について、PC 鋼棒の傾きによる水平力を補正した後、上部試験体荷重と水平荷重比率が約 47%であり、PC 鋼棒のせん断力が試験体荷重の約 2%負担していたことが確認された。

謝辞

本研究は本学吉江・楊研究室と東京科学大・吉敷研究室との共同研究として実施しました。研究を進めるにあたり、株式会社オイレ工業、SWCC・免制震デバイス・住友鉱山シボレックスグループ、BRIDGESTONE から試験体を提供いただきました。また、本研究の一部は元神奈川大学工学部生稲葉来射氏、飯嶋孟琉氏、中西康貴氏の研究成果に基づいています。実験を進行するあたり、本学の技術職員佐藤宏貴氏から多大な協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

【参考文献】[1] 免震建築物の耐風設計指針(2023), 日本免震構造協会。[2] 酒井一至, 吉敷祥一, 小林真帆, 平野一郎, 黒澤未来, 高橋良和, 実大免震試験機“E-Isolation”の建設時における各部の性能検証, 日本建築学会構造系論文集, 89 (821), 727-738, (2024. 7)。

近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究（2）

近代日本・韓国における社宅についての視察報告

印牧 岳彦* 須崎 文代**

A Study on Modern Utopian Communities and Their Buildings: A Report on Company Housings in Modern Japan and Korea

Takahiko KANEMAKI * Fumiyo SUZAKI**

1. 緒言

本稿では前稿¹⁾に引き続き、産業革命以降、とりわけ19世紀～20世紀におけるユートピア的構想とその建築的な表れについての調査報告を行う。

月尾嘉男と北原理雄による著書『実現されたユートピア』では、産業革命後の時代をユートピア構想における第二の「黄金時代」と呼び（第一の「黄金時代」はルネサンス期とされている）、そこにおけるユートピアの種類を「宗教思想的ユートピア」「社会主義的ユートピア」「資本主義的ユートピア」という三つに分類している。このうち前二者が既存の社会体制とは異なった世界を現出させる試みであったのに対し、最後の「資本主義的ユートピア」とは、博愛的あるいは温情的な資本家による、既存の資本主義社会のなかでの事業性を前提としつつ、労働者（従業員）の生活福祉を向上させることを目的としたモデル・コミュニティのことを指しており、事例としてはイギリスのソルテア、ボーンヴィル、ポート・サンライト、ドイツのクルップ・コロニー、アメリカ合衆国のブルマン・タウンなどが挙げられている²⁾。これらのコミュニティにおいては労働者の住まう住宅の改良に加え、共用施設の充実などによってその生活改善が図られ、このことがまた企業利益にも結びつくものと考えられていたとされる。

上記で挙げられた事例は19世紀後半の欧米において建設されたものであるが、近代の日本において建設された社宅街のなかにも、類似した性質を認められる部分があるように思われる。本稿ではこうした視点にもとづきつつ、社宅街一般の性質について既往研究をもとに整理した上で、2024年度中に実施した現存する社宅の視察調査について報告を行う。

2. 近代日本における社宅街とその特質について

2009年に刊行された社宅研究会編『社宅街』では、とくに近代日

本における「社宅街」という存在について、欧米における類似する概念（ミルヴィレッジ、共産主義的工場村、カンパニータウン、コーポレートタウン）を参照しつつ、「企業が所有する福利施設により構成された地域」という定義を与えている。とりわけここでは留意すべき点として、社宅街が単に住宅だけで構成されるものではなく、その他の（保健衛生、娯楽、教育などさまざまな要素に資する）福利施設をそのなかに含んでいること、すなわち「社宅」を理解するためには、建物単体ではなく「群」すなわち「社宅街」としてとらえる視点が必要」という点が指摘されている。同書によれば、「通常の都市生活に決して見劣りしない多様な都市施設が、遅くとも昭和初期には主要工場・鉱山で整備されていた」のであり、「これら福利施設が公共的性格を帯び、地域住民がその都市的生活を享受できたところも少なくなかった」のだとされる³⁾。

このような（前述の「資本主義的ユートピア」とも共通する）「社宅の先進性」が実現した背景の一つには、企業による労働者に対する福利施策が存在したとされ、『社宅街』ではそうした企業の意図が明瞭に読み取れる一例として、大正3～4年の時期に三菱によってまとめられた『労働者取扱方針関係調査報告』が挙げられている⁴⁾。後述する、今年度視察対象とした社宅群のなかにも、三菱による運営のものが含まれるが、それらの背景にこうした労働者福祉に対する企業の方針が存在したことは重要であろう。

3. 現存する社宅の視察調査

今年度の具体的な研究活動として、国内外に現存する社宅（あるいはそれに類する集合住宅）についての現地調査を行なった。具体的には、国内では長崎県の離島に現在も残る炭鉱社宅群、国外では韓国・仁川富平市に遺構が残る旧三菱社宅について、訪問視察を実施した。

3. 1. 国内：長崎の炭鉱社宅

長崎県に残る炭鉱関連の社宅としては、通称「軍艦島」とも呼ばれる、長崎市端島の集合住宅および関連施設が著名であるが、県内にはこれ以外にも炭鉱の発展とともに建設された住宅群の残る離島

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**准教授 建築学部建築学科

Associate Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

が存在する。以下ではそうした事例として、西彼杵半島の西に位置する池島および、端島に隣接する高島について報告を行う。

(1) 池島・炭鉱住宅



池島・炭鉱住宅および関連施設(2025年3月, 筆者撮影)

第二次世界大戦後の1952年から松島炭鉱株式会社によって開発が開始された池島炭鉱は、2001年の閉山まで操業を続けた。島内には鉱員の暮らした炭鉱住宅および関連施設が残り、一部は現在も居住が続けられている。住棟間のオープンスペースを大きく取った配置計画や、商店や共用施設の集合した地区の存在など、同時期に国内で建設されたニュータウンとの共通性も見取れる。



池島・8階建ての炭鉱住宅(2025年3月, 筆者撮影)

とりわけ特徴的な事例としては、島の西側に位置する8階建ての炭鉱住宅がある。ここでは敷地南北の高低差を活かし、南側からは建物5階へと直接アクセスできる経路が設けられている。

(2) 高島・炭鉱住宅



高島・光町住宅(2025年3月, 筆者撮影)

端島の隣に位置する高島の炭鉱は、1868年に佐賀藩およびグラバー商会の共同で開発が進められ、1881年に三菱に買収されたのち、1986年の閉山まで経営が続けられた。操業当時多数の鉱員が生活した炭鉱住宅はその多くが取り壊されつつあるが、8階建て(エレベーターなし)の光町住宅など特徴的な事例も残存し、池島と同様、現在でもその一部は居住が続けられている⁹⁾。

3. 2. 国外：韓国・仁川富平旧三菱社宅

韓国・仁川富平市にその一部が遺構として残る「旧三菱社宅」と呼ばれる社宅群は、もともとは当時同地で鉱山機械等の製造を行っていた弘中商工によって建設され、1942年に同社の富平工場が三菱製鋼に買収されたことにともない、三菱の社宅となったものである。同社宅は日本による強制労働の記憶を残すものとして、いわば「負の遺産」として見られることも多かったが、近年その歴史的価値の

検討が進み、2021年には詳細な実測調査にもとづく報告書が刊行され⁶⁾、2024年には国家登録文化遺産とする方針が発表されている。

建築的には、構法やディテールにおける日本的要素と韓国的要素の関係性や、居住者によって後年増築を重ねられたことによる、間取りの変化などが興味深い点である。



旧三菱社宅, 外観および一部内観(2024年11月, 筆者撮影)

4. 結言

本稿では以上、今年度を実施した社宅に関する現地調査の事例を挙げてきた。今回取り上げた池島・高島の炭鉱住宅や韓国・旧三菱社宅について、とくに日本国内では建築史的視点からの研究はまだ数少なく、その福祉的側面も含めた検討は今後の課題である。冒頭で述べたような「資本主義的ユートピア」の視点からこれらの事例を分析可能かという点については、とりわけ旧三菱社宅のような歴史的背景を持つ建築群においては、慎重な検討を要する問題であるが、前述したように国内の社宅で見られた労働者福祉に関する企業の意図が、こうした国外事例においてはどのような関係を持ったのかという点は、重要な検討課題のひとつであると思われる。

謝辞：旧三菱社宅の調査にあたっては、延世大学のイ・ヨンギョン(이연경)准教授に多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 参考文献[1]
- 2) 参考文献[2], pp. 14-21.
- 3) 参考文献[3], pp. 15-18.
- 4) 参考文献[3], p. 30.
- 5) 高島の各地区における炭鉱住宅の概要と現存状況については参考文献[4]も参照。
- 6) 参考文献[5]

参考文献

- [1] 印牧岳彦, 須崎文代, 近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究(1) フーリエ主義にもとづく集合住宅の試みについての一考察, 神奈川大学建築学研究, (2), 6-7 (2024).
- [2] 月尾嘉男, 北原理雄, 実現されたユートピア, 鹿島出版会 (1980)
- [3] 社宅研究会(編), 社宅街：企業が育んだ住宅地, 学芸出版社 (2009).
- [4] 竹村潤, 安武敦子, 人口減少期における地域の変容に関する研究—旧産炭地 高島を対象に—, 長崎大学工学研究科報告, 47 (89), 53-58 (2017).
- [5] 부평 미쓰비시 줄사택 및 2호 사택 기록화 조사보고서, 인천광역시 부평구 (2021. 6).

横浜市における創造都市政策のプロセス検証と今後の展開に関する調査研究

上野 正也*

Research on the Process Verification and Future Development of Creative City Policy in Yokohama City

Masaya UENO*

1. はじめに

横浜市は 2004 年より創造性に着目した都市政策(以下、創造都市政策)を推進してきた⁽¹⁾。この創造都市政策は、文化芸術の振興・産業振興・都市デザインといった 3 つの政策領域を横断する、総合的な都市政策である。そこでは、歴史的建造物や横浜らしい景観を構成する建物などをリノベーションし、アーティスト・クリエイターを誘致することで、創造的な境界の形成が目指されてきた。そして、20 年を経た成果として、都心部においてアーティスト・クリエイターの集積が見られている。一方、都心部の周辺や郊外部においても創造性を活かした活動の展開がみられている。

以上の状況を踏まえ、20 年が経過した創造都市政策について、そのプロセスを整理し、検証するとともに今後の展開について検討を行うことを本研究の目的とし、本稿ではその過程における一連の取り組みについて報告する。

2. 調査の方法

まず、2023 年度に実施した横浜市との共同研究「創造境界拠点にみる社会・地域的インパクトに関する調査研究」において明らかとなった内容について整理した。その上で、これまで創造都市政策に関わってきた専門的知見を有する人材によるワークショップ及びフォーラムを企画し、先の共同研究より得られた知見を下敷きに、議論の柱を設定し、意見交換を行うことで知見を深め、これらからのあり方について検討した。

3. 論点の整理とワークショップ・フォーラムの実施

3-1. 論点の整理

共同研究では、創造境界拠点 4 拠点を対象に拠点開設時からの活動記録及び横浜市が設置した評価委員会における評価をもとにその成果の言語化を目指した。そこでは「社会的価値」と「地域・空間的価値」の 2 つの視点を設定し、かつ、その 2 つの領域が重なる視点として「仕組み・マネジメント」を設定した。

結果として、創造境界拠点は、行政の文化政策を補完する担い手として、文化へのアクセシビリティの確保や文化的環境の形成に寄与してきたほか、市民の創造性を醸成し文化資本形成にも寄与してきたことがわかった。また、これらを通じて社会に対して新たな価値意識を提示し続けてきたといえ、また、そういった活動がアート・エコシステムの構築につながっているといえる。しかしながら、マーケットへの接続性が希薄であることが把握された。このほか、都市空間や歴史的建造物、遊休不動産など多様な空間の活用を通じて再価値化が図られたとともに地域資源の可視化へとつながっており、また、創造的ネイバーフッドの形成が進んでいることが把握されている。さらに、これらの価値が得られる過程において、公設民営型の施設運営によって柔軟性が確保されていたことや拠点ごとの特性を活かした活動展開、そして、芸術文化を核とした上で他領域・他分野を横断した活動展開があったことが確認された。

なお、横浜市との共同研究は、横浜市立大学及び横浜国立大学も実施しており、それぞれ、創造産業の集積動向や創造境界における人的資本の蓄積とネットワークの意義について把握されている。

以上の調査結果を踏まえ、さらにこれまでの政策展開プロセスの検証と今後を展望すべく、次の 3 つの項目を論点として設定した。

1. 創造境界の実現とその展望
2. 創造的人材及び創造的産業の振興とその展望
3. 創造的活動の新規軸(郊外展開とその可能性)

3-2. ワークショップ・フォーラムの構成と実施内容

2025 年 2 月 2 日(日)に「創造都市ワンデIFOーラム」として、ワークショップ及びフォーラム I・II を開催した⁽²⁾。概要は表 1 に示す通りである。

1. 創造境界の実現とその展望
2. 創造的人材及び創造的産業の振興とその展望
3. 創造的活動の新規軸(郊外展開とその可能性)

3-2. ワークショップ・フォーラムの構成と実施内容

2025 年 2 月 2 日(日)に「創造都市ワンデIFOーラム」として、ワークショップ及びフォーラム I・II を開催した⁽²⁾。概要は表 1 に示す通りである。

表 1 創造都市ワンデIFOーラム概要

開催日時	2025年2月2日(日)	開催場所	横浜役所1階アトリウム
第1部	ワークショップ「創造都市×政策評価」		
テーマ	創造境界・創造産業・郊外展開の可能性について3つのテーブルにてディスカッションを行い今後の展開について議論する。		
参加者	創造都市スクール受講生、横浜市職員、秋元康幸(横浜市立大学客員教授)、野原卓(横浜国立大学准教授)、岡部友彦(コトラボ合同会社代表)、上野正也(神奈川大学准教授)、鈴木亮太(神戸松蔭女子学院大学講師)、ファシリテーター：鈴木伸治(横浜国立大学教授)		
第2部	フォーラムⅠ「創造都市×建築」		
テーマ	創造的な空間や場を生み出してきた歴史について振り返り、これからの都市空間やコミュニティのあり方について空間創造者の視点から議論する。		
登壇者	宮我部昌史(神奈川大学教授・みかんぐみ共同主宰)、熊谷玄(STGK Inc.代表)、相澤毅(plan-A代表)、神永侑子(アキオイガーデン・スタジオ共同主宰)、矢内原充志(スタジオニプロール代表)、モデレーター：上野正也(神奈川大学准教授)		
第3部	フォーラムⅡ「創造都市×未来」		
テーマ	創造境界拠点運営者の視点から創造都市のネクストステージのあり方について議論する。		
登壇者	岡部友彦(コトラボ合同会社代表)、小川希(Art Center Ongoing代表)、山野真悟(黄金町エリアマネジメントセンター事務局長)、大越晴子(象の鼻テラス・施設長)、新谷雄一(横浜市にぎわいスポーツ文化局創造都市推進課長)、秋元康幸(BankART 1929副代表、横浜市立大学特任教授)、鍵野 社宏(竹中工務店、(仮)BankPark YOKOHAMA運営責任者)、モデレーター：鈴木伸治(横浜国立大学教授)		

4. ワークショップにおいて得られた知見

ワークショップでは 3 つのテーマを設定し、グループに分け意見交換を行った。グループ 1 は「創造境界」をテーマとした。ここでは、20 年の成果として、アーティストやクリエイターが日常の中にいる風景が実現できるといった意見や、創造境界拠点が取り組むス

*准教授 建築学部建築学科
Associate Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

クール事業をはじめとして、学びが得られる場、交流の場があることによって、アーティストやクリエイター、そして広く市民との交流ができていたなどといった意見が出された。さらには、空きオフィスを創造的な活動によって活用する芸術不動産事業といった社会的な課題の解決手法についても一定の成果として認められるとの意見も出された。このような評価は、3 章にて整理した共同研究の成果と一致する。一方で、20 年という時間的な長さもたらす弊害も指摘されている。例えば、コミュニティの固定化や創造界限拠点同士の横のつながりの弱さなどである。さらには、政策の柱としての「創造界限」について広く共通の理解を形成できていないのではないか、という意見も出された。

今後の方向性としては、幅広い世代のコミュニティ形成のほか、関内、関外地区だけではなく郊外部への創造界限の拡大という可能性もあるのではないか、という意見が出された。その上で、取り組むべきアクションとして、情報発信の強化や、アーティスト・クリエイターを再定義すること、さらには価値の見える化や、創造界限の範囲の拡大などが指摘された。

次に「創造産業」をテーマとしたグループ2では、都心部（あるいは都心臨海部）を中心に、ITや建築を中心としたクリエイティブクラスターができつつあるといった指摘や、それらを中心としたネットワークやコミュニティが形成されてきているという意見が出された。一方で、企業間の連携や、他の産業との連携の希薄さが指摘され、また、文化系と経済系の政策連携が不十分であるとの意見も出された。今後の方向性としては、産業間の連携強化、あるいはIT系と文化芸術系が融合するクラスターをつくっていく流れができないかという意見が出た。

また、取り組むべきアクションとして、異業種間のコラボレーションやネットワークづくりを行政等がサポートしていくことや、経済系の政策の中に、創造産業の振興施策をうまく組み込んでいくことも必要であるという意見が出ている。

グループ3は「郊外展開の可能性」について議論がなされた。昨今の事例として、左近山団地や弘明寺、藤棚商店街などにおいて、創造的活動を核としたまちづくりが既に生まれている。そこでは、例えばアートフェスティバルを通して、地域の多様な人々のつながりも実現できてきている事例もあることから、実践を通して成果が出ていることが確認された。しかし、郊外でプロジェクトを実施する際、継続的な資金面の問題やコミュニティをどうつくっていくか、さらには、担い手の問題があると指摘されている。

今後の方向性としては、活動をPRし、広く市民に知ってもらうことや地域のキーマンや人材を探すことが求められるといった意見が出された。さらに、取り組むべきアクションとしては、郊外に存在する公共施設をオープン化することで拠点を形成できるといった意見や、公共施設や公園、空き家など、地域資源を活用して交流を育むスペースを増やしていくことや、創造都市の郊外展開を含む、新たな文化のビジョンづくりが必要ではないかという意見が出された。

5. フォーラムⅠ・Ⅱにおいて得られた知見

5-1. フォーラムⅠ【創造都市×建築】

フォーラムⅠでは、建築・ランドスケープ・不動産・デザインを

専門とした空間創造者を中心に議論を行なった。そこでは、自身のこれまでの活動についてプレゼンテーションした上で、創造都市横浜に対する現在地の整理から創造界限のあり方、これからの創造的活動のフィールドとしての空間のあり方について議論した。その主な内容を表2の通りにまとめる。

表 2

論点	意見・評価ポイント	課題点
創造都市の 現在地	・公共空間の利活用に向けた実験的取り組みに対する評価 →「あつめるみなぶ」などの実験的な取り組み ・初期に活動してきた創造的人材の立ち位置の変化 →事業をプロデュースするなど立場変化 ・行政主導から民間主導へ、その内容の充実化へ ・創造都市という考え方のDNA ・エリアのプレイヤーとしての期待感、働きかけがあること	・当初の熱量が減っている ・世界的認知や横浜のアイデンティティーとしての広がりがない ・郊外展開における文脈的つながりが必要 ・成熟した状況と参入障壁に対する危機感 ・ブランドと都市の共通点より、横浜という都市がどのように自分の姿を把握するのが大事 ・コミュニティはつくるのではなく個人の活動や領域が重なり合うところに発生するもの
空間像	・BankARTNYKのバブのようにさまざまなセクションの人が集まって話し合える場があった。 ・分業型で非効率なところに価値を見出す必要がある。 ・1ヶ所のオフィスに集めるのではなく、2個目、3個目のオフィスを借りたら受けるなど、隙間をつくるような制度があるというではないか。 ・機能分散させることでエリア価値を高めることができる。 ・街路幅が小さいことで多くの道路空間があることからもっとうまく活用を考える必要がある。 ・弘明寺など、創造界限に変わる新たなネーミングがあるというのではないか。	・限じた空間を確保必要がある。コミュニティは空間と思想の共有からなる。 ・実際に住んで生活している人と建物の運営やまちづくり活動のプレイヤーがつながっていない。関係作りが必要。 ・関内は空きビルが減って賃料も高くなっている。 ・さまざまな立場の人が平等で集まる場が必要。 ・公共空間の使い方をもっと踏み込んで実際に変化を起こすことが必要。一面的な広がりを実現することができる。

5-2. フォーラムⅡ【創造都市×未来】

フォーラムⅡでは、創造界限拠点の既存の運営団体に加え、これから活動を開始する団体も交えながら今後の可能性について議論した。そこでは、新しい拠点運営者によるプレゼンテーションから始まり、既存の各拠点活動について報告がなされた。後半は創造都市横浜におけるこれからのビジョンやこれからの活動展開について議論された。その主な内容を表3の通りにまとめる。

表 3

論点	意見
これからの 展開と課題	・横浜区と港南区といった都心臨海部外での取り組みに対する評価 →単なるイベントではなく、長い時間をかけてコミュニケーションをとり人間関係を構築していることが重要 ・拠点同士のつながりの希薄さ(課題) →企画を通じてつながりをつくっていく方法 ・横浜で活動する意義を再確認すること →横浜：都市的な発信力や集積力がある一方でみえるコミュニティもある（アーバンビレッジ）ことが特徴 ・Bank Park YOKOHAMAの資源循環(アップサイクル)と創造性の掛け合わせは今までなかった一新しい事業として期待 ・未来の形としては、都心部の創造的人材が市主体・各区で市民や企業と協働する姿→市民理解の深化・創造都市政策の有効性へ ・横浜をいかにオープン化するかを拠点として考える。 ・情報発信は取り組むべき課題。
アートに関 ない創造 性を捉えら す	・政策のターゲットとして、アーティストやクリエイターといった枠を広げる必要があるのではないか。 ・郊外展開する際は必ずしも都心部と同じ方針とは限らない。 ・都心部でもIT系や福祉系など他分野との連携が求められる。 ・その地域にあったクリエイティビティが求められる。 ・文化と経済をどう組み合わせいくが重要。作品づくりと販路・流通を同時に考える。 ・様々な産業がクリエイティブな力を使って経済的にも良くなることが重要。

6. まとめ

以上の通り、横浜市との共同研究において得られた知見を出発点として、「創造都市ワンデイフォーラム」を実施した。その上で、創造都市政策のプロセスについて、その成果を顕在化し、さらには、課題を整理することができた。特に成果としては、創造界限における創造的人材の集積は進み、また、そこで培われた経験が他の地域での活動へ展開されている様相(創造性のリレー)が把握された。さらには、公共空間などの活用を活かした面的展開への可能性も指摘されていることや、郊外展開における新しい「型」を模索することが重要であることから、今後より官民一体型の政策推進が求められるといえる。

【補注】

- (1) 横浜市では「創造都市施策」としているが、当初は領域を横断する総合的な政策として位置付けられていたことから本稿では「創造都市政策」とする。
- (2) 横浜市大が事業推進する「創造都市スクール」との共同で開催した。また、横浜市も共催者として参画している。

三次モーメント指数正規変換と構造信頼性への応用

白井 佑樹* 蔡 嘉儀** 趙 衍剛*** 島崎 和司****

A Third-Moment Exponential Normal Transformation and Its Application in Structural Reliability

Yuki SHIRAI* Jia-Yi CAI** Yangang Zhao*** Kazushi SHIMAZAKI****

1. 緒言

構造工学における信頼性設計は、耐震性や長寿命化を目的とした重要な要素である。ここでの構造信頼性とは、構造物が所定の性能を確率的に満たすかどうかを定量的に評価する枠組みであり、荷重作用や材料強度、施工誤差など多くの不確実性を含む入力要因に対して構造物がどのように応答するかを評価することが重要である。

従来の信頼性解析手法では、確率密度関数（PDF）や累積分布関数（CDF）の完全な情報が必要とされるが、実際の設計や評価の現場では、十分な統計データを収集することが困難である場合が少なくない。特に新しい材料や特殊な構造形式を用いる場合、事前に詳細な分布情報が得られないことも多く、そうしたケースでは既存の正規変換手法の適用は制限されていた。

そこで本研究では、平均値、標準偏差、歪度という「三次モーメント情報」のみを用いて構造信頼性解析を可能とする、新たな指数型の正規変換手法を提案する。本手法は数学的に単純かつ明示的な形で表現可能であり、従来法よりも広い適用範囲と計算効率の高さを特徴とする。

2. 提案手法

提案する x - u 変換は以下の(1)式で記述される。

$$u = \frac{x_s}{8} \left[5 + 3e^{\frac{\alpha_{3x} x_s}{2} \left(-1 + \frac{\alpha_{3x}}{20} \right)} \right] + \frac{\alpha_{3x}}{6} \quad (1)$$

ここで α_{3x} は歪度、 x_s は平均と標準偏差により標準化された変数である。 $x_s = (x - \mu_x) / \sigma_x$ により求められ、対象となる確率変数 x の平均を μ_x 、 x の標準偏差 σ_x をとする。

図1に示すように本変換式は、従来のような平方根、対数、逆関数などの非線形要素を含まず、任意の分布形状に適用可能である点が大きな特徴である。特に従来法では困難であった非対称分布や歪度の大きな変数に対しても有効に機能する。

*准教授 建築学科

Associate Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**大学院生（工学研究科建築学専攻博士後期課程）

Graduate, Course of Architecture and Building Engineering

***客員教授 建築学研究所

Visiting Professor, Institute for Architecture and Building Engineering

****名誉教授 建築学科

Professor Emeritus, Dept. of Architecture and Building Engineering

3. 数値検証

提案した x - u 変換の逆変換 (u - x) は解析的に求めることが難しい

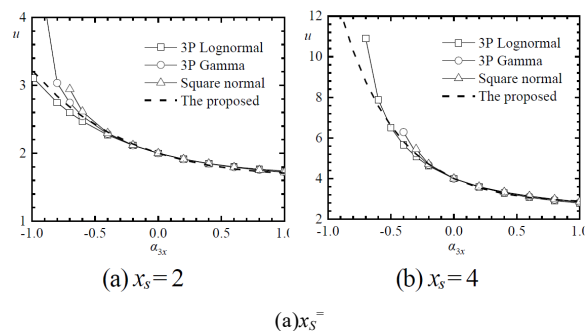


図1 x - u 変換の比較

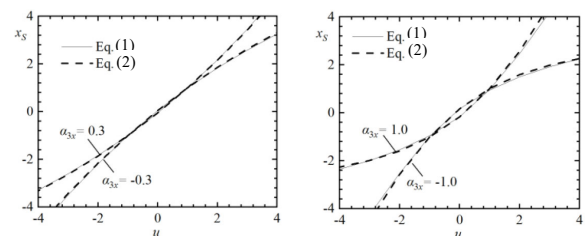


図2 各分布における変換誤差の比較と適用範囲の視覚化が、近似式を用いることで十分な精度で再現可能である。本研究では、(1)式で定義された x - u 変換の逆変換として、以下の近似式 ((2) 式) を提案する。

$$u = \frac{u}{3} \left[1 + 2e^{\frac{u \alpha_{3x}}{4} \left(1 - \frac{u \alpha_{3x}}{16} \right)} \right] - \frac{\alpha_{3x}}{6} \quad (2)$$

この式は、三次モーメントに基づく変換において、標準正規変数 u から元の変数 x を推定するために用いられる。試行誤差法により導出されたものであり、歪度 α が -1 から $+1$ の範囲において高い精度を保つ。特に、変換誤差は相対誤差で約 1.67% であり、実用上十分な精度を有することが図2でも示されている。

4. 指数型3母数分布の導出と特性

この章では、提案手法の精度と適用性を、具体的な数値例を用いて検証する。対象とする分布は、Gamma 分布、Gumbel 分布、Weibull 分布など代表的な非対称分布であり、それぞれ異なる歪度と変動係数を持つ6つのケースに対して検討を行った。

まず、それぞれの分布について三次モーメント（平均、標準偏差、

歪度)を算出し、それをもとに提案手法を用いた $x-u$ 変換を実施した。その結果を、従来の 3P 分布を用いた変換結果および Rosenblatt 変換を用いた理論値と比較した。

図 3 に示すように、既存の変換手法では、変数の歪度が大きくなるにつれて適用範囲に制限が生じ、変換誤差が顕著に現れる。一方で、提案手法はすべてのケースで良好な一致を示し、特に歪度が ±1.0 以上のケースでも安定した変換が可能であった

提案された指数型変換式に基づき、新たに三母数 (3P) 分布を定義することができる。これは、歪度を含む三次モーメント情報のみから確率密度関数 (PDF) および累積分布関数 (CDF) を構築する方法である。この分布は歪度がゼロの場合に標準正規分布に一致し、歪度が正・負のいずれの場合でも連続的に変形することで、現実の非対称分布形状をよく再現する。また、Gamma 分布や対数正規分布などの既存分布とも高い一致性を持つ。

図 3 には、歪度の異なる複数のケースに対して提案分布と既存の代表的分布 (Beta, Gumbel, 対数正規など) を比較した結果を示しており、提案分布の柔軟性と汎用性の高さが確認できる。

5. 信頼性指標と耐力係数設計への応用

構造設計における信頼性指標 β は、設計荷重に対する抵抗性能の信頼度を数値化したものであり、LRFD (Load and Resistance Factor Design) における設計基準値の決定に用いられる。

本研究では、提案手法に基づき、三次モーメント情報のみから計算可能な指数型信頼性指標 β_{3M} を以下の(3)式により定義した。

$$\beta_{3M} = \frac{\beta_{2M}}{8} \left[5 + 3e^{\frac{\alpha_{3G}\beta_{2M}}{2} \left(1 - \frac{\alpha_{3G}}{20} \right)} \right] - \frac{\alpha_{3G}}{6} \quad (3)$$

ここで、 β_{2M} は第二モーメント法に基づく信頼性指標である。

この指標を用いることで、任意の目標信頼度に対して必要な耐力係数を簡便に導出できる。特に、高い信頼度 ($\beta > 3.0$) を目指す場合、既存手法では設計値が過剰になる傾向があるが、提案指標を用いることで過度な保守設計を避けつつ、確実な安全性を確保できる。

図 4 は、4 つの異なる分布組合せにおける三次モーメント信頼性指標 (β_{3M}) と、第二モーメント信頼性指標 (β_{2M}) との関係を示すものである。図中の曲線は、提案された指数型 β_{3M} モデルの適用結果である。

各ケースでは、荷重 S の平均 μ_S を段階的に変化させ、提案手法 (3M 変換) による信頼性指標と既知の PDF/CDF に基づく FORM との比較を行った。いずれのケースでも、提案手法は FORM と良好に一致し、分布情報が不明な場合でも実務的に有用であることが示された。

6. 結語

本研究では、三次モーメント (平均値, 標準偏差, 歪度) のみを用いた指数型の正規変換手法を提案し、その構造信頼性解析および設計応用への有効性を示した。得られた知見は以下のとおりである。

- ・提案する指数型正規変換は、数学的制約がなく、あらゆる分布形状に適用可能である。
- ・この変換に基づく 3 母数分布は、従来の分布を包含し、非対称性や歪度のあるデータにも高い精度で対応可能である。
- ・信頼性指標 β_{3M} は、目標信頼度の達成に適した耐力係数の設定を可能にし、高信頼設計への応用に有効である。
- ・数値例により、提案手法は理論的整合性と実務的有効性の双方を満たすことが確認された。

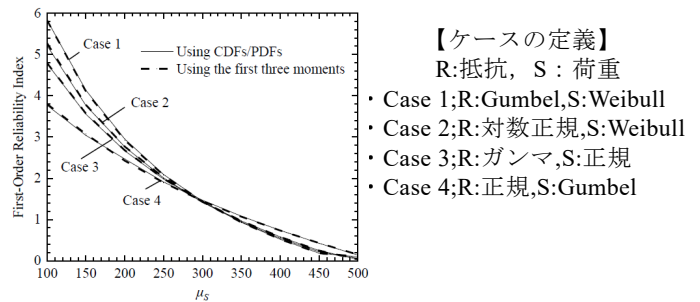


図 4

信頼性指標 β_{3M} と β_{2M} の関係および LRFD への応用結果の比較

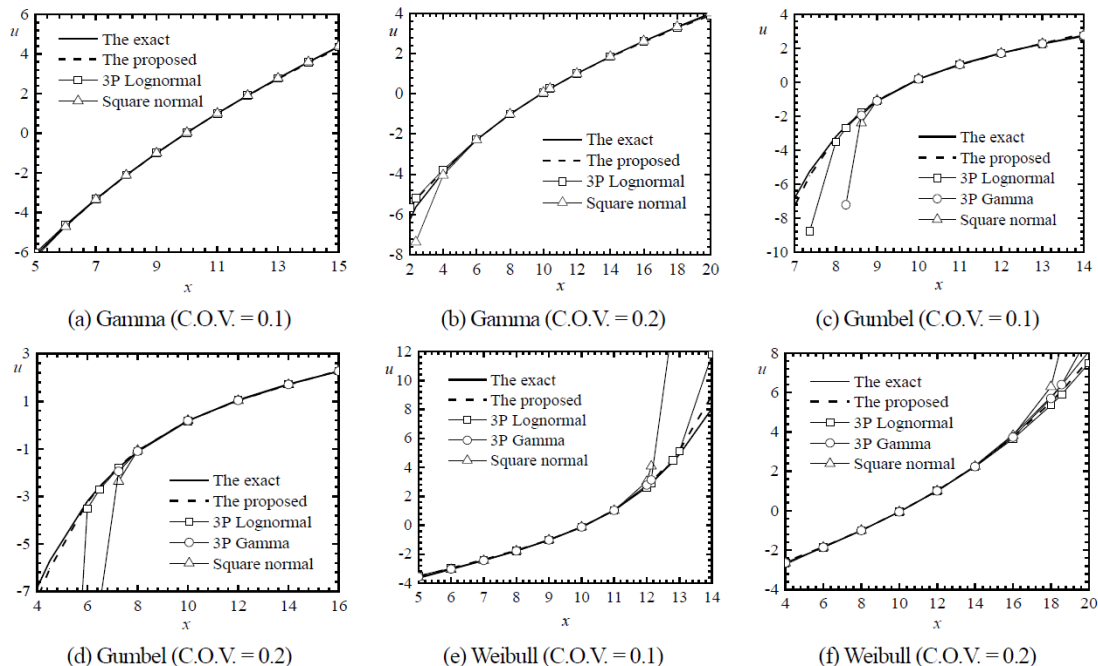


図 3 提案分布と代表的既存分布との PDF および CDF 比較

韓国の教会建築に関する研究

一戦前期に建設された「韓屋教会」にみる伝統性の表現について

姜 明采*

The research on Korean church architecture: The expression of tradition in “Han-ok church” built in prewar

Myungchae KANG*

1. 緒言

1876年の開港をきっかけに輸入された西洋文化は、韓国の伝統社会で経験したことのない様々な変化をもたらした。そうした西洋文化の一つとして、「カトリック」からなるキリスト教は現在、人口の約 1/3 が信者であるほど韓国を代表する宗教となった。このキリスト教の拠点となる教会建築は、以下の 6 段階で時代区分される。

- ① 開花期：1876-1910 年（キリスト教の伝来から韓国併合まで）
- ② 日本統治時代前半：1910-1925 年（折衷様式中心の教会建築期）
- ③ 日本統治時代後半：1925～1945 年（教会建築の沈滞期）
- ④ 再建期：1945-1971 年（解放から 2 次経済開発 5 カ年計画まで）
- ⑤ 成長期：1971-1986 年（3 次経済開発から 5 次経済社会発展まで）
- ⑥ 定着期：1986 年-現在¹

このうち、「開花期」と題される初期の教会建築は、信者迫害で既存の韓屋をそのまま利用していたが、開港による諸制限の緩和で信仰の自由が与えられた 1880 年代以後、伝統韓屋に教会建築の要素を加えた「韓屋教会」が土着化の一環として登場し全国へ展開された。残念ながら、信者急増による新築等によりその姿は殆ど残っていないが、韓屋教会は西洋の新しい文化が輸入される中で韓国建築の伝統性を意識していた重要な動向であると考えられる。

そこで筆者は①開花期から③日本統治時代後半までの、戦前期に建てられた韓屋教会に注目し、現存事例を中心にその建築的特徴を整理しながら建築における伝統性の表現手法を研究している。本稿は、その進捗を報告するものである。

なお、本稿で用いる「教会建築」は、カトリック・プロテスタント・大韓聖公会で大別されるキリスト教宗派の教会・聖堂・公所といった韓国の礼拝堂建築全てを指すこととする。

2. 研究対象・方法

筆者は『国登録文化財及び近代史跡定期調査』や修理工事報告書をはじめとする既往研究²で情報が特定できた 23 か所の韓屋教会

(図 1) を研究対象として、文献調査ならびに現地調査 (2024 年 12 月 25 日～1 月 3 日, 2025 年 2 月 25 日～3 月 5 日) を実施した。

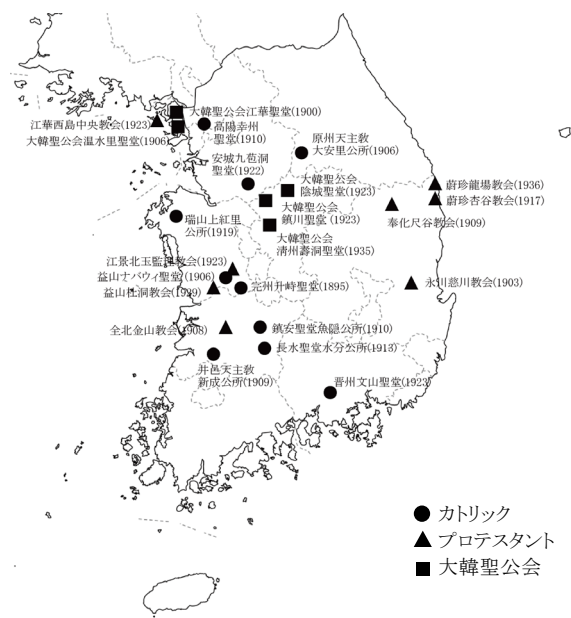


図 1 研究対象とした韓屋教会 (筆者作成)

3. 戦前期における韓屋教会の特徴

調査で確認できた韓屋教会の特徴は以下の通りである (表 1)。

まず、設計者が特定できた 17 例のうち、10 例は外国人神父、5 例は韓国人神父・牧師、3 例は韓国人信者³の教会関係者であった。

各教会の立地状況は、丘の上に建ち、まちを展望できるのが 15 例、市内の平坦なエリアに建つのが 8 例で、いずれも信仰の場所でありながら、地域住民の交流拠点としての役割を担っていた。現在は老朽化や文化財指定による使用制限等を理由として隣地に本堂を設け、韓屋教会は特別行事の際に使用することが多い。

平面形式は、バシリカ形式の影響がうかがえる長方形 3 廊廊が 14 例で最も多く、正方形、L 字形等も確認できた。このうち、後述する L 字形平面の教会は男女有別の理念のもとで誕生したもので、「ㄣ字教会 (本稿では便宜上『L 字形教会』と称する)」と命名された。

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

また、信仰の場合案内する教会の出入口は、伝統韓屋にみる平入りが2例のみで、西洋の教会建築にみる妻入りが10例、平入り・妻入りを両方採用したのが11例であった。このことから、集会場所として内部空間を広く演出しようとしたことが考えられる。窓は伝統韓屋にみる横長の形状が16例で、床に座った状態で外が見にくい高さで設定し、外部との断絶を意識した様子もうかがえた。

外観は漆喰で壁を塗り、瓦屋根をかぶせた平屋建ての形状が18例で、とりわけ、屋根形状は伝統韓屋にみる入母屋形状が19例でみられた。一方、外壁に煉瓦を使用し、ガラス張りの窓を用いるなど洋風意匠の要素を持つ外観に、伝統木構造で、入母屋屋根をかぶせて伝統性を表現した「韓洋折衷式」⁴は5例で確認できた。

なお、敷地内に鐘塔を設けた18例のうち、14例に十字架が掲げられており、教会の目印としていたことも読み取れた。

4. 男女有別の理念を尊重したL字形教会

さて、韓屋教会では形や構造だけではなく、精神性の面からも伝統性を意識していた様子がうかがえた。

キリスト教の布教活動において、韓国社会に根付いていた儒教思想、とりわけ、男女有別の理念は尊重すべき課題であり、教会建築を通して様々な試みが行われた。まず、宣教師の自邸など長方形の伝統韓屋をそのまま利用した初期の教会は、男女の礼拝時間を分けるか、性別で出入口と座席の位置を分離し、堂内中央に幕や間仕切り壁を設置したという。のちに信者の急増によって教会の新築が求められ、その中で登場したのが、プロテスタントの宗派によるL字形教会であった。現存する最古事例である全北金山教会（図2）をみると、南側を男性信者、東側を女性信者専用で出入口と礼拝空間を分離し、礼拝堂の土着化を試みたことがわかる。こうしたL字形教会は戦前期に全国へ広がるが、老朽化等により2例のみ現存している。現存事例は、韓国の初期教会建築の特徴を読み解き、伝

統生の表現手法を検討する貴重な事例であるといえよう。

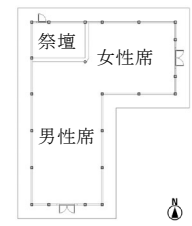


図2 全北金山教会（1908年竣工）の外観・簡易平面図⁵（筆者撮影・作成）

5. まとめ

本稿では戦前期に建設された韓屋教会のうち現存する23か所を中心にその建築的特徴を概観し、外観を中心に伝統性を表現していたこと、儒教思想のもとでL字形教会という新しい形状が登場したことを紹介した。引き続き関連資料を収集し個々の建築的特徴と伝統性の表現手法を検討するとともに、今後は同時期における日本と中国の木造教会との比較分析も行いたい。

【注】

- [1] アン・ウンヒョン『韓国開化期の教会建築に関する研究-1876-1910年まで現存する教会を中心に-』湖西大学校博士論文、53-55 (2007)。
- [2] 韓国文化財庁『国登録文化財及び近代史跡定期調査』(2021-2023)/リ・ウォンギョウ『20世紀初伝統様式教会建築の架構式構造特性と変容に関する研究』明知大学修士論文 (2016)/大韓聖公会江華聖堂・益山ナパウィ聖堂・大韓聖公会温水里聖堂・鎮安聖堂魚隠公所・原州天主教大安里公所・長水聖堂水分公所・瑞山上紅里公所・瑞山上紅里公所・蔚珍杏谷教会・江景北玉監理教会の記録化調査報告書、ほか。
- [3] 原州天主教大安里公所は、外国人神父と韓国人信者の共同設計であると推定されているため、各項目でカウントした。
- [4] 金正神『歴史、典礼、様式にみる韓国の教会建築』図書出版ミセウム、175-177 (2012)。
- [5] 現地調査と、注[2]『20世紀初伝統様式教会建築の架構式構造特性と変容に関する研究』の掲載図面を参考に作成した。

表1 戦前期における韓屋教会の特徴

竣工	教会	宗派	敷地	建築様式	設計者	屋根形状	層	鐘塔	外壁材料	窓	十字架	平面形式	出入口
1895 (2009)	完州升特聖堂（復元）	天主教	丘	伝統韓屋	Villemot, Marie-Pierre Paul	入母屋	単	○	漆喰・石	横長	鐘塔	長方形	平入・妻入
1900	大韓聖公会江華聖堂	大韓聖公会	丘	韓洋折衷	Mark Napier Trollope	入母屋	重	○	漆喰・煉瓦	横長	屋根上部	長方形3廊式	平入・妻入
1903	永川慈川教会	プロテスタント	平地	伝統韓屋	Kwon Hun Joong	寄棟	単	○	漆喰	横長	鐘塔	長方形3廊式	平入・妻入
1906	益山ナパウィ聖堂	天主教	丘	韓洋折衷	Josephus Vemorel	入母屋	重	○	煉瓦	縦長・八角	鐘塔・柱上部	長方形2廊式	平入・妻入
1906	大韓聖公会温水里聖堂	大韓聖公会	平地	伝統韓屋	Mark Napier Trollope	入母屋	単	○	漆喰・石	横長	屋根上部	長方形3廊式	妻入
1906	原州天主教大安里公所	天主教	丘	伝統韓屋	Kim Won Sik / Desert, Emile-Alexandre Joseph	入母屋	単	○	漆喰	横長	鐘塔	長方形	妻入
1908	全北金山教会	プロテスタント	平地	伝統韓屋	Lewis Boyd Tate	寄棟	単	○	漆喰	横長	鐘塔	L字形	妻入
1909	井邑天主教新成公所	天主教	丘	伝統韓屋	-	入母屋	単	○	漆喰	縦長	鐘・床下開口	長方形3廊式	平入・妻入
1909	奉化尺谷教会	プロテスタント	丘	伝統韓屋	Kim Jong Sook	半切妻	単	○	漆喰	横長	妻壁・鐘塔	長方形	平入
1910	鎮安聖堂魚隠公所	天主教	丘	伝統韓屋	-	入母屋	単	○	漆喰	横長	鐘塔	十字形	平入・妻入
1910	高陽幸州聖堂	天主教	丘	伝統韓屋	Kim Won Young	入母・切妻	単	○	漆喰・煉瓦・石	横長	妻壁	長方形3廊式	妻入
1913	長水聖堂水分公所	天主教	丘	伝統韓屋	Lee Sang Hwa / Kim Yang Hong	入母屋	単	-	漆喰	横長	妻壁	長方形3廊式	平入・妻入
1917	蔚珍杏谷教会	天主教	平地	伝統韓屋	-	入母屋	単	○	漆喰	横長	鐘塔	長方形3廊式	平入
1919	瑞山上紅里公所	天主教	平地	伝統韓屋	Desiderius Polly	入母屋	重	○	漆喰	縦長・横長	鐘塔	長方形3廊式	妻入
1922	安城九苞洞聖堂	天主教	丘	韓洋折衷	Victor Louis Prinsel	入母屋	重	○	漆喰・煉瓦・石	縦長・横長	屋根上部	長方形3廊式	妻入
1923	晋州文山聖堂	天主教	平地	伝統韓屋	Kim Yang Hong	入母屋	単	-	漆喰	横長	屋根上部	長方形3廊式	平入・妻入
1923	大韓聖公会鎮川聖堂	大韓聖公会	丘	韓洋折衷	George Ernest Hewlett	入母屋	単	-	煉瓦	縦長	妻壁	長方形3廊式	妻入
1923	大韓聖公会陰城聖堂	大韓聖公会	平地	伝統韓屋	-	入母屋	単	○	漆喰	縦長	鐘塔	長方形3廊式	妻入
1923	江華西島中央教会	プロテスタント	丘	伝統韓屋	Yoon Jeong Il	入母屋	単	○	漆喰・石	横長・八角	鐘塔	長方形3廊式	妻入
1923	江景北玉監理教会	プロテスタント	丘	伝統韓屋	Lee In Bum	入母屋	単	-	漆喰・煉瓦	横長	屋根上部	正方形	平入・妻入
1929	益山杜洞教会	プロテスタント	平地	伝統韓屋	-	寄棟	単	○	漆喰	横長	鐘塔	L字形	平入・妻入
1935	大韓聖公会清州壽洞聖堂	大韓聖公会	丘	韓洋折衷	Allied Cecil Cooper	入母屋	単	-	漆喰・煉瓦	縦長	妻壁・屋根上部	長方形3廊式	妻入
1936	蔚珍龍湯教会	プロテスタント	丘	伝統韓屋	-	入母屋	単	○	漆喰	横長	鐘塔	長方形	平入・妻入

能登半島地震の被災・復旧・復興状況の調査

落合 努* 朱牟田 善治**

Survey of Damage, Restoration, and Recovery from the Noto Peninsula Earthquake

Tsutomu OCHIAI* Yoshiharu SHUMUTA**

1. はじめに

2024年1月1日に発生した能登半島地震は、石川県輪島市や志賀町で最大震度7を観測し、多くの木造家屋やインフラ施設で被害が発生した。筆者らは、地震発生後の1月下旬から3月下旬にかけて複数回現地を訪れ、被害状況やその原因について調査を進めている。

本報告は、上記現地調査を基に発表した、文献¹⁾と文献²⁾をベースに一部修正したものである。詳細な分析はまだこれからであるが、調査を実施したエリアの中から、七尾市を対象とした結果の速報をここに示す。

2. 対象エリアの概要

検討対象エリアは、速報データとして公開された建物被害や道路の交通状況などを勘案して設定した。建物被害の速報は、被災直後から様々な機関から公開されていた。ここでは主に、比較的広範囲の建物被害の分布が示されていた株式会社パスコ様によるデータを用いた。このデータは、衛星画像から建物被害の判読が行われたデータである。地震発生直後の1月2日に撮影された衛星画像を用いて建物被害が推定されており、1月11日にインターネット上に公開されたものである。調査エリアの全景を図1に示す（ここでは七尾市のみを報告）。

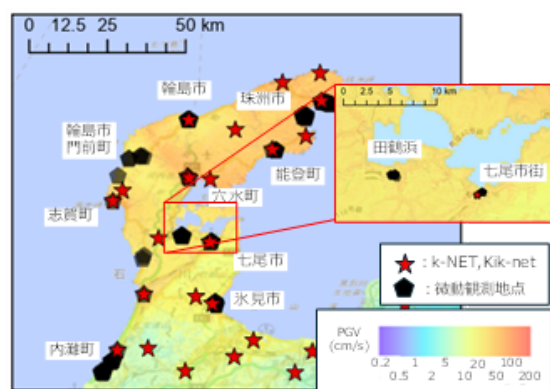


図1 調査対象絵エリア（背景は最大速度分布）

*助教 建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering
**教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

3. 建物被害調査

前述した衛星画像による建物被害分布を参考に、同程度の地震動強度でも建物被害に顕著な差が出ていることが想定された、七尾市田鶴浜（被害大）と七尾市街（被害小）と二つエリアに着目し現地調査を行った。

建物被害調査は、外観での被害程度での判定を基本とする³⁾。現地で被害判定までを判定する現地調査と、現地では建物正面からの写真を撮影し後日写真から判定の行う写真判定の2つの方法を実施した。いずれの調査も、1月26日と27日に行っている。ここでは速報として、現地調査の結果のみを用いている。

それぞれの地区の被害レベル別割合を図2に示す。現地長の結果は、衛星画像による建物被害分布との傾向は一致している（ただし、衛星画像による調査では、被害なしと判定されていた多くの建物で被害が確認された）。

被害大の田鶴浜では、比較的被害が顕著であるD2-5の建物が65%と甚大な被害率であったのに対し、七尾市街では同被害率は42%とその違いが大きい。

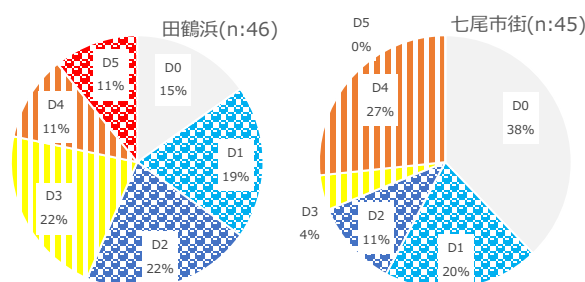


図2 外観調査による被害レベル別割合

4. 常時微動観測と地盤震動特性の検討

4.1 常時微動観測と強震記録

田鶴浜と七尾市街で、それぞれ数か所で常時微動の単点観測を実施した。観測地点と後述するボーリングデータの位置を図3に示す。被害が大きかった田鶴浜では、中でも被害が小さく、岩盤の露頭が確認できた2地点での観測も実施している。観測は、100Hz サンプリングで5分程度とし、水平成分を上下成分で除してH/Vスペクトル比（以下、MHVR）を算出した。スペクトルは、ウインドウ幅0.2HzのPrezenWindowで平滑化している。

また、比較のために七尾市街の強震観測点（ISK007）の記録から、

常時微動同様に H/V スペクトル比 (EHVR) を算出した。グラフは、本震と計測震度が 2 の余震記録 (5 記録) を重ね書いている。

まず、それぞれの MHVR は田鶴浜の路頭付近の記録を除くと、地区内では概ね同等なスペクトル形状を示していることが確認できる。田鶴浜の路頭付近は、他の地点と比べるとピークが小さい。

2 地区比較すると、ピーク振動数は田鶴浜のピークは約 0.7Hz なのに対し、七尾市街は 1Hz とやや高振動数となる。また、ピーク値は田鶴浜の方が大きく、形状も鋭い。

ISK007 の強震記録と七尾市街の微動記録を比較すると、余震記録はほぼ同等な特性を示すが、本震ではピークがやや低振動数側に变化している。

4.2 地盤特性を考慮した検討

常時微動測定エリアを対象に、ボーリングデータから地盤状況を確認した 4)。田鶴浜は、2 データと限定的であり、その 2 か所の表層地盤の土層構成で差異が大きく、エリアとして複雑な地盤は構造を有していることが示唆される。一方で、2 か所とも地表から 5-7m 程度で N 値 50 以上の岩盤となり、エリア全体としては比較的浅部から硬質な地盤が分布していることが想定できる。

七尾市街は比較的多くのボーリングデータがオープンとなっている。調査地区を囲むように 3 か所のデータを確認すると、N 値 50 以上が連続する深度は GL-30m 程度である。また表層で N 値 1 程度の非常に軟弱な地盤が 20m 程度確認されやや軟弱な地盤特性であることが示唆される。

卓越振動数と層厚から 2 層地盤と仮定し、四分の一波長で概略の Vs を計算すると、七尾市街は約 160m/s と N 値とも比較整合的となる。一方で、田鶴浜は、そのまま計算すると表層の Vs は 20m/s と極端に小さくなり、地盤の非線形性や深部地盤についてさらなる検討が必要と考える。

4.3 微動アレイ探査

微動アレイ探査は、観測した時刻歴波形から Tda et al. (2010) により位相速度を算出した。観測位置を図 3 に、位相速度を図 5 に示す。図 5 から、3 地点の位相速度は大きく異なることがわかる。

5. まとめ

能登半島地震の七尾市で建物被害程度が異なる地域について、常時微動を用いた地盤特性の比較を行った。二つの地域では、MHVR の特性が異なることから地盤増幅も異なり、それが建物被害の違いの要因の一つとであることが示唆された。一方で、そもそも建物自体の特性が地区で異なる可能性があること、地盤の非線形性や深部地盤の影響も考えられる。また、能登地域は上下動の増幅が大きく MHVR での評価が難しいとの報告もあり、今後さらにデータ収集などを進め検討を継続したい。

【参考文献】

- [1] 落合、朱牟田、能登半島地震の建物被害と地盤特性 -七尾市を対象とした検討速報-、日本建築学会学術講演梗概集 (関東)、21007、構造 II、13-14 (仙台、2024. 7)。
- [2] 落合、朱牟田、小田、長谷川、荏本、2024 年能登半島地震の被災地における微動アレイ探査、物理探査学会第 151 回学術講演梗概集、講演番号 36、70-71 (宮崎、2024. 12)。

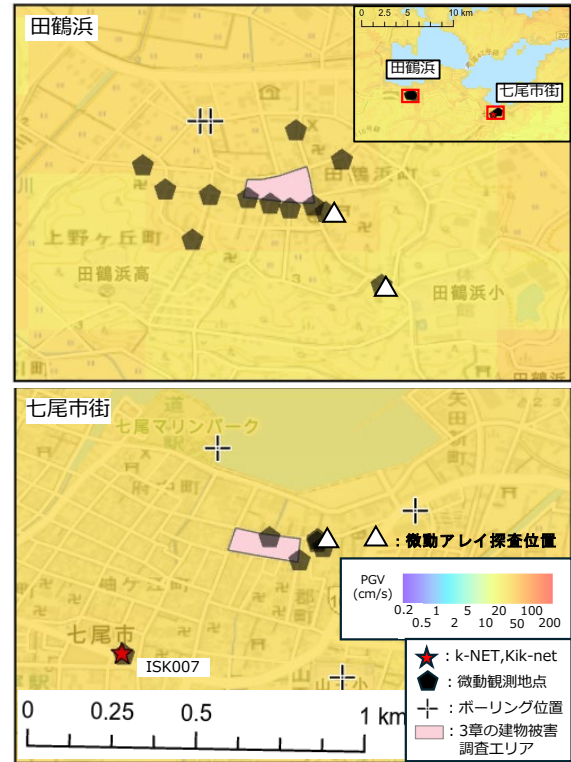


図 3 外観調査による被害レベル別割合

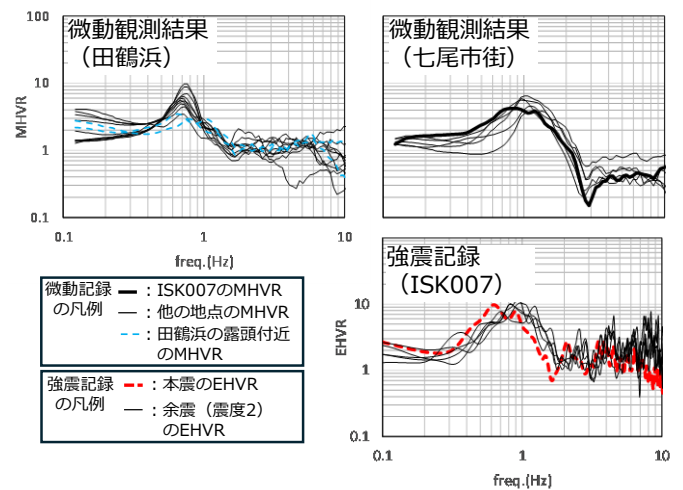


図 4 単点微動と強震記録の H/V スペクトル比

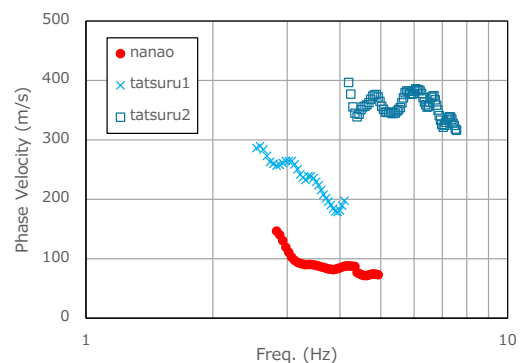


図 5 微動アレイ探査結果から求めた位相速度

研究分野紹介および研究活動

2024 年度

建築学系 構造コース

研究分野紹介

新機能型構法研究室

(白井佑樹 准教授)

コンクリート系構造の耐震性能および継続使用性能の定量的評価を目指した実験研究、各種材料の特性を活かした新しい機能を持った構造形式の提案と開発

耐震・耐風構造研究室

(吉江慶祐 教授, 楊暁雨 助教)

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的挙動とその予測法に関する研究、制振構造・免震構造の耐震および耐風構造安全性の検証方法・設計法に関する研究

サステナブル建築構造研究室

(藤田正則 教授, 小寺直幸 助手)

建築鋼構造分野において、建築構造を骨組・部材・接合部・材料に分類して総合的に捉える構工法から、分析的に捉える実験と解析、さらにそれらを実現するための設計までの全般にわたる研究を行っている

地震工学, 災害リスクマネジメント研究室

(朱牟田善治 教授, 落合努 助教)

地盤・構造物の振動特性・劣化特性の評価、サイスミック・マイクロゾーニング手法の開発、災害リスク評価手法の開発、地域防災力の評価方法の開発

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(欧文誌)

1. M. Fujita, K. Awazu, M. Nakamura and M. Iwata, Effects of the unevenness on infilled material surface of the restraining parts on the structural performance of the buckling-restrained brace using steel mortar planks, Steel Construction, Vol. 7, 212-222 (2024. 11).

(和文誌)

1. 佐藤宏貴, 坂上教夫, 白井佑樹, 島崎和司, ボイドスラブの長期たわみに関する実験的研究(その2): ボイドスラブの長期たわみ実用的計算法, 日本建築学会構造系論文集, 89 (822), 869-876 (2024. 8).
2. 白井佑樹, 島崎和司, 中村一男, 佐藤宏貴, 松浦

恒久, 面格子に無垢板を嵌合した耐力壁のせん断性能(その2): 面材を組み込んだ架構の復元力特性の算定, 日本建築学会構造系論文集, 89 (818), 428-438 (2024. 4).

3. 吉江慶祐, 変動風力を受ける弾性構造物のレインフロー振幅の確率分布モデル, 日本建築学会構造系論文集, 89 (818), 367-376 (2024. 4).
4. 中村慎, 藤田正則, 廣江光成, 緑川光正, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの実験的研究ー芯材強軸方向における拘束材の局部破壊に関する検討ー, 日本建築学会構造系論文集, 89 (826), 1428-1436 (2024. 12).
5. 藤田正則, 田村和夫, 中村慎, 小型水槽実験による木造家屋の浸水特性評価に関する基礎的研究, 日本建築学会技術報告集, 30 (76), 1335-1338 (2024. 10).
6. 中村慎, 藤田正則, 小開口を有するRC造方立壁の耐震診断に関する基礎研究, コンクリート工学年次論文集, コンクリート工学会, 46 (2), 187-192, (2024. 6).
7. 山田龍平, 藤田正則, 中村慎, リユースを想定した鋼材の機械的性質に関する基礎研究ー解体工事による曲げ損傷の影響ー, 日本建築学会構造系論文集, 89 (818), 473-481 (2024. 4).
8. 遠藤尚希, 朱牟田善治, 高橋健吾, 台風被害予測システム(RAMPT)の改良ー樹木・土砂災害予測情報を活用した補正の提案ー, 電気学会論文誌 C, 144 (12), 1238-1246 (2024).
9. 朱牟田善治, 布施則一, 谷純一, ACM センサを用いた腐食環境評価モニタリングシステムの試作と適用, 防錆管理, 一般社団法人日本防錆技術協会(招待論文), 68 (7), 220-225 (2024. 7).
10. 大原信, 須藤仁, 服部康夫, 朱牟田善治, 日本国内における炭素鋼や亜鉛を対象とする揺れ時間を考慮したドーズレスポンス関数の提案および推定腐食速度マップの作成, 防錆管理, 一般社団法人日本防錆技術協会, 68 (10), 331-352 (2024).
11. 落合努, 荏本孝久, 宮野道雄, 生田英輔, 小田義也, 東北地方太平洋沖地震の地震動強さと微動観測結果の検討, 地域安全学会東日本大震災特別論文集, No. 13, 1-4 (2024. 8).
12. 落合努, 朱牟田善治, 白井佑樹, 涌井将貴, 伊山潤, 構造ヘルスマニタリングを活用した防災ワークショップの提案, 地域安全学会論文集, No.45, 1-8 (2024. 11).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. T. Hanazato, Y. Shirai, T. Ochiai, K. Shimazaki, H. Yamawaki, T. Sato, R. Imai, T. Suzuki, Y. Niitsu, S. Sato and M. Morii, EARTHQUAKE RESISTANCE OF GREAT BUDDHA OF KAMAKURA - A HISTORIC SITTING STATUE CASTED IN 13TH CENTURY -, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).
2. Y. Shirai and K. Shimazaki, EFFECT OF END BOUNDARY CONDITIONS ON MECHANICAL PROPERTIES OF REINFORCED CONCRETE COLUMNS SUBJECTED TO SHEAR FORCE, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).
3. M. Wakui, J. Iyama and Y. Shirai, STRUCTURAL PERFORMANCE EVALUATION OF AN ACTUAL STEEL GYMNASIUM BASED ON STRAIN MEASUREMENT, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).
4. X. Yang and S. Kishiki, STRENGTH OF STEEL TRACK-CONCRETE SLAB CONNECTIONS IN LIGHT GAUGE STEEL PARTITION WALL, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 6).
5. M. Nakamura, H. Takizawa, M. Fujita and M. Midorikawa, Effect of Infilled Material on Local Failure of Restraining Parts in Buckling-Restrained Braces, The 18th World Conference on Earthquake Engineering, (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).
6. Y. Shumuta, Y. Shiba and N. Endo, DEVELOPMENT AND CASE STUDIES OF RISK ASSESSMENT AND MANAGEMENT SYSTEMS FOR POWER LIFELINES(RAMP), The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).
7. N. Fuse, J. Tani and Y. Shumuta, Development of Wireless Salinity Deposition Sensing System using Galvanic Couples, 2024 10th International Conference on Condition Monitoring and Diagnosis (CMD2024), (The Korean Institute of Electrical Engineer, 2024. 10).
8. T. Ochiai, T. Enomoto, Y. Shumuta, N. Ishmael and B. Leonila, DAMAGE EXTEND IN THE 2022 ABRA EARTHQUAKE, PHILIPPINES, AND RESULTS OF DYNAMIC BUILDING CHARACTERISTICS, The 18th World Conference on Earthquake Engineering, (WCEE2024), (Milan, Italy, 2024. 7).

口頭発表

1. 山脇光瑠, 白井佑樹, 今井連, 佐藤孝雄, 花里利一, 島崎和司, 前田恭行, 鈴木知晃, 坂口剛, 鎌倉大仏保存活用に向けた耐震安全性能評価 その 3 地震動応答解析による鎌倉大仏の 3D 解析モデル作成, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21095, 構造 II, 189-190 (東京, 2024. 7).
2. 坂口剛, 白井佑樹, 今井連, 佐藤孝雄, 花里利一, 島崎和司, 前田恭行, 鈴木知晃, 山脇光瑠, 鎌倉大仏保存活用に向けた耐震安全性能評価 その 4 部分空間法に基づく振動特性の同定, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21096, 構造 II, 191-192 (東京, 2024. 7).
3. 佐藤信夫, 花里利一, 島崎和司, 白井佑樹, 佐藤宏貴, 三須基規, 坂本功, 伝統的な木造建物に用いる面格子制振壁の開発 その 1 壁要素試験体の静的実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22343, 構造 III, 685-686 (東京, 2024. 7).
4. 野崎一哉, 西郷凜太郎, 島崎和司, 白井佑樹, 佐藤宏貴, 逆対称曲げを受ける柱の端部境界条件の違いによる耐力の評価 その 4 梁幅および偏心の有無によるせん断耐力に対する影響の検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 23076, 構造 IV, 151-152 (東京, 2024. 7).
5. 西郷凜太郎, 野崎一哉, 島崎和司, 白井佑樹, 佐藤宏貴, 逆対称曲げを受ける柱の端部境界条件の違いによる耐力の評価 その 5 曲げ性能の実験的検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 23077, 構造 IV, 153-154 (東京, 2024. 7).
6. 花里利一, 白井佑樹, 高橋直子, 西川忠, 上北恭史, 新津靖, 遠藤洋平, 駒木定正, 東田秀美, 小樽市歴史的木骨石造建造物の耐震調査(その 4) 店舗型木骨石造建造物の歴史・構造調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 23317, 構造 IV, 633-634 (東京, 2024. 7).
7. 星野あかり, 涌井将貴, 白井佑樹, 伊山潤, 体育館を対象とした継続使用性の判定方法に関する検討 その 3 山形鋼ブレースの衝撃加振試験によるひずみ応答計測, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21110, 構造 II, 219-220 (東京, 2024. 7).
8. 白井佑樹, 島崎和司, アンカーボルト定着部周辺コンクリートの側方破壊耐力に関する実験的研究 反力として生じる圧縮力が及ぼす影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 23266, 構造 IV, 531-532 (東京, 2024. 7).
9. 星野あかり, 涌井将貴, 伊山潤, 白井佑樹, 鉄骨造体育館のひずみ計測に基づく地震時の構造性能評価, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 39-40 (2024. 7).

10. 吉江慶祐, 免震建築物の弾塑性風応答に対する平均風速の増加速度の影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21361, 構造Ⅱ, 721-722 (東京, 2024. 8).
11. 楊 曉雨, 吉江慶祐, 免震建築物の弾塑性風応答による疲労損傷度の検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21364, 構造Ⅱ, 727-728 (東京, 2024. 8).
12. 小川幹太, 吉江慶祐, 楊 曉雨, 免震建築物の弾性範囲を超える領域の風応答特性, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21366, 構造Ⅱ, 731-732 (東京, 2024. 8).
13. 林佑哉, 湊田安浩, 中西駿晴, 中村慎, 藤田正則, 鋼板シヤコネクタを用いたLVL梁とRC床板の接合部耐力に関する研究 その1 接合部の面内せん断実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22107, 構造Ⅲ, 213-214 (東京, 2024. 7).
14. 中西駿晴, 湊田安浩, 林佑哉, 中村慎, 藤田正則, 鋼板シヤコネクタを用いたLVL梁とRC床板の接合部耐力に関する研究 その2 LVL合成梁の曲げ実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22108, 構造Ⅲ, 215-216 (東京, 2024. 7).
15. 藤田正則, 山田龍平, 中村慎, リユースを想定した曲げ損傷を受けた鋼材の機械的性質に関する基礎研究(その1) 概要及び実験計画, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22524, 構造Ⅲ, 1047-1048 (東京, 2024. 7).
16. 山田龍平, 藤田正則, 中村慎, リユースを想定した曲げ損傷を受けた鋼材の機械的性質に関する基礎研究(その2) 実験結果及び考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22525, 構造Ⅲ, 1049-1050 (東京, 2024. 7).
17. 吉田絢香, 中澤祥二, 藤田正則, リユース材を用いた鋼構造建物の耐震性能評価法, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22533, 構造Ⅲ, 1065-1066 (東京, 2024. 7).
18. 中村慎, 藤田正則, 緑川光正, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける拘束材の局部破壊に関する研究(その5) 芯材強軸方向の局部破壊に関する再検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22603, 構造Ⅲ, 1205-1206 (東京, 2024. 7).
19. 摺木悠人, 岡本勇紀, 吉田文久, 藤田正則, 中村慎, 岩田衛, クリアランス調整工法を用いた拘束指標の小さい座屈拘束ブレースに関する実験的研究(その1) 実験計画, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22606, 構造Ⅲ, 1211-1212 (東京, 2024. 7).
20. 岡本勇紀, 摺木悠人, 吉田文久, 藤田正則, 中村慎, 岩田衛, クリアランス調整工法を用いた拘束指標の小さい座屈拘束ブレースに関する実験的研究(その2) 実験結果, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22607, 構造Ⅲ, 1213-1214 (東京, 2024. 7).
21. 廣江光成, 中村慎, 藤田正則, 岩田衛, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの長大化に関する実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22608, 構造Ⅲ, 1215-1216 (東京, 2024. 7).
22. 長沢美咲, 中村慎, 藤田正則, 岩田衛, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースのFEM解析, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 22613, 構造Ⅲ, 1225-1226 (東京, 2024. 7).
23. 落合努, 朱牟田善治, デジタルファブリケーションを活用した防災活動, 地域安全学会大会梗概集, No. 54, 7-10 (2024).
24. 王寺秀介, 落合努, 関口徹, 石川敬祐, 地盤情報を活用した気候変動が地盤災害リスクに与える影響の研究委員会の活動報告, 第59回地盤工学研究発表会, DS-1-13 (2024).
25. 落合努, 花里利一, 朱牟田善治, 重要文化財法華経寺五重塔の地下構造の推定, 第59回地盤工学研究発表会, DS-1-9 (2024).
26. 落合努, 朱牟田善治, 能登半島地震の建物被害と地盤特性ー七尾市を対象とした検討の速報ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21007, 構造Ⅱ, 13-14 (東京, 2024. 7).
27. 森康太, 落合努, 朱牟田善治, ボーリングデータと常時微動観測を活用した庄内平野の地盤の三次元地下構造モデル作成の試み, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 21036, 構造Ⅱ, 71-72 (東京, 2024. 7).
28. 落合努, 朱牟田善治, 2024年能登半島地震を対象とした建物被害予測に関する研究ーSAR画像と地震動強度を用いた研究ー, 2024年電気学会電子・情報・システム部門大会, OS3-5 (2024. 8).
29. 遠藤尚希, 朱牟田善治, 加瀬哲嗣, 松岡悠, 配電設備被害評価のための被害データベース構築: 令和6年能登半島地震, 2024年電気学会電子・情報・システム部門大会, OS3-6 (2024. 8).
30. 芝良昭, 朱牟田善治, スラブ内地震を対象とした配電被害の特徴について, 2024年電気学会電子・情報・システム部門大会, OS3-8 (2024. 8).
31. 朱牟田善治, 電力流通設備の被害と復旧ー2024年能登半島地震での事例検討ー, 2024年電気学会電子・情報・システム部門大会, OS3-9 (2024. 8).
32. 朱牟田善治, 落合努, 温度による道路橋の振動特性変化に関する事例検討, 令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会, CS9-88 (仙台, 2024. 9).
33. 落合努, 荏本孝久, 宮野道雄, 生田英輔, 小田義也, 墓石転倒調査による推定加速度と微動観測結果の比較ー仙北平野を加えた検討ー, 令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会, CS10-55 (仙台,

2024. 9).

34. 松川杏寧, 郷右近英臣, 落合努, 畠山久, 杉安和也, 寅屋敷哲也, 河本尋子, 川見文紀, 折橋祐希, 佐藤翔輔, 地域安全学夏の学校2024ー基礎から学ぶ防災・減災ー 地域安全学領域における若手人材育成その8, 地域安全学会梗概集, No. 55, 30 (2024).
35. 落合努, 朱牟田善治, 小田義也, 長谷川延広, 荏本孝久, 2024年能登半島地震の被災地における微動アレイ探査, 物理探査学会第151回学術講演会論文集, 講演番号36, Vol. 151, 70-71 (2024).
36. 朱牟田善治, 落合努, 全国道路橋を対象とした劣化傾向分析, 第15回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム講演論文集, 1-6 (新潟, 2025. 1).
37. 落合努, 朱牟田善治, バンダアチェの地盤・建物振動特性の評価事例, 第15回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム講演論文集, 140-144 (新潟, 2025. 1).

学術誌

1. 落合努, 盛土造成地等を対象とした微動観測による地盤構造の推定事例, 基礎工, 52(3), 38-40 (2024. 3).

著書

1. 藤田正則(分担執筆), 地球環境に配慮した建築構造, 日本建築学会 (2024. 3).
2. 荏本孝久[編著], 落合努, 佐藤孝治, 朱牟田善治, 趙衍剛, 松田磐余, 神奈川大学アジア研究センター叢書 11『アジアの自然災害環境と防災』〜これまでとこれからの防災・減災を考える〜, (2024).

調査報告書

1. 自然災害時の配電設備における復旧対応の高度化専門委員会: 自然災害時の配電設備における復旧対応の高度化, 電気協同研究, 80(2), 一般社団法人電気協同研究会, (2024).

講演・展示会

1. 藤田正則他, シンポジウム「地球環境に配慮した建築構造」, 日本建築学会 (東京, 2024. 6).
2. Y. Shumuta, Damage and Restoration of Electric Power System by Recent Earthquakes-Cutting edge for Electric Power Resilience-, The 34th CRIEPI / TPC General

Meeting (2024. 9).

3. 朱牟田善治, 落合努, 令和 6 年能登半島地震調査報告ーM7.6 の衝撃と日本社会の課題, 神奈川大学生涯学習・エクステンション講座 (2024. 5).
4. 落合努, 地震動作成で地盤調査屋がしっておくこと, 東建フォーラム'24 (埼玉会館, 2024. 6).
5. 落合努, 能登半島地震から見る地質・自然・防災, 神奈川大学日本常民文化研究所連続特別研究会 能登ー地震から何を学ぶかー (2025. 2).
6. 朱牟田善治, 電力施設のレジリエンス強化の考え方とその事例, 電力・電気設備のレジリエンス強化に関する最新動向, 電気設備学会講習会 (名古屋, 2025. 2).

助成金

1. 白井佑樹, 松井角平記念財団.
2. 白井佑樹, 一般社団法人日本鉄鋼連盟 鋼構造研究・教育助成事業.
3. 白井佑樹, 株式会社ピーエス三菱 創立20周年記念事業・研究助成.
4. 藤田正則(代表), 鋼構造のリユースを想定した部材の損傷評価に関する研究, 令和 4〜6 年度科学研究費助成事業, 基盤研究(B), 課題番号 22H01646.
5. 中村慎(代表), 小開口を有する RC 造方立壁の耐震診断・改修設計手法に関する研究, 令和 5〜6 年度科学研究費助成事業, 若手研究, 課題番号 23K13446.
6. 落合努(代表), ハイブリッドな地盤構造推定法の精度検証と豪雪地域への適用による被害軽減への試み, 令和 5 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 23K04034.
7. 落合努(分担), 表層地盤リスク把握による地震時の墓石転倒及び木造家屋被害に基づく震度推定値の検証, 令和 4 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 22K02117.
8. 朱牟田善治(代表), 建築構造物の劣化特性を把握するセンシング技術の開発, 神奈川大学工学研究所, 共同研究(B).

受託研究・共同研究

1. 白井佑樹, 合成スラブ用デッキプレートの研究, JFE 建材.
2. 白井佑樹, 木造耐久壁パネルの架構性能実験, 株式会社安藤・間.
3. 白井佑樹, 付着割裂実験, 株式会社安藤・間.
4. 白井佑樹, 耐震・制振機能を有する RC 造二次壁の研究, 岡部株式会社.

4. 研究紹介 (2024 年度)

5. 白井佑樹, 伝統的木造建物の柱脚部制振補強, 松井建設株式会社.
6. 白井佑樹, 耐力壁の増設に頼らない伝統的な木造建築の新たな耐震補強工法の開発, 松井建設株式会社.
7. 白井佑樹, PCaPC 造の現場打ちパネルゾーン部における大梁主筋とコンクリートの付着性状に関する研究, 黒沢建設株式会社.
8. 吉江慶祐, CFD(数値流体力学)による設計用風荷重評価の基盤技術の開発, 株式会社日建設計.
9. 吉江慶祐, 免震部材の小振幅性能確認の実験的研究安田洋介, 日鉄エンジニアリング株式会社.
10. 吉江慶祐, 鉄骨造中層オフィスビルの振動調査に関する技術監修(学術指導), 野村不動産株式会社.
11. 吉江慶祐, 研究奨学寄付金, 株式会社日建設計.
12. 藤田正則(代表), 座屈拘束ブレースにおけるクリアランス調整工法と局部破壊に関する研究, 共同研究, 大和ハウス工業(株), 2024. 4~2025. 3.
13. 藤田正則(代表), 座屈拘束ブレースの実験, 奨学寄付金, インフォメディア(株), 2024. 4.
14. 落合努他, 常時微動を用いた地盤構造評価手法や適用性に関する検討, 防災科学技術研究所.

特許(公開)

1. 島崎和司, 白井佑樹, 地震エネルギー吸収装置およびその地震エネルギー吸収装置を使用したコンクリート構造物, 特開 2024-145325.

海外出張

1. 白井佑樹, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), Milan, Italy (2024. 6).
2. 楊曉雨, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), Milan, Italy (2024. 6).
3. 朱牟田善治, 落合努, The 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE2024), Milan, Italy (2024. 6).
4. 朱牟田善治, The 34th CRIEPI/TPC General Meeting September 10-13, 2024, Taipei, Taiwan (2024. 9).
5. 朱牟田善治他, パルテノン神殿での計測機器の設置と研究成果の報告, Greece (2025. 3).
6. 朱牟田善治, 落合努, 共同研究打合せとワークショップ, Banda ache and Bandung, Indonesia (2025. 3).

その他

1. 藤田正則, 中村慎, リユース材を用いた山形ラーメン架構の柱梁接合部実験, 神奈川大学工学研究, No.8, 47-48 (2025. 3).
2. 中村慎, 藤田正則, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースのクリアランス調整工法に関する実験的研究, 神奈川大学工学研究, No.8, 27-31 (2025. 3).

建築学系 環境コース

研究分野紹介

建築環境工学研究室

(岩本静男 教授, 藤本遼 助手)

室内外気流の数値解析に関する研究, 温冷感指標に関する研究, 空調室内の温熱・空気環境に関する研究, 建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究, 室内外温熱環境における着衣の影響に関する研究

音・光環境研究室

(安田洋介 教授, 劉金雨 助教)

音環境設計のための汎用的な音響数値シミュレーション手法の開発, 室内音場の予測・制御, 騒音伝搬対策, 建築部材の音響特性の把握・モデル化, 床衝撃音の予測・制御, 都市騒音の予測・制御, 音環境・視環境・複合環境の評価など

建築環境・設備研究室

(芹川真緒 准教授, 侯寧 助教)

建築環境・設備分野に関する研究を行っている. 住宅を中心に, 温熱環境評価, 省エネルギー方策の提案等を行っている. また, 近年 VR(仮想現実)技術の汎用性が増していることを背景に, 建築教育, 環境評価の支援ツールとしてVR技術を位置づけ, その応用可能性を検討している

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(欧文誌)

1. K. Takeda, R. Fujimoto, S. Iwamoto and W. Cho, The Proposal for Ceiling-Hanging Panels and its Impact on Cooling Efficiency, Pertanika J. Sci. & Technol, 33 (S2), 53-71 (2025. 2).
2. M. Serikawa and S. Kashiara, Electricity demand load curves of all-electric houses and measures for effective use of solar power generation, Energy and Buildings, 329, 115248 (2025. 2).
3. Y. Yasuda, S. Nishimura, Y. Kamiya and M. Morinaga, Three-dimensional numerical investigation on propagation characteristics of road traffic noise from an

embankment road: construction of correction formula for the effect of side slope angle, Acoustical Science and Technology, 45 (4), 184-194 (2024).

(和文誌)

1. 芹川真緒, 吉浦温雅, HEMS データを用いた電気ヒーター式家電・住宅設備の省エネルギーの可能性の考察, 日本建築学会技術報告集, 30 (75), 844-849 (2024. 6).
2. M. Serikawa, W. Umishio, J. Nakano, T. Akimoto, T. Ikaga and S. Murakami, Evaluation of the Contribution of Housing Performance Toward Sustainable Development Goals: A Case Study on Houses with High Thermal Insulation Performance, 空気調和・衛生工学会論文集, 327, 1-10 (2024. 6).
3. 西川祥子, 平島重敏, 秋元孝之, 芹川真緒, 宮田征門, 窓ガラスの熱性能が住宅のオペレーショナルカーボンに与える影響の分析, 日本建築学会技術報告集, 31 (77), 357-362 (2025. 2).
4. 平島重敏, 西川祥子, 秋元孝之, 芹川真緒, 宮田征門, 窓ガラスの熱性能が非住宅建築物のオペレーショナルカーボンに与える影響の分析, 日本建築学会技術報告集, 31 (77), 363-368 (2025. 2).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. T. Ichikawa, S. Iwamoto, R. Fujimoto, K. Sakaue and T. Mitsunaga, Study on simulation of building drainage systems by CFD (Part 2) Verification on drainage characteristics of a drainage system with a basin, S-trap, and drainage horizontal branch pipe, the Proceedings of CIB-W062 Symposium (Northampton, UK, 2024. 8).
2. M. Serikawa, W. Umishio, J. Nakano, T. Akimoto, T. Ikaga and S. Murakami, Influence of housing performance and lifestyle on occupants' health and environmental load: A case study on thermal insulation, air-conditioning schedule, and windows direction, Proceedings of ASim Conference 2024: The 5th Asia Conference of IBPSA (Osaka, Japan, 2024. 9).
3. A. Yoshiura and M. Serikawa, Study on Radiation Characteristics of Double Roofing with Air Passage, The 21st International Conference of Asia Institute of Urban Environment (Tokyo, Japan, 2024. 10).
4. R. Hagiwara, T. Masumoto, Y. Yasuda and T. Sakuma, Investigation of sound field diffuseness in an irregularly-shaped room based on FMBEM incidence directivity analysis, Proc. Inter-Noise 2024, 6593-6599 (Nantes, France, 2024. 8).
5. Y. Okada, Y. Yasuda, S. Sakamoto, T. Itiki, K. Anai, K. Yamauchi and T. Yokota, Road traffic noise prediction

model “ASJ RTN-Model 2023” proposed by the Acoustical Society of Japan - Part 1: Framework of the calculation model, Proc. Inter-Noise 2024, 9861-9870 (Nantes, France, 2024.8).

口頭発表

1. 藤本遼, 岩本静男, 単位モデルによる大規模講義室の温熱環境評価 第 4 報 入学試験を想定した暖房時詳細解析, 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40652, 環境工学 I, 1379-1380 (東京, 2024. 9).
2. 市川智大, 岩本静男, 藤本遼, 坂上恭助, 光永威彦, 排水設備における CFD 解析 洗面器から排水立て管までの排水性状に関する実験結果との比較, 空気調和・衛生工学会学術講演論文集 (佐賀, 2024. 9).
3. 藤本遼, 五十嵐希美, 岩本静男, 傳法谷郁乃, 掘り炬燵の温熱快適性評価 第 1 報 CFD 解析による冬季使用時の詳細解析, 第 48 回 人間生活・環境系シンポジウム報告集 (筑波, 2024. 12).
4. 五十嵐希美, 岩本静男, 傳法谷郁乃, 藤本遼, CFD による空調室内でのベスト型ファン付き作業服の温冷感・快適感評価, 第 48 回 人間生活・環境系シンポジウム報告集 (筑波, 2024. 12).
5. 福島歩実, 傳法谷郁乃, 岩本静男, 杉山拓真, 染谷俊介, 藤崎幸市郎, 栗原浩平, 建設作業員の熱中症対策に関する研究(その 9) ファン付き作業服とフルハーネス着用時における胸背部に配置したインナーパッドの熱・気流特性評価, 第 48 回 人間生活・環境系シンポジウム報告集 (筑波, 2024. 12).
6. 斉藤晃, 平島重敏, 西川祥子, 高田朋宏, 秋元孝之, 芹川真緒, 宮田征門, 建築物におけるガラスの品種毎のオペレーショナルカーボン削減効果 その 1: 基本的な考え方と検討する窓性能, 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40395, 環境工学 I, 849-850 (東京, 2024. 7).
7. 西川祥子, 斉藤晃, 平島重敏, 高田朋宏, 秋元孝之, 芹川真緒, 宮田征門, 建築物におけるガラスの品種毎のオペレーショナルカーボン削減効果 その 2: 住宅における検討, 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40396, 環境工学 I, 851-852 (東京, 2024. 7).
8. 平島重敏, 斉藤晃, 西川祥子, 高田朋宏, 秋元孝之, 芹川真緒, 宮田征門, 建築物におけるガラスの品種毎のオペレーショナルカーボン削減効果 その 3: 非住宅建築物における検討, 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40397, 環境工学 I, 853-854 (東京, 2024. 7).
9. 芹川真緒, 吉浦温雅, 高断熱住宅の温熱環境に関する研究 夏期・秋期・冬期の室温の実態把握, 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40426, 環境工学

- I, 911-912 (東京, 2024. 7).
10. 山本正顕, 佐藤誠, 辻丸のりえ, 芹川真緒, 池本和大, 2 棟の ZEH-M 物件における年間実態調査 季節別アンケートによる検証(その 1), 日本建築学会大会講演梗概集(関東), 40553, 環境工学 I, 1165-1166 (2024. 7).
 11. 吉浦温雅, 芹川真緒, 公営住宅を対象にした居住者の振舞の不確実性を含めた多目的最適化, 令和 6 年度空気調和・衛生工学会大会 (佐賀, 2024. 9).
 12. 芹川真緒, 吉浦温雅, 高断熱住宅の温熱環境・エネルギー消費に関する研究 シミュレーションによる実測の再現性確認および室温分布の形成要因に係る考察, 令和 6 年度空気調和・衛生工学会大会 (佐賀, 2024. 9).
 13. 兵藤伸也, 山下祐, 小林真人, 安田洋介, CLT 壁で発生するコインシデンス効果に関する実験的検討, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 40103, 環境工学 I, 237-238 (東京, 2024. 8).
 14. 神谷優, 財満健史, 黒木拓, 大脇雅直, 安田洋介, 共鳴器を内蔵した吸音壁の吸音特性に関する検討ー波動数値解析による共鳴現象の把握ー, 日本建築学会学術講演梗概集, 40111, 環境工学 I, 253-254 (東京, 2024. 8).
 15. 小林遥斗, 信田聖人, 安田洋介, 福島昭則, 二重壁間の地表面が道路交通騒音伝搬に及ぼす影響ー3次元波動解析による実用計算モデルの検討ー, 日本音響学会講演論文集(秋季), 475-478 (大阪, 2024. 9).
 16. 萩原諒, 榎本貴之, 安田洋介, 佐久間哲哉, FMBEM 入射指向性解析に基づく拡散性指標の空間分布に関する検討, 日本音響学会講演論文集(秋季), 585-586 (大阪, 2024. 9).
 17. 兵藤伸也, 山下祐, 小林真人, 安田洋介, 界壁における木質系下地の仕様が遮音性能へ及ぼす影響, 日本音響学会講演論文集(秋季), 667-670 (大阪, 2024. 9).
 18. 小林遥斗, 信田聖人, 安田洋介, 福島昭則, 二重壁間の地表面が道路交通騒音伝搬に及ぼす影響ー3次元波動解析による検討と実用計算モデルの提案ー, 日本音響学会建築音響研究会資料, AA2024-31, 騒音振動研究会資料, N-2024-41 (新潟, 2024. 10).
 19. 劉金雨, 井上尚久, 佐久間哲哉, 低周波域における外周壁遮音性能測定法と測定事例, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 40095, 環境工学 I, 209-212 (東京, 2024. 8).
 20. 塚本陽平, 富川義弘, 劉金雨, 佐久間哲哉, 木造外周壁の音響透過に関する実験的考察 その 1ー総合透過損失の計算値と測定値の比較ー, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 40101, 環境工学 I, 233-234 (東京, 2024. 8).

21. 富川義弘, 塚本陽平, 劉金雨, 佐久間哲哉, 木造外周壁の音響透過に関する実験的考察 その 2ー現場測定と実験室測定と比較ー, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 40102, 環境工学 I, 235-236 (東京, 2024. 8).
22. 大林紅音, 劉金雨, 佐久間哲哉, 音線法による室内音場の簡易バイノーラル可聴化に関する基礎的検討, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 40117, 環境工学 I, 265-266 (東京, 2024. 8).
23. 大林紅音, 劉金雨, 佐久間哲哉, 音線法による室内音場の簡易バイノーラル可聴化に関する研究ーVR提示による聴感実験ー, 日本音響学会講演論文集(秋季), 649-652 (大阪, 2024. 9).
24. 劉金雨, 井上尚久, 佐久間哲哉, 外周壁遮音性能の低周波測定法に関する数値解析的検討ー室寸法の適用範囲の検証ー, 日本音響学会講演論文集(秋季), 677-678 (大阪, 2024. 9).

学術誌

1. 日本音響学会道路交通騒音調査研究委員会(委員長:岡田恭明, 幹事:穴井謙, 一木智之, 安田洋介, 山内勝也, 横田考俊), 道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023”ー日本音響学会道路交通騒音調査研究委員会報告ー, 日本音響学会誌, 80 (4), 170-234 (2024).
2. 神谷優, 財満健史, 黒木拓, 大脇雅直, 安田洋介, 共鳴器を内蔵した吸音壁の吸音特性に関する検討, 音響技術, No. 209 (54 (1)), 67-73 (2025. 3).
3. 小林真人, 岩根康之, 安田洋介, トンネル発破掘削で発生する超低周波音へのリアクティブ消音装置の適用, 音響技術, No. 209 (54 (1)), 81-86 (2025. 3).

調査報告書

1. 安田洋介(分担), 高速道路総合技術研究所, 日本音響学会, 令和 5 年度 道路交通騒音の予測精度向上に関する研究 報告書 (2024. 5).

講演・展示会

1. 芹川真緒, SDGs 達成に向けた BEST 健康評価ツール「BHAT」の開発と住宅性能検討への活用, 住宅・建築 SDGs フォーラム第 51 回月例セミナー (2024. 10).
2. 安田洋介, 伝搬計算, 日本音響学会 第 24 回音響技術セミナー「道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023”」(東京, 2024. 10, 大阪, 2024. 11).

助成金

1. 劉金雨, 低周波域における木造家屋の音響透過現象の解明及び合理的防音工法の提案, 令和 6, 7 年度科学研究費, 若手研究, 課題番号 24K17400.

受託研究

1. 岩本静男, 給湯設備の省エネ性向上に向けた設計指針作成のための給湯負荷算定法の検討, 一般財団法人住宅・建築 SDGs 推進センター, 2024.10.1~2025.3.22.
2. 岩本静男, 非住宅建築物の給湯設備の一次エネルギー消費量に及ぼす貯湯槽の容量と断熱仕様の影響評価, 一般社団法人日本サステナブル建築協会, 2024.8.1~2025.1.20.
3. 芹川真緒, 吉浦温雅, 生活消費エネルギーが室温および空調エネルギーに与える影響, 共同研究, 旭化成ホームズ.
4. 芹川真緒, 吉浦温雅, SDGs 達成に資するスマートウェルネス住宅のケーススタディとその検証, 受託研究, 日本サステナブル建築協会.
5. 安田洋介, 木造ハイブリッド構造の床衝撃音対策に関する研究, 飛島建設株式会社.

褒賞

1. 芹川真緒, 神奈川大学学術褒賞, 神奈川大学 (2024.10).
2. 劉金雨, 日本音響学会 第 57 回栗屋 潔学術奨励賞 (2024).

その他

1. 芹川真緒, 河内由希, 神奈川区連携事業「かながわ区民カレッジ for Kids」(2024).

建築学系・都市生活学系 デザインコース

都市生活学系 住生活創造コース

都市生活学系 まち再生コース

研究分野紹介

建築史研究室

(松隈洋 教授, 姜明采 助教)

モダニズム建築の歴史や, 先駆者となった建築家の思想と設計方法論に関する研究

建築史研究室

(内田青蔵 教授)

日本の明治以降, 欧米の影響を受けて建築はさまざま変化してきた. そうした変容の過程を様々な角度から分析している

建築・都市デザイン研究室

(曾我部昌史 教授, 秋山晃士 助手)

徳島県美波町における門前町再生支援, 旧回船間屋「谷屋」の保存再生と活用, 日和佐港周辺まちづくり, 愛媛県大三島における島づくりなど, 具体的な地域に関わりながら, 建築設計やまちづくりをテーマとした実践的研究に取り組む

建築計画研究室

(中井邦夫 教授, 鈴木成也 助教)

戦後復興期の防火建築帯に関する研究, 近現代の都市建築類型に関する研究, 都市の水辺空間の構成に関する研究, 都市のスポーツ空間に関する研究, 建築意匠論に関する研究, 建築設計に関する実践的研究など

建築デザイン研究室

(六角美瑠 教授)

建築をとりまく環境と空間の関係を読み解き, 設計デザインへの応用を考察し, 研究している. 家具や住宅建築, また町や施設と関わる具体的なプロジェクトまで幅広い活動を通じて, 設計手法の研究を行っている

住宅デザイン研究室

(鈴木信弘 教授, 菊井悠央 助手)

住宅のデザイン, 設計手法, モジュールの研究, 住宅地の開発, 温熱設計と断熱気密施工法の開発

生活デザイン史研究室

(須崎文代 准教授, 印牧岳彦 助教)

住宅史, 近代建築史, 循環型の生活環境デザインに関する研究

居住環境デザイン研究室

(立花美緒 准教授)

住宅, 集合住宅, 集落, 教育環境, 家具, インテリア等をテーマに, 豊かな暮らしと地域社会の関係について, 建築設計と建築計画の観点から研究し, 実践的に提案している

都市計画研究室

(山家京子 教授, 柏原沙織 助教)

人口縮小時代の都市ビジョンの構築, コミュニティ支援ツールの作成, 地域資源を活かしたまちづくりの検討及び

実践、郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究、アジア大都市の歴史的環境保全

建築保存活用研究室

(野村和宣 教授, 塩脇祥 助手)

都市・集落や建築の歴史的価値を明らかにし、その価値を継承しつつ新たな時代の要求に応じた機能更新を図った保存活用手法に関する研究。また、歴史的価値を記録しアーカイブスとして発信する手法に関する研究

不動産デザイン研究室

(高橋寿太郎 教授)

「建築学と不動産学の融合」を理念とし、建築設計に加えて、建築やリノベーションプロジェクトの成立条件(不動産・マーケティング・ファイナンス)を考える「建築企画」や「プロデュース」を積極的に研究する

まちづくり研究室

(上野正也 准教授)

創造性を活かした地域づくり, エリアマネジメント, 公共空間利活用をはじめとして、都市政策から具体的な空間づくりまで実践的な研究を行っている

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(欧文誌)

1. S. Kashihara, K. Yamaga, and M. Ueno, Activities of the Neighborhood Association and an Evaluation of the Residential Environment in Suburban Area of Yokohama, Urban and Regional Planning Review, Vol.11, 154-177 (2024. 8).
2. S. Kashihara, and Q.C. Le, Capturing the transition of historic urban landscapes using scores from Hanoi's ancient quarter, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, 1-16 (2024. 11).
3. S. Shishido, T. Terada, S. Kashihara, Evaluating the capability of experiences in public open spaces, Landscape Research, 1-17 (2024. 12).

(和文誌)

1. 池田直也, 内田青蔵, 姜明采, 明治時代の天皇行幸時における和館の使われ方とその起居様式について—明治 20(1887)年に行われた松方正義邸行幸を中心に—, 日本建築学会計画系論文集, 89 (820), 1164-1172 (2024. 6).
2. 吉岡寛之, 佐藤慎也, 大川碧望, 公立美術館における創作活動に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 89 (826), 2337- 2348 (2024. 12).
3. 立花美緒, 安田幸一, デンマークのフォルケスコーレにおけるコモンコアの構成と利用状況, 日本建築学会計画系論文集, 89 (824), 1811-1821 (2024. 10).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. M. Kang, S. Uchida, Koichi Hagiwara, the President of the Architectural Association of Chosun -The study of Japanese Architects Active in Prewar Korea, Part 1-, Proceedings of the 14th ISAIA, 1-6 (Kyoto, 2024. 9).
2. 建築科学研究所 + 神奈川大学中井研究室(中井邦夫, 鈴木成也, 横山凱一, 顔凡迪), (仮称)魚津市上野方地域複合施設新築工事設計業務公募型プロポーザル, 最優秀実施案 (2024. 6).

建築作品

1. 曾我部昌史, 丸山美紀, 長谷川明, トコ屋さん, 川越市文化創造インキュベーション施設・コエトコ (2024. 4).
2. 曾我部昌史, 吉岡寛之, 丸山美紀, 長谷川明, ほか, BankART 妻有 2024 「創造的修復と交信」(新潟), 新潟日報, 12, 新潟日報社 (2024. 8).
3. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニユエル・タルディッツ, NSD 伊那新校(長野), 日経アーキテクチュア, 69-70, 日経 BP 社 (2024. 10). 他 1 誌
4. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニユエル・タルディッツ, 大阪万博ルクセンブルク館(大阪), 日経アーキテクチュア, 35, 日経 BP 社 (2025. 1). 他
5. 曾我部昌史, 吉岡寛之, 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士, 旧清水家住宅改修プロジェクト(徳島)(2025,3)
6. 秋山晃士, 秋山美穂, 御代田山の神モデルハウス(長野) (2025. 1).
7. 鈴木信弘, 白水昌の家 (2025. 4).

口頭発表

1. 土屋和男, 内田青蔵, 小沢朝江, 植田道則, 新妻淳子, 伊達剛, 堤涼子, 高林邸主屋(浜松市)と大礼博「民藝館」の共通点(外観) 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その 6, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9074, 建築歴史・意匠, 147-148 (東京, 2024. 7).
2. 堤涼子, 内田青蔵, 小沢朝江, 植田道則, 新妻淳子, 伊達剛, 土屋和男, 高林邸主屋(浜松市)と大礼博「民藝館」の共通点(内装) 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その 7, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9075, 建築歴史・意匠, 149-150 (東京, 2024. 7).
3. 池田直也, 内田青蔵, 姜明采, 明治時代の天皇行幸時における和館の使われ方とその起居様式について—明治 20(1887)年に行われた松方正義邸行幸を中心に—, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 449-

- 450 (東京, 2024. 7).
4. 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 旧前田家鎌倉別邸に関する一考察—松濤庵の変遷過程について—, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9230, 建築歴史・意匠, 459-460 (東京, 2024. 7).
5. 姜明采, 内田青蔵, 中里美海, 大正時代に「一匡社」が創設した「理想郷」一匡邑について その1—一匡社のめざした「理想郷」像について—, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9234, 建築歴史・意匠, 467-468 (東京, 2024. 7).
6. 中里美海, 内田青蔵, 姜明采, 大正時代に「一匡社」が創設した「理想郷」一匡邑について その2—邑内の山荘の建築的特徴と生活状況から見る理想郷の実態について—, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9235, 建築歴史・意匠, 469-470 (東京, 2024. 7).
7. 穂屋下直輝, 内田青蔵, 野村和宣, 近代土木遺産としての新たな保存活用手法の提案 旧住吉浄水場の地域産業博物館としての活用計画, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 14137, 建築デザイン, 274-275 (東京, 2024. 7).
8. M. Kang, The Trend of Japanese Architectural Design in Taisho Period – Focusing on the Design Competition Submissions for the Great Kanto Earthquake Memorial Hall –, Summaries of technical papers of annual meeting Korea Association for Architectural History, 23-26 (Seoul, 2024. 11).
9. 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 旧前田家鎌倉別邸における敷地と景勝について, 2024 年度日本建築学会関東支部研究報告集, 639-642 (横浜, 2025. 3).
10. 李子璟, 内田青蔵, 姜明采, 中国洛陽市における清代後期(18c~19c)四合院住宅について—家族史から見る温溝村「温氏邸」の建設過程—, 2024 年度日本建築学会関東支部研究報告集, 583-586 (横浜, 2025. 3).
11. 棚橋美槻, 中井邦夫, 鈴木成也, 一室ヴォリュームを含む現代住宅作品の構成, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9106, 建築歴史・意匠, 211-212 (東京, 2024. 8).
12. 横山凱一, 中井邦夫, 鈴木成也, 横須賀市汐入町の谷戸地形におけるシーンの連なりからみた坂の空間構成, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9140, 建築歴史・意匠, 279-280 (東京, 2024. 8).
13. 鈴木成也, 中井邦夫, 黄冀, 街区内のユニットにおける外部空間の構成 中国成都市太昇地区の大規模街区における住棟が形成する外部空間の構成(1), 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9141, 建築歴史・意匠, 281-282 (東京, 2024. 8).
14. 黄冀, 中井邦夫, 鈴木成也, ユニットの組合せとつながりによる街区の外部空間の構成 中国成都市太昇地区の大規模街区における住棟が形成する外部空間の構成(2), 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9142, 建築歴史・意匠, 283-284 (東京, 2024. 8).
15. 福田奨, 鈴木成也, 中井邦夫, 東京・大森山王地区における敷地および建物の変遷, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9149, 建築歴史・意匠, 297-298 (東京, 2024. 8).
16. 鈴木優也, 鈴木成也, 中井邦夫, 横浜市内の斜面地に建つマンションの構成, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9158, 建築歴史・意匠, 315-316 (東京, 2024. 8).
17. 鈴木信弘, 次はどうする・住宅設計における新たな取り組み, 新木造住宅技術研究協議会中四国支部研修会 (岡山, 2024. 6).
18. 鈴木信弘, 都市部における Q1.0 住宅の設計事例紹介+アルバ・アアルトの住宅を分析する, 新木造住宅技術研究協議会第 10 回全国総会講演 (香川, 2024. 10).
19. 須崎文代, 印牧岳彦, 井口力哉, 倉田慧一, 田中和幸, 水野僚子, 泉水英計, 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(1) —近代シカゴにおけるセツルメントハウスと同館の役割に関する一考察, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9346, 建築歴史・意匠, 691-692 (東京, 2024. 8).
20. 倉田慧一, 須崎文代, 印牧岳彦, 井口力哉, 田中和幸, 水野僚子, 泉水英計, 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究 (2) 都市シカゴにおける位置づけ, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9347, 建築歴史・意匠, 693-694 (東京, 2024. 8).
21. 印牧岳彦, 須崎文代, 倉田慧一, 井口力哉, 田中和幸, 水野僚子, 泉水英計, 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(3) 設計者アレン・B・ポンドの建築論について, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9348, 建築歴史・意匠, 695-696 (東京, 2024. 8).
22. 井口力哉, 須崎文代, 印牧岳彦, 倉田慧一, 田中和幸, 水野僚子, 泉水英計, 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(4) ハル・ハウスの建築群拡大の変遷, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 9349, 建築歴史・意匠, 697-698 (東京, 2024. 8).
23. 印牧岳彦, 建築家のソヴィエト旅行記—1930 年代の日記資料から見るアメリカの建築家によるソ連表象について, 表象文化論学会オンライン研究フォーラム 2024 (オンライン, 2024. 11).
24. 立花美緒, 高等学校建築作品におけるオープンスペースの種類と共用面積, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 5086, 建築計画, 171-172 (東京, 2024. 8).
25. 柏原沙織, ベトナム・ハノイ旧市街 Hang Thiec 通りにおける金属製品製造・販売業の同業者集積空間, 日本建築学会学術講演梗概集(関東), 7135, 都市計画, 375-376 (東京, 2024. 8).
26. 柏原沙織, The Historical Transition of Craft Streets of

Hanoi's Ancient Quarter, 東アジア4大学聯合学術会議「各大学の創設と教育理念,そして国際交流活動の展開」(神奈川大学, 2024. 11).

学術誌

1. 内田青蔵, 歴史的ツーバーフォー建築物を訪ねて—明治～昭和初期 第 10 回 旧札幌農学校農校園穀物庫—旧札幌農学校のもうひとつの貴重な建築遺構—, 一般社団法人日本ツーバーフォー建築協会雑誌, ツーバイフォー241, 10-11 (2024. 4).
2. 内田青蔵, 未来につながる新たな和室の提案を, Housing Tribune, 688, 38-40 (2024. 9).
3. 内田青蔵, 歴史的ツーバイフォー建築物を訪ねて—明治～昭和初期 第 11 回 野幌屯田兵第二中隊本部、新琴似屯田兵中隊本部—北海道に現存するアメリカ式構法を取り入れた建築—, 一般社団法人日本ツーバイフォー建築協会雑誌, ツーバイフォー243, 8-9 (2024. 10).
4. 内田青蔵, 歴史的ツーバイフォー建築物を訪ねて—明治～昭和初期 第 12 回 旧小川家酪農畜舎—大正期に北海道に導入されたバルーン・フレーム構法の酪農建築—, 一般社団法人日本ツーバイフォー建築協会雑誌, ツーバイフォー244, 10-11 (2025. 1).
5. 姜明采, 東京都復興記念館の展示リニューアル及び同潤会に関する特別展の実施について, 非文字資料研究センターNews Letter, 51, 2-3 (2024. 4).
6. 姜明采, 建築における「日本的なるもの」の変遷, 一般財団法人建築保全センター「Re」, 46 (223), 6-9 (2024. 7).
7. 姜明采, 関東大震災から 100 年震災復興をふりかえって—東京都復興記念館の所蔵資料と関東大震災 100 年特別展を中心に—, 非文字資料研究センターNews Letter, 52, 10-11 (2024. 9).
8. 曾我部昌史他, 【注目の大学研究室】神奈川大学建築学部建築学科曾我部研究室, アーキテクツマガジン, Vol. 42 (2024. 10).
9. 曾我部昌史他, PROLEGOMENA SUMMIT 2023, 総合資格 (2024. 11).
10. 曾我部昌史他, 京急高架下黄金スタジオ, 改善の事典, 674, 創意社 (2024.11).
11. 秋山晃士, 秋山美穂, ウシオコーヒー/ウシオスタジオ, 商店建築 (2025. 1).
12. 六角美瑠, 建築家から娘への継承, 建築士, 73 (863), 10-12 (2024. 8).
13. 印牧岳彦, 須崎文代, 近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究(1) —フーリエ主義にもとづく集合住宅の試みについての一考察—, 神奈川大学建築学研究, 2, 6-7 (2024. 7).
14. 須崎文代, 基幹共同研究「常民生活誌に関する総合的研究」 便所の歴史・民俗に関する総合的研究 活動報告, 神奈川大学日本常民文化研究所年報 2022, 18-19 (2024. 9).
15. 須崎文代, 近代史における共同性と食空間, a+u (エー・アンド・ユー) 特集:食をめぐる建築 (2024. 4).
16. 塚本由晴, 川島範久, 須崎文代, 能作文徳, 教育のフィールドを里山へ—事物連関型デザインによる大地性と身体性の獲得—, 新建築住宅特集 2024 年 5 月, 457, 140-147 (2024. 4).
17. 須崎文代, 台所史探訪(第 8 回) 標準化／規格化と大量生産への流れ, 食文化誌ヴェスタ: 食文化を楽しむ一冊／味の素食の文化センター編, 134, 66-71 (2024. 4).
18. 須崎文代, 台所史探訪(第 9 回) 戦後住宅における台所のデザイン: 食空間をつなげる試み, 食文化誌ヴェスタ: 食文化を楽しむ一冊／味の素食の文化センター編, 135, 70-75 (2024. 7).
19. 須崎文代, 台所の近代史からエコロジーを考える: ドメスティック・ディスタンス(3), 神奈川大学評論／神奈川大学評論編集専門委員会, 106, 92-99 (2024).
20. 須崎文代, 内田青蔵, 曾我部昌史, 中井邦夫, 山家京子, 六角美瑠, 柏原沙織, 北京交通大学との学術交流(JST さくらサイエンスプログラム) 実施報告, 神奈川大学建築学研究(2), 大学建築学研究所, 63 (2024. 7).
21. 須崎文代, 台所史探訪(第 10 回 最終回) 台所を自由にするデザイン, 食文化誌ヴェスタ: 食文化を楽しむ一冊／味の素食の文化センター編, 136, 66-71 (2024. 10).
22. 塩崎太伸, 加藤千佳, 小南弘季, 立花美緒 編, 建築画像, 建築雑誌, 139 (1787), 日本建築学会 (2024. 4).

著書

1. 松隈洋(分担執筆), 近代建築史におけるカーンの位置付け, 東京工業大学TIT建築設計教育研究会議運営委員会編, ルイス・カーン研究連続講演会活動記録 いま語り継がれるカーンの霊気, 建築技術, 153-163 (2024) .
2. 松隈洋, 未完の建築 前川國男論・戦後編, みすず書房 (2024) .
3. 松隈洋(分担執筆), これからの住まいと建築, 一般社団法人放送大学教育振興会, 117-159, 177-204 (2025) .
4. 内田青蔵(分担執筆), (公財)東京都慰霊協会編, 東京都復興記念館の展示リニューアル, 関東大震災 100 年事業記録誌, 28-31 (2024).

5. 内田青蔵(分担執筆),「荻外荘」に込められた様々な住宅像—入澤達吉・常子,伊東忠太そして近衛文麿の求めた住宅—,杉並区教育委員会編,国指定史跡荻外荘「近衛文麿旧宅」,64-71 (2024).
6. 姜明采(分担執筆),(公財)東京都慰霊協会編,東京都復興記念館の展示リニューアル,関東大震災 100 年事業記録誌,28-31 (2024).
7. 鈴木信弘,断熱で省エネ×耐震で安心 性能向上リノベ Style Book Vol. 2(別冊住まいの設計)南馬込古民家改修,扶桑社 (2024).
8. 鈴木信弘,(建築逍遥)ボタラ宮 空と大地のあいだ,神奈川大学評論,106,神奈川大学 (2024).
9. 鈴木信弘,神奈川建築コンクール選評,第 66 回神奈川建築コンクール作品集,神奈川県 (2024).
10. 鈴木信弘,365 日の家庭ゴミプランニングの基本(2024 年 12 月号),YKK AP (2024. 12).
11. 湯澤規子,伊丹一浩,藤原辰史,須崎文代他(分担),入門 食と農の人文学,ミネルヴァ書房 (2024. 4).
12. 土谷貞雄,須崎文代他 共著,都市未来研究会 in NISEKO 建築チーム,ヴィレッジ・コードーニセコで考えた村づくりのコード 45・北海道ニセコ編—自然・景観・建築・暮らしを統合するために,有限責任事業組合涌出 (2024. 9).
13. 市川紘司,連勇太郎,須崎文代他(分担),建築をあたらしくする言葉,TOTO 出版 (2024. 10).

調査報告書

1. 神奈川大学建築学部建築学科内田研究室,北区榎本家住宅調査報告書,受託研究成果報告書,東京都北区飛鳥山博物館 (2024. 9).
2. 姜明采,東京都復興記念館展示リニューアル,受託研究成果報告書,(公財)東京都慰霊協会 (2025. 3).
3. 中井邦夫,萩原脩斗,横山凱一,顔凡迪,鈴木成也,BA/横浜防火帯建築研究 No. 31,若葉運輸ビル,BA 編集部(神奈川大学中井研究室内) (2025. 3).
4. 中井邦夫,高木弘之,尾崎二葉,山本智貴,三浦主伍,田中宏武,BA/横浜防火帯建築研究 No.32,アジアビル,BA 編集部(神奈川大学中井研究室内) (2025. 3).
5. 立花美緒(分担執筆),令和の学びに対応した高等学校の建築計画に関する実践的研究,6-11,76-81,日本建築学会教育施設小委員会 (2025. 3).
6. 柏原沙織,濱田愛,国土地理協会学術研究助成成果報告書:都市部同業者集積空間の文化的景観に関する研究—東京都中央区日本橋横山町・馬喰町の間屋街地区に着目して—,第 21 回学術研究助成 (2024).

講演・展示会

1. 松隈洋,暮らしのなかの視覚文化—モダニズム建築と私たちの暮らし,公益財団法人きょうと視覚文化振興財団 (京都, 2024. 4).
2. 松隈洋,横須賀市市民大学「ル・コルビュジエ建築の世界」,公益財団法人横須賀市生涯学習財団 (横須賀, 2024. 4).
3. 松隈洋,村野藤吾,建築と思想—建築をヒューマナイズすること,八ヶ岳美術館 (原村, 2024. 5).
4. 松隈洋,建築家前川國男の世界,弘前市民会館 (弘前, 2024. 10).
5. 松隈洋,建築ワークショップ 2024 特別編アントニン・レーモンドと軽井沢,脇田美術館 (軽井沢, 2024. 10).
6. 松隈洋,ル・コルビュジエリレートーク,スパイラルホール (東京, 2024. 11).
7. 松隈洋,ル・コルビュジエと日本,北沢タウンホール (東京, 2024. 11).
8. 松隈洋,建築家・鬼頭梓が図書館建築に求めたもの,日野市立中央図書館 (東京, 2025. 2).
9. 内田青蔵,久米邸完成記念講演会,沼田市教育委員会 (沼田, 2024. 4).
10. 内田青蔵,エコール・プチピエ銀座講座,寸法から見た近代和風住宅 (東京, 2024. 6).
11. 内田青蔵,自由学園講座,遠山邸の建築案内 (埼玉, 2024. 6).
12. 内田青蔵,中野たてもの応援団,熱海の近代建築案内 (静岡, 2024. 7).
13. 内田青蔵,渋沢邸について,神奈川大学日本常民文化研究所主催研究会 (東京, 2024. 7).
14. 内田青蔵,日韓シンポジウム・台所の歴史—近・現代,家具道具室内史学会 (東京, 2024. 8).
15. 内田青蔵,渋沢邸建築案内,現代・和室の会 (東京, 2024. 9).
16. 内田青蔵,和室の近代—近代住宅に見る和室—,ワタリウム美術館 (東京, 2024. 9).
17. 内田青蔵,神仙郷の建物たちの価値とその魅力について,神仙郷 (箱根, 2024. 10).
18. 内田青蔵,明治期の和洋館並列型住宅の誕生,豊島区千早地域文化創造館 (東京, 2024. 10).
19. 内田青蔵,横浜市開港記念会館サポーターズセミナー,神奈川建築界の先駆性—戦前・戦後の建築界—,横浜市開港記念会館 (横浜, 2024. 10).
20. 内田青蔵,東アジア 4 大学国際シンポジウム,神奈川大学の歴史,神奈川大学 (神奈川, 2024. 11).
21. 内田青蔵,建築家・山口文象について—その経歴と作風について—,中野たてもの応援団「中野を描いた画家たちのアトリエ展 II」 (東京, 2024. 11).
22. 内田青蔵,旧渡辺邸セミナー「山本拙郎について」,前田建設株式会社 (取手, 2024. 11).

23. 内田青蔵, 江東区文化財講演会「渋沢家住宅について」(東京, 2024. 11).
24. 内田青蔵, 松本市立博物館セミナー「現代住宅のルーツとしての文化住宅」(松本, 2024. 11).
25. 内田青蔵, 榎本邸の文化財的価値について, 豊島区文化財 (東京, 2024. 11).
26. 内田青蔵, 建築学科の歩み, 神奈川大学建築学科創立 60 周年記念講演会, 神奈川大学建築学部 (神奈川, 2024. 12).
27. 内田青蔵, 横須賀市市民大学講座「わが国近代以降の上流層の新住宅様式について」, 公益財団法人横須賀市生涯学習財団 (横須賀, 2024. 12).
28. 内田青蔵, 横須賀市市民大学講座「J.コンドル(1852-1920)の手掛けた建築について」, 公益財団法人横須賀市生涯学習財団 (横須賀, 2024. 12).
29. 内田青蔵, 横浜市開港記念館の特徴とその魅力ー近代建築の最初期の保存・再生事例としてー, 神奈川大学エクステンションセンター開設 20 周年記念事業 (神奈川, 2025. 1).
30. 内田青蔵, 鎌倉の近代建築について, 俣野別邸庭園・市民公開講座 (神奈川, 2025. 2).
31. 内田青蔵, 大正・昭和初期に見られる住宅思想, 空気調和・衛生工学会九州支部 (福岡, 2025. 2).
32. 内田青蔵, 大正期の住宅改良・生活改善運動について, 宮崎県建築士会 (宮崎, 2025. 3).
33. 内田青蔵, 豊島区の建築, 豊島区教育委員会 (東京, 2025. 3).
34. 曾我部昌史他, 展示「大三島みんなの参道物語〜子どもたちが描く未来編〜」, 今治市伊東豊雄建築ミュージアム (今治, 2024. 10~2025. 9).
35. 曾我部昌史他, くまもとアートポリス建築展 2024 メインシンポジウム, 熊本県 (熊本テルサ, 2024. 11).
36. 曾我部昌史他, 創造都市ワンデイフォーラム「創造都市x建築」, 創造都市スクール (横浜, 2025. 2).
37. 曾我部昌史, 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士, 門前町のくらしと記憶, 美波町門前町再生交流オフィス (徳島, 2025. 2~2025. 3).
38. 秋山晃士他, LINK NUMAZU vol. 24, 沼津市リノベーションまちづくり実行協議会事務局 (静岡県沼津市, 2025. 3).
39. 中井邦夫, Bar Bar Bar の建物(若葉運輸ビル)について, 旧 BarBarBar メモリアルプロジェクト Day1 (Talk Show) (横浜市中区若葉運輸ビル, 2024. 4. 14).
40. 中井邦夫, 知られざる名建築・有隣堂伊勢佐木町本店を読み解く, 有隣堂伊勢佐木町本店 (横浜, 2024. 5. 18).
41. K. Nakai, Urban Architecture Typology, Five East Asian Universities Urban and Architecture Workshop 2024, King Mongkut's University of Technology, KX Building (Bangkok, 2024. 7. 25).
42. 中井邦夫, 建築でひもとく横浜, 横浜市民ギャラリー (横浜, 2024. 11. 30).
43. 六角美瑠, 中高生がつくる サードプレイス「ゆう杉並」, 杉並建築会大会 (東京, 2024. 5).
44. 六角美瑠, 「クレバス」と伝家宝塔, 東京藝術大学建築科 (東京, 2024. 6).
45. 六角美瑠+六角研究室, 岩出山 de ナイト「光の感覚の道」, 岩出山町内川沿 (宮城, 2024. 10).
46. 六角美瑠+六角研究室, お駕籠小屋展示, KOYART2024, 横須賀美術館 (神奈川, 2024. 11).
47. 六角美瑠, 「六角鬼丈伝と林邸: 建築家／家族としての私の家」建築史学第 4, 東京大学生産技術研究所 (東京, 2024. 11).
48. 六角美瑠+六角研究室, 六角研究室作品展, 感覚ミュージアム (宮城, 2025. 3).
49. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#1〜軽井沢山荘〜, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2024. 11).
50. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#2〜軽井沢山荘, 山中湖の山荘 C, 軽井沢小川邸, 軽井沢グリーンハイツ, 軽井沢の家 G, K, ポカンティコヒルの家〜, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2024. 11).
51. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#3〜浜田山の家, 久我山の家, 山中湖の山荘 A, B, 仙石原の家, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2024. 12).
52. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#4〜国際文化会館住宅〜, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2025. 1).
53. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#5〜御蔵山の家〜, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2025. 2).
54. 増田奏, 鈴木信弘, 吉村順三の設計手法解析#6〜南台の家〜, ArchitectureLive 講演会 (横浜, 2025. 2).
55. 印牧岳彦, 磯崎新の世紀末: 「20 世紀の現代建築を検証する」を検証する, シンポジウム「磯崎新と西洋建築史」(東京, 2024. 10).
56. 立花美緒, それぞれ異なる子どもの主体的・対話的で深い学びを支える学習環境, 近畿公立小中学校事務職員研究会研修会サマーフォーラム (大阪, 2024. 7).
57. M.Tachibana, Quality Learning Environment Design for Tajikistan, Scaling up Resilient School Infrastructure in Tajikistan Workshop, Ministry of Education and Science of the Republic of Tajikistan and World Bank (The Republic of Tajikistan, 2024. 10).
58. 立花美緒, デンマーク, フィンランドの高校における屋内広場コモンコア, 第 9 回学校建築タテ・ヨコ・ナナメ高校令和の学びの空間を考えるー海外と国内の取組からー, 日本建築学会教育施設小委員会・学校体系

- の変化に対応した学校建築計画検討 WG, 建築会館会議室 (東京・オンライン, 2024. 11).
59. 山家京子, 日本の郊外住宅地の現状と課題-「地域の魅力を発見・発信する」取組みを中心に-, 北京交通大学 (中国, 2024. 9).
 60. 柏原沙織, Urban Transformation of Hanoi Ancient Quarter and their modern trade streets as living cultural tradition, アジア研究センター共同研究「アジア都市の生活圏」公開研究会 Touristification, gentrification, pandemic, and living heritage: Recent urban transformations at a World Heritage Site and a non-UNESCO historic site (Zoom, 2024. 5).
 61. 野村和宣, 丸の内第一世代の歴史と日本工業倶楽部開館の保存再生, 東京建築祭 2024, 東京建築祭実行委員会 (東京, 2024. 5).
 62. 野村和宣, 継承設計の取り組み, aaca サロン, 日本建築美術工芸協会 (東京, 2024. 7).
 63. 高橋寿太郎, 基調講演「建築と経営のあいだ」, 日本建築家協会近畿支部京都地域会 (京都, 2024. 4).
 64. 高橋寿太郎, 「建築と不動産のあいだ 地域再生のために超えるべき壁とは」, 日米不動産協力機構 (東京 2024. 8).
 65. 高橋寿太郎, 「不動産エバリュエーション評価書活用講座」, 公益財団法人不動産流通推進センター (東京 2024. 10).
 66. 上野正也, 「創造界限拠点にみる社会・地域的インパクトに関する調査報告」, 3大学連携・これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考えるトーク&ワークショップ (横浜, 2024. 5).
 67. 岡部友彦, 福島慶介, 吉田有里, 大越晴子, 津澤竣, 山野桂, 小原光洋, 園田大介, 上野正也, ラウンドテーブルディスカッション【Part2 創造都市施策のこれから】、創造都市スクールキックオフシンポジウム (横浜, 2024. 5).
 68. 秋元康幸, 野原卓, 岡部友彦, 上野正也, 鈴木伸治, ワークショップ「創造都市×政策評価」, 創造都市ワンデイフォーラム (横浜, 2025. 2).
 69. 曾我部昌史, 熊谷玄, 相澤毅, 神永侑子, 矢内原充志, 上野正也, フォーラム I 「創造都市×建築」, 創造都市ワンデイフォーラム (横浜, 2025. 2).
- 番号 23K04218.
3. 曾我部昌史(代表), 吉岡寛之, 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士, 「地域の記憶を記録し共有する場をつくる実践的研究—徳島県美波町の古民家を活用した暮らしの資料館—」, 2024 年公益財団法人乃村文化財団, 徳島県美波町 (2024.4-2025.3).
 4. 曾我部昌史(代表), 秋山晃士, 丸山美紀, 長谷川明, 「古民家改修による新しい地域活動拠点の創出-地域活性化と関係人口拡大に向けて」, 令和6年度県南地域づくりキャンパス, 徳島県美波町 (2024.10-2025.2).
 5. 中井邦夫(代表), 曾我部昌史, 内田青蔵, 石黒由紀, 藤岡泰寛, 鈴木成也(分担), 戦後の防火建築帯に学ぶ都市建築類型学の構築と新しい都市建築モデルの探求, 基盤研究(C), 課題番号 20K04839.
 6. 印牧岳彦, 建築理論における「環境制御」および「環境デザイン」の概念についての歴史的研究, 2023 年度科学研究費補助金, 若手研究, 課題番号 23K13487 (2023.4.1-2028.3.31).
 7. 須崎文代(分担), 塚本由晴(代表), 川島範久, 斎尾直子, 佐々木啓, 真田純子, 能作文徳, 里山再生を通じた事物連関型デザイン知性の開発, 2022 年度科学研究費補助金, 萌芽研究, 課題番号 22K18450 (2022.4.1-2025.3.31).
 8. 須崎文代(分担), 印牧岳彦(分担), 塚本由晴(代表), 川島範久, 斎尾直子, 佐々木啓, 真田純子, 能作文徳, 身体—道具—環境の連関にもとづく建築デザイン手法による互恵的な都市農村交流モデル, 2024 年度科学研究費補助金, 基盤研究(B), 課題番号 24K03219 (2024.4.1-2029.3.31).
 9. 立花美緒(代表), 人口減少社会に対応した日本版コモンコア教育環境の開発, 科学研究費補助金, 若手研究, 課題番号 19K15168.
 10. 立花美緒(分担), オープンスペース型学校建築のプランタイプとしてみた有効性の検証, 科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 21K04402.
 11. 山家京子(代表), 他, アジア都市の生活圏, 神奈川大学アジア研究所共同研究 (2023-).
 12. 松本安生(代表), 山家京子(分担), 上野正也(分担), 柏原沙織(分担), 他, ポストコロナにおける持続可能なまちづくりに関する研究〜「日常生活資本」の新しい概念を中心にして〜, 神奈川大学分野横断型研究推進事業 (2022-2024).
 13. 朱牟田善治(代表), 山家京子(分担), 他, アジア地域の災害軽減化と防災・減災ネットワーク構築に関する研究, 神奈川大学アジア研究所共同研究 (2019-2024).
 14. 柏原沙織(分担), 他, アジア都市における災害弱者を対象としたアクセシビリティとレジリエンスの包摂的両立, 日本学術振興会科学研究費助成事業, 基盤研究(B), 課題番号 24K01058 (2024-2027).

助成金

1. 内田青蔵(分担), 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開 最初の民藝館・高林邸の総合研究, 基盤研究(C), 課題番号 23K04220.
2. 内田青蔵(代表), 姜明采, 草軽電鉄の北軽井沢別荘地開発とそれに誘発された理想郷・一匡邑について, 令和5年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題

15. 柏原沙織(共同), 他, グリーン・ジェントリフィケーションによる緑地資源の公平性および住民の行動への影響: 東南アジア大都市に着目して, トヨタ財団研究助成 (2024-2026).
16. 上野正也(分担), 産業テリトリーオに着目した工業空間の都市計画理論の構築, 令和6年度科学研究費助成金, 基盤研究(B), 課題番号 24K01052.

受託研究・共同研究

1. 島崎和司(代表), 花里利一, 内田青蔵, 野村和宣, 朱牟田善治, 大熊武司, 須崎文代, 白井佑樹, 落合努, 姜明采(共同), 文化遺産の保全・活用・防災に関する研究-指定文化遺産から未指定文化遺産まで-, 神奈川大学分野横断型研究推進事業.
2. 内田青蔵, 姜明采, 東京都復興記念館における震災復興事業の展示研究, (公財)東京都慰霊協会.
3. 内田青蔵, 姜明采, 建造物調査委託, 東京都北区飛鳥山博物館.
4. 曾我部昌史(代表), 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士「令和6年度美波町官民連携まちなか再生推進支援事業(未来ビジョン策定)業務」, 徳島県美波町 (2024.5-2025.3).
5. 曾我部昌史(代表), 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士「2024年度門前町持続のためのまちづくり業務」, 徳島県美波町 (2024.10-2025.3).
6. 曾我部昌史(代表), 丸山美紀, 長谷川明, 秋山晃士「美波町赤松地区 将来ビジョン実現に向けた施設活用計画検討業務」, 徳島県美波町 (2024.11-2025.2).
7. 鈴木信弘, 菊井悠央, ログハウスの歴史と工法, 建設手順に関する研究, 横浜市建築保全公社.
8. 立花美緒, 研究奨学寄付金, ミグラム.
9. 立花美緒, 研究奨学寄付金, 暮らしと建築社.
10. 山家京子, 鎌倉市との包括協定に基づく小町通り商店街景観形成に関する調査研究, 鎌倉市都市景観課 (2022.4-).
11. 山家京子, 上野正也, 神奈川大学, 京浜急行電鉄及び川崎市の京急本線及び京急大師線沿線におけるまちづくり推進に関する調査研究, 京浜急行電鉄株式会社, 川崎市.

海外出張

1. 内田青蔵, 曾我部昌史, 山家京子, 六角美瑠, 北京交通大学・北京服装学院との学術交流(特別講義), 北京, 中国 (2024. 9).
2. 内田青蔵, 野村和宣, 白井佑樹, 姜明采, 韓国における歴史的建造物の保存活用について, ソウルおよび

群山, 韓国 (2025. 1).

3. 内田青蔵, 姜明采, 広州における教会建築の調査, 広州, 中国 (2025. 2).
4. 姜明采, 2024年度韓国建築歴史学会秋季学術発表大会発表, ソウル, 韓国 (2024. 11).
5. 姜明采, 韓国木造教会についての調査, ソウル他, 韓国 (2024.12-2025.1).
6. 姜明采, 韓国の木造教会及び宣教師村についての調査, ソウル他, 韓国 (2025.2-2025.3).
7. 曾我部昌史, 山家京子, 上野正也, 印牧岳彦, 他, ソウル・遊休地エリアの利活用調査, ソウル, 韓国 (2025. 3).
8. 鈴木信弘, 曾我部昌史, 中井邦夫, 六角美瑠, 柏原沙織, 印牧岳彦, 東アジア5大学建築都市国際ワークショップ, バンコク, タイ (2024.7-2024.8).
9. 山本理顕, 曾我部昌史, 立花美緒, 他, 居住地域barrio等に関する調査, カラカス, ベネズエラ (2025. 2).
10. 鈴木信弘, 北欧建築視察, 日本建築学会関東支所神奈川支部, Sweden, Finland (2024.8-2024.9).
11. 印牧岳彦, ブラジル近代建築研究を目的とした調査・視察, ブラジル (2024.8-2024.9).
12. 印牧岳彦, ミシガン大学ベントレー歴史図書館での資料調査, アメリカ合衆国 (2024. 10).
13. 須崎文代, 印牧岳彦, 仁川富平旧三菱社宅の視察, 韓国 (2024. 11).
14. 立花美緒, 高等学校建築と図書館建築に関する調査, ヘルシンキ他, フィンランド (2025. 3).
15. 柏原沙織, 他, アジア3都市水害脆弱地区調査, ベトナム(ハノイ), インドネシア(ジャカルタ), 韓国(ソウル) (2024. 9).

褒賞

1. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニユエル・タルディッツ, I-TOWN A・B・C 街区, 第8回日本エコハウス大賞 2024 奨励賞, 建築知識ビルダーズ (2024. 9).
2. 鈴木信弘, 臼田有吾, 関尾英隆, 築145年の南馬込古民家改修, 第4回大田区景観まちづくり賞, 東京都大田区 (2025. 1).
3. 鈴木信弘, 白水晶の家, 第10回ウッドデザイン賞 2024, 一般社団法人ウッドデザイン協会 (2024. 10).
4. 鈴木信弘, 横浜英和学院オリーブホール, 第10回ウッドデザイン賞 2024, 一般社団法人ウッドデザイン協会 (2024. 10).

学位

1. 鈴木成也, 耐火建築促進法及び防災建築街区造成法に基づく併存併用住宅の外形タイプとその変遷 戦後日本の都市建築に関する意匠的研究, 博士(工学), 神奈川大学 (2025. 3).

その他

1. 松隈洋, NHK テレビ番組総合, すこぶるアガるビル読売会館 (2024. 4. 20).
2. 松隈洋, 寄稿 葛西臨海水族園建て替え 失われゆく次世代のコモン, 毎日新聞, 4 (2024. 6. 6).
3. 松隈洋, テレビ東京, 新・美の巨人たち 世界平和記念聖堂 (2024. 8. 10).
4. 松隈洋, 谷口吉生さんを悼む, 日本経済新聞 (2025. 1. 9).
5. 松隈洋, モダニズム建築は何を求めたのか, 日本建築家協会関東甲信越支部機関誌 Bulletin, 303, 2025 年春号.
6. 内田青蔵, BS 朝日, 百年名家, 渋沢邸 (2024. 7. 28).
7. 曾我部昌史ほか, 子どもワークショップ, 大三島公民館(今治), 伊東建築塾.
8. R.B.ブッコロー, 中井邦夫, 有隣堂伊勢佐木町本店の世界(前編), YouTube〜有隣堂しか知らない世界 258〜 (2024. 4).
9. R.B.ブッコロー, 中井邦夫, 有隣堂伊勢佐木町本店の世界(後編), YouTube〜有隣堂しか知らない世界 260〜 (2024. 5).
10. 中井邦夫, (取材記事) 知られざる名建築? 横浜・有隣堂本店に込められた創業者の思いとは, 朝日新聞 (2024. 5. 30).
11. 中井邦夫, 有隣堂伊勢佐木町本店の建築を読み解く, 有隣第 594 号, 有隣堂 (2024. 9).
12. 須崎文代, ハニヤスの子(第 4 回)「ふうど」と人をつなぐもの ―その3 民家の裏の竹―, 味の手帖, 74-75 (2024. 4).
13. 須崎文代, ハニヤスの子(第 5 回)「ふうど」と人をつなぐもの ―その4 田植えの季節―, 味の手帖, 74-75 (2024. 5).
14. 須崎文代, ハニヤスの子(第 6 回)風土とふうど ―いい塩梅, 味の手帖, 74-75 (2024. 6).
15. 須崎文代, ハニヤスの子(第 7 回)風土とふうど ―流しと井戸端, 味の手帖, 74-75 (2024. 7).
16. 須崎文代, ハニヤスの子(第 8 回)風土とふうど ―雨垂れ―, 味の手帖, 74-75 (2024. 8).
17. 須崎文代, ハニヤスの子(第 9 回)風土とふうど ―稲と鎌―, 味の手帖, 74-75 (2024.9).
18. 須崎文代, ハニヤスの子(第 10 回)風土とふうど ―はぎ掛けの風景―, 味の手帖, 74-75 (2024. 10).
19. 須崎文代, ハニヤスの子(第 11 回)風土とふうど ―月見とススキー, 味の手帖, 74-75 (2024.11).
20. 須崎文代, ハニヤスの子(第 12 回)風土とふうど ―門松―, 味の手帖, 74-75 (2024. 12).
21. 須崎文代, ハニヤスの子(第 13 回)風土とふうど ―杵と臼―, 味の手帖, 74-75 (2025. 1).
22. 須崎文代, ハニヤスの子(第 14 回)風土とふうど ―炬こ燵たつ―, 味の手帖, 74-75 (2025. 2).
23. 須崎文代, ハニヤスの子(第 15 回)風土とふうど ―古い春の籠―, 味の手帖, 74-75 (2025. 3).
24. 立花美緒他, 「子どもたちを巻き込めば加速する、新しい学校の空間づくり〜CO-SHA ソウゾウ プロジェクト成果発表会〜」, 文部科学省 (2025. 2).

講演会開催記録

2024 年度

演 題: 施工者からみた文化財建造物の耐震補強と修復
講演者: 中村一男(株式会社安藤・間建築技術部)
日 時: 2024 年 6 月 3 日(月) 17:10~18:50
場 所: 16 号館セレストホール

要 旨: 松江城と黒島天主堂の耐震補強および保存修復工事を中心に、施工方法や現場での課題などが示された。特に、これらの建築は文化財であることから、一般建築と異なる作業環境や制約を施工者としてどのように解決していったのかを具体的に解説された。そのなかで、文化財を保存することの意義にも触れられた。

演 題: 研究者? 技術者? イノベーター!
～建設会社の音響専門家の仕事～
講演者: 石塚崇(清水建設株式会社技術研究所)
日 時: 2024 年 7 月 1 日(月) 17:10~18:50
場 所: 16 号館セレストホール

要 旨: 建設会社(ゼネコン)の技術研究所に勤務する講演者は音響専門家であるが、その仕事は、新技術の研究開発から、設計や施工部隊の技術支援、コンペ・入札の手伝いまで多岐にわたる。研究者なのか技術者なのかという悩みの中、ある研修への参加をきっかけに、民間企業の研究員はイノベーターを目指すべきではないかと気づく。本講演では、社内の技術支援の傍ら、試行錯誤を繰り返しながらイノベーションに挑戦している講演者の日々が、実例を多く交えつつ数多く紹介された。

演 題: Public Space and Urban Furniture Design related to new society and technology
講演者: Juan Sádaba(バスク大学建築学部准教授)
日 時: 2024 年 7 月 22 日(月) 17:10~18:50
場 所: 3 号館 3-305 室

要 旨: 神奈川大学 16 号館を設計した槇文彦の都市論に影響を受けたという講師が、自らデザインしたいくつかの作品を紹介した。BIRLOKI というプロジェクトは、小さなブロックを重ねるデザインにより、ディスプレイや街灯、電気自動車充電器や wi-fi スポットなどを組み合わせ、多様な機能と形を生み出すだけでなく、同時に周辺の人々の動きなどのデータを収集・分析し、組み合わせを更新することで、

様々な国や地域で使え、都市活動を支えるアーバンファニチャーとなる。この例のように、アーバンファニチャーのような小さな要素であっても、「針治療」のように、それらがネットワークしていくことで都市の公共空間を変えられる可能性があることを示した。(なお本講演は、欧州委員会(EC)による国境を越えた移動と協働を支援するプログラムである Erasmus+ の関連行事として実施された。)

演 題: テクノロジーによって変わる建築(家)のあり方
講演者: 秋吉浩気(VUILD 株式会社代表取締役 CEO, 建築家, メタアーキテクト)
日 時: 2024 年 10 月 7 日(月) 17:10~18:50
場 所: 16 号館セレストホール

要 旨: ものづくりの民主化を掲げて設立された VUILD は、テクノロジーの活用により、誰もが地域の材料で、自分たちの理想とする暮らしや空間、建築を作り上げる支援することで、社会の変革を目指している。自身の作品とそのプロセスの解説と共に、実践する事業の資金調達から、技術や材料の流通、製作の仕組みづくりを紹介された。

演 題: 事業で地域から未来をつくる
講演者: 石田遼(株式会社 NEWLOCAL 代表取締役)
日 時: 2024 年 11 月 11 日(月) 17:10~18:50
場 所: 16 号館セレストホール

要 旨: 「建築を通じて未来をつくる」を理念とする石田遼氏は、全国の遊休不動産を活用した地域創生に取り組んでいる。講演では、長野県野沢温泉における築約 100 年の宿泊施設再生やミュージックバー開設といった具体事例が紹介された。「地域からハッピーシナリオを共に描く」ことをミッションに掲げ、地域パートナーとの連携を重視し、迅速な事業展開を進めている。今後は国内 10 地域への展開に加え、東アジアや東南アジアへの海外展開も視野に入れ、地域の力を最大限に活かした新たなまちづくりモデルを提示した。

演 題: 建築をどう作るか
講演者: 伊東寛(伊東寛アトリエ), 室伏次郎(スタジオ・アルテック, 神奈川大学名誉教授)

日 時:2024 年 12 月 2 日(月)17:10～18:50

場 所:16 号館セレストホール

要 旨:自身の経験やエピソードを起点に、手がけてこられた住宅を、繊細なスケッチやダイアグラムを用い、設計プロセスから完成後の暮らしの様子を紹介され、自身の設計における理念を 10 のキーワードとして解説された。また、講演後半は、建築家室伏次郎氏が登壇され、「良い住宅とはなにか」「どうすれば良い建築が生まれるのか」をテーマに対談された。

建築学科創立 60 周年記念講演会

講演名:みんなでなかよく住むにはどうしたらいいだろう

講演者:山本理顕(建築家、神奈川大学客員教授、2024 年度プリツカー賞受賞、株式会社山本理顕設計工場)

日 時:2024 年 12 月 7 日(土)13:30～16:30

場 所:横浜市開港記念会館

要 旨:世界各地の集落における人々の暮らしや営みから生まれた住まいのあり方についての調査・研究が紹介された。人々が共に暮らすことで生まれる建築の形態や、地域に根ざしたコミュニティの美しさが丁寧に語られた。また、建築におけるパブリックとプライベートの境界を「閼(しきい)」と定義し、それを単なる物理的な仕切りではなく、人と人との関係性や地域社会とのつながりを生み出す装置として捉える視点が示された。そうした「閼」の概念を自身の設計に積極的に取り入れており、講演ではその具体的な実践例として、空間の特性を生かした集合住宅の設計事例についても詳しく解説された。

卒業研究(工学部建築学科)・修士論文・博士論文テーマ

2024 年度

構造コース

[卒業論文]

時刻歴風応答解析のサンプル数によるばらつきの検討.....(吉江・楊研究室)
年齢層別防災意識と行動の違いー児童と高齢者の調査分析ー.....(朱牟田・落合研究室)
合成スラブの構造性能に関する研究ーせん断スパンと板厚をパラメータとした正曲げ試験ー.....(島崎・白井研究室)
常時微動を用いた盛土造成地(高舟台自治会)の振動特性の評価ー微動アレイ解析に関する SPAC 法と CCA 法の比較ー.....(朱牟田・落合研究室)
多層建築物の時刻歴風応答解析における層風力の入力方法.....(吉江・楊研究室)
非構造部材である LGS 間仕切壁のランナー耐力.....(吉江・楊研究室)
微動アレイ解析による能登半島地震被害状況の違いの分析.....(朱牟田・落合研究室)
風荷重で水平クリープ変形を生じる免震部材の性能確認実験ー高減衰系積層ゴムの小振幅載荷実験ー.....(吉江・楊研究室)
風荷重で水平クリープ変形を生じる免震部材の性能確認実験ー小振幅試験方法の検討ー.....(吉江・楊研究室)
浸水を想定した外壁材の曲げ実験.....(藤田・中村研究室)
ハーフプレキャスト地中梁の振れ挙動の検討ー在来工法とプレキャスト工法の比較ー.....(島崎・白井研究室)
常時微動を用いた硬質地盤評価の有効性向上の検討.....(朱牟田・落合研究室)
鋼板挿入型ドリフトピン接合部を有する鋼木複合梁の曲げ実験.....(藤田・中村研究室)
風荷重で水平クリープ変形を生じる免震部材の性能確認実験ー鉛プラグ入り積層ゴムの小振幅載荷実験ー.....(吉江・楊研究室)
令和6年能登半島地震における木造建物の倒壊要因の考察.....(朱牟田・落合研究室)
小開口を有する RC 造方立壁の耐震診断に関する基礎研究ー小開口の位置がせん断耐力に及ぼす影響ー.....(藤田・中村研究室)

座屈拘束方杖ブレースで補強したリユース材の柱梁接合部実験.....(藤田・中村研究室)
模擬地震動波形の統計的性質.....(吉江・楊研究室)
土砂災害被害想定エリアと実被害の特性比較ー珠洲市を対象に人口と地形に着目した分析ー.....(朱牟田・落合研究室)
鋼管杭貫入データを用いた基盤層判別に関する研究.....(朱牟田・落合研究室)
道路橋の劣化速度と地域特性の影響に関する研究.....(朱牟田・落合研究室)
曲げ変形が卓越する塔状構造物に対する低層集中配置型制振構造の効果検証.....(吉江・楊研究室)
部材長さ 12m を想定した座屈拘束ブレースの疲労実験.....(藤田・中村研究室)
クリアランス調整材を部分貼りした座屈拘束ブレースの実験ー芯材の座屈モード及び軸歪に関する考察ー.....(藤田・中村研究室)
最新の液化化予測手法の再現率ー2011 年東北地方太平洋沖地震と 1923 年関東地震を用いた比較ー.....(朱牟田・落合研究室)
ハーフプレキャスト地中梁の振れ挙動の検討ープレキャスト試験体における補強筋量とコンクリート強度の違いー.....(島崎・白井研究室)
部材長さ 12m を想定した座屈拘束ブレースの実験ークリアランス調整材の貼付面積およびクリアランス比の大小の影響ー.....(藤田・中村研究室)
体育館を対象とした継続使用性の判定方法に関する検討ー山形鋼のブレースのひずみ応答計測による損傷検知可能性の検討ー.....(島崎・白井研究室)
曲げ変形が卓越する塔状建築物の水平力に対する応答制御ー鉛直方向設置ダンパーによる制振効果のメカニズムの検討ー.....(吉江・楊研究室)
拘束力下での主筋引抜実験ー試験体形状の要素実験ー.....(島崎・白井研究室)
MAS 分析による効率的避難の要衝箇所の評価.....(朱牟田・落合研究室)
免震建築物の弾性範囲を超える領域の風応答特性ー塑性率と等価周期の関係ー.....(吉江・楊研究室)
構面外変形の有無による座屈拘束ブレースに実験ーリブ貫入部長さ及び拘束材端部補強が構造性能に及ぼす影響ー.....(藤田・中村研究室)
航空写真による地震被害建物の把握に関する精度検証・

.....(朱牟田・落合研究室)
 伝統的な木造建物における面格子壁を用いた制震壁の研究開発ー載荷速度を変えた要素・架構実験ー.....
(島崎・白井研究室)
 取付ピッチを改善した機械式亀裂補修部品の疲労実験・.....
(藤田・中村研究室)
 拘束材にリブよけ型枠鋼板を設けた座屈拘束ブレースの実験.....
(藤田・中村研究室)
 座屈拘束ブレースのひずみ硬化に関する実験データ分析.....
(藤田・中村研究室)

環境コース

[卒業論文]

環境騒音の空間性とうるささ評価に関する主観評価実験・.....
(安田・劉研究室)
 騒音伝搬における田の地表面効果に関する検討.....
(安田・劉研究室)
 CLT パネル床に対する実務的重量床衝撃音予測手法の適合性.....
(安田・劉研究室)
 給湯設備設計用給水温の予測ー実測データによる検討ー.....
(岩本研究室)
 自宅における着衣行動調査ー全国年間調査ー.....
(岩本研究室)
 衣類における建材へのリサイクルの可能性に係る考察.....
(芹川・吉浦研究室)
 炬燵を利用した下肢への送風と上肢への局所冷却が温熱的快適性に及ぼす影響.....
(岩本研究室)
 各種生活行動・天気による住宅内浮遊粉塵濃度の変化の測定.....
(芹川・吉浦研究室)
 吸音材の配置と量が会議室の音響特性に与える影響に関する実験的検討.....
(安田・劉研究室)
 花粉・粉塵の住まい方への影響と対策に関する研究.....
(芹川・吉浦研究室)
 局所冷却部位の接触圧力の違いが生理心理反応に及ぼす影響.....
(岩本研究室)
 ファン付き作業服の袖の長さや形状の違いにおける温熱的快適性評価.....
(岩本研究室)
 気候変動対策のための気象条件が冷房処理熱量に与える影響の検討.....
(芹川・吉浦研究室)
 サイホン排水システムの排水性状の CFD 解析.....
(岩本研究室)
 CFD による大規模講義室内における冷房時の温熱環境予測・評価.....
(岩本研究室)
 CFD による天井吊り下げパネルおよびパーティション使用時の事務室内温熱環境評価ー乱流モデルによる比較ー.....
(岩本研究室)

図書館ラーニングコモンズ・ラウンジ等における音声伝送性能の測定とその改善.....
(安田・劉研究室)
 家電の電力測定及び使用実態の調査と省エネ余地の検討に関する研究.....
(芹川・吉浦研究室)
 サーマルマネキンを用いた蒸発熱抵抗の測定ーWBGT におけるスポーツウェアの CAV 推定ー.....
(岩本研究室)
 HEMS データ分析による太陽光発電の自家消費率向上の考察.....
(芹川・吉浦研究室)
 換気を考慮した夏期大学講義室の温熱環境調査と CFD による改善提案.....
(芹川・吉浦研究室)
 建物熱性能のシステム同定の精度向上と測定期間短縮に向けた検討.....
(芹川・吉浦研究室)
 建築ものづくり工房における音環境に関する現状調査.....
(安田・劉研究室)

デザインコース

[卒業論文]

開港記念横浜会館（現横浜市開港記念会館）の再考ー横浜貿易新報と横浜市会議事速記録で市民からの視点でー.....
(内田研究室)
 1950 年代～1980 年代の東京における喫茶店の内部意匠の変遷に関する一考察.....
(須崎・印牧研究室)
 川崎市溝口地域における水路の痕跡と現状.....
(中井研究室)
 川崎臨海部工業地帯の埋め立て島における要素がつくる景観と構成.....
(中井研究室)
 首都圏市街地における基地施設の境界空間に関する研究ー在日米陸軍キャンプ座間を対象としてー.....
(上野研究室)
 AI を活用した建築イメージの生成手法の研究ーMidJourney における画像出力のためのプロンプト選択ー.....
(野村研究室)
 大船駅前における土地区画の変遷ー大船田園都市構想以降に見られる変化に着目してー.....
(上野研究室)

[卒業設計 A]

様式の継承と調和ー横浜郵船ビル保存活用方法の提案ー.....
(野村研究室)
 横浜ジャズー消えていくジャズスポットから見えるものー.....
(曾我部研究室)
 あいまい化された境界ー認識による住宅領域の構成ー.....
(六角研究室)
 江の島の町をつなぐ斜面上建築.....
(野村研究室)
 地域と世代を結ぶー平塚市袖ヶ浜における交流拠点の提案ー.....
(山家・柏原研究室)

ともに育てる地域拠点ー横須賀市浦賀地区における多機能施設の提案ー……………(山家・柏原研究室)

斜活動ー斜め床の歩行空間ー……………(曾我部研究室)

駅前を繋ぐビルー豊橋市大豊ビル再興計画ー……………(松隈・姜研究室)

賑わいの額縁ー多世代が集う地域拠点の提案ー……………(曾我部研究室)

土間商店街ー空き家活用と地域活性化の提案ー……………(六角研究室)

地域が主体となる観光の在り方ー富士宮市で考える観光関連施設ー……………(山家・柏原研究室)

生活様態の模索をもとにした高齢者住宅……………(曾我部研究室)

多様な過ごし方ができる公園ー円形計画による柔軟な活用ー……………(山家・柏原研究室)

コミュニティハウスー市街地と公園をつなぐ地域に開いた集合住宅ー……………(立花研究室)

葛飾柴又における生きた文化的景観の形成ー[売る][住む][作る]が滲み出すまち並みの提案ー……………(山家・柏原研究室)

暮らしが住宅地の情景をつくるー5 つの条件をもつことで変化する住環境の提案ー……………(鈴木研究室)

音楽好きの集う家ー音楽による人と人との繋がりをつくる高齢者向け住宅ー……………(立花研究室)

現代の間宿(あいのしゅく)ー環状2号線の東西を繋ぐ回遊性歩行体験ー……………(上野研究室)

吉祥寺らしさの再興ー場の持つ価値を活かした再開発ー……………(曾我部研究室)

伝統を紡ぐ絹街道ー情景化する産業と宿場が織り成す伝承空間ー……………(六角研究室)

水と共存する宿舎ー暮らしの中の体験と水との関わりー……………(曾我部研究室)

弔魔万場ー都市化によって失われた生物の居場所とその弔いの場ー……………(須崎・印牧研究室)

はなしのうまれる空間ー座間市におけるまちを巻き込むシェアハウスの提案ー……………(山家・柏原研究室)

創造する人々へーつくる人と地域の人のための公共の場の提案ー……………(六角研究室)

都市農拠点となる FOOD HUBー地域に根ざす食と農の小さな循環ー……………(高橋研究室)

小田原祝祭都市化計画 2025ー歴史と自然の継承を目指した伝統文化の建築化提案ー……………(須崎・印牧研究室)

「トノウ」ーサウナ空間の新しい体験を茶室・露地によって再解釈するー……………(鈴木研究室)

音のなるハウへー音楽施設で川崎をめぐるー……………(山家・柏原研究室)

富士宮市大宮町本町商店街リニューアル計画ー商店街に観光を引き込む、分散型宿泊施設の提案ー……………(鈴木研究室)

歴史的建築物を活かした交流型オフィスー会うことが価値になる場所ー……………(野村研究室)

地に浸かり、地へ流れるー「湯上り×地域の魅力」住民と地域を繋ぐ拠り所の提案ー……………(六角研究室)

外部空間を用いた商店街の再生法ー大和市高座渋谷駅西口商店街を対象にー……………(山家・柏原研究室)

未来のトラック野郎の活動拠点ー10 年後の物流におけるドライバーの新しい働き方ー……………(野村研究室)

街のような生活空間ー「都市の在り方」を基にした新たな集合住宅の提案ー……………(曾我部研究室)

港湾とその先を見るー港湾周辺の水辺や自然の風景を活かした建物や空間の提案ー……………(鈴木研究室)

つながりを増幅する商い拠点ー適応力を鍛え、近隣関係を再構築するー……………(高橋研究室)

食と農の結節点ー畑と一体化した地域食堂の提案ー……………(六角研究室)

巡景ー営みの魅力を再認識する場の提案ー……………(六角研究室)

地域公園に溶け込む伊那北駅……………(曾我部研究室)

高架線跡地の遊歩道化ーみなとみらい地区の新たな歩行者軸ー……………(曾我部研究室)

藤沢 391 街区の再構築ースロープが繋ぐ立体街路ー……………(曾我部研究室)

ヒョップリョハウスー日韓の歴史認識について向き合うための文化施設ー旧三菱社宅保存改修案ー……………(須崎・印牧研究室)

盲学路ー盲人の空間把握能力から築く寄宿舎及び通学路の提案ー……………(六角研究室)

商店街の再復興ー小向マーケットの地域社会圏化ー……………(曾我部研究室)

地域の日常生活を支え災害時に拠点となる施設の提案ーフェーズフリーの考え方を取り入れた防災建築の新たなモデルー……………(上野研究室)

子どもたちの居場所ーフィリピンの貧困問題解決のためにー……………(曾我部研究室)

トラム・ベースー豊橋鉄道東田本線における停留所建築の提案ー……………(立花研究室)

緑地を生かした市民の憩いとなる空間ー深谷通信所跡地の利用計画ー……………(山家・柏原研究室)

境界をつなぐ商住融合の交流拠点の提案ー人モノ情報活動を交換する街の余白……………(上野研究室)

[卒業設計 B]

変わりゆく時代への適応を目指してー横浜市中区中心地区における戦後の防火帯建築の変遷と現況ー……………(中井研究室)

お遍路さんの道の駅ー埋もれた資源の活性化と癒し空間の提案ー……………(松隈・姜研究室)

海に出逢う街ー東京湾埋立地の将来像を描くー……………

.....(鈴木研究室)
 復活ー建物の移り変わりから見た徳島県小松島市における旧駅前由市街地の変遷ー.....(中井研究室)
 urban circulationー土を中心に広がる渋谷の循環ー.....
(須崎・印牧研究室)
 新たな情報交流の場となる駅併設型図書館ー大井川鉄道と連携した駅併設型図書館の提案ー.....
(松隈・姜研究室)
 傾斜地が生む新たな空間ー斜面との関係および配置からみた傾斜地に建つ集合住宅の構成ー.....(中井研究室)
 都市に住むーあんどエリアにおける集合住宅の提案ー表参道沿いの建物群がつくる外部空間の構成.....
(中井研究室)
 古き良き街並みの再興ー山梨県甲府市中心市街地における建築化された横丁の構成ー.....(中井研究室)

修士論文

文化継承による地方活性化に関する研究ー野村商店街を対象としてー.....(山家研究室)
 富士の残影ー富士塚を基点とした参詣風景を街に描くー.....
(六角研究室)
 人と猫が共生しながら離島を活性化する空間の研究ー宮城県石巻市田代島を対象としてー.....(山家研究室)
 複合図書館を核とした地域活性化に向けた研究ー金沢八景の立地特性に着目してー.....(松隈研究室)
 空間体験想像装置ー「奥への意識」のある空間の創造ー.....
(曾我部研究室)
 世界遺産地区における観光地化によるまち並みの変容に関する研究ーマレーシア・ペナン州ジョージタウンのキャンベル通りを対象としてー.....(山家研究室)
 自然と融和する建築ー風の循環と雨水利用ー.....
(曾我部研究室)
 都市の社ー都市型神社を対象とした地域活動拠点の提案ー.....
(六角研究室)
 人里離れた地域における自給自足による持続可能な集落の研究.....
(曾我部研究室)
 隅田川における街区更新の提案.....
(山家研究室)

上野指導

まちとつながる「余白」のある住宅ー横浜市羽沢常盤台地区を対象としてー.....(山家研究室)
 高等学校における校内居場所カフェの構築環境と運営.....
(中井研究室)

立花指導

習俗の住処.....
(中井研究室)

立花指導

室伏次郎の住宅に対する設計論とその過程に関する研究ー1970年～2000年までの6つの事例からー.....
(中井研究室)

鈴木指導

道標ー「被爆の実相」を後世に伝えるための保存活用法の提案ー.....
(山家研究室)

野村指導

CFD によるベスト型ファン付き作業服の温冷感・快適感評価.....
(岩本研究室)
 フルハーネス装着時における熱中症対策としてのファン付き作業服の冷却効果に関する研究.....
(岩本研究室)
 芯材に低降伏点鋼を用いた座屈拘束ブレースの疲労性能に関する研究.....
(藤田研究室)

博士論文

A third-moment exponential normal transformation and its application in structural reliability.....
(島崎研究室)

研究室紹介

建築学部 建築学科

【新機能型構法研究室】	白井佑樹
【耐震耐風構造研究室】	吉江慶祐、楊曉雨
【サステナブル構造研究室】	藤田正則、小寺直幸
【災害リスクマネジメント研究室】	朱牟田善治、落合努
【建築環境工学研究室】	岩本静男、藤本遼
【音・光環境研究室】	安田洋介、劉金雨
【建築環境・設備研究室】	芹川真緒、侯寧
【建築史研究室】	松隈洋、姜明采
【都市デザイン研究室】	曾我部昌史、秋山晃士
【建築計画研究室】	中井邦夫、鈴木成也
【建築デザイン研究室】	六角美瑠
【建築史研究室】	内田青蔵
【住宅デザイン研究室】	鈴木信弘、菊井悠央
【生活デザイン史研究室】	須崎文代、印牧岳彦
【居住環境デザイン研究室】	立花美緒
【都市計画研究室】	山家京子、柏原沙織
【建築保存活用研究室】	野村和宣、塩脇祥
【不動産デザイン研究室】	高橋寿太郎
【まちづくり研究室】	上野正也
【デザイン・プロセス研究室】	Stanley Russell
建築系実験室	
建築ものづくり工房	

研究室紹介

大学院 工学研究科 建築学専攻

[博士前期課程・博士後期課程]

《博士前期課程》

【建築環境・設備研究室】	……………	芹川真緒	……………
【建築史研究室】	……………	松隈洋	……………
【建築デザイン研究室】	……………	六角美瑠	……………
【住宅デザイン研究室】	……………	鈴木信弘	……………
【生活デザイン史研究室】	……………	須崎文代	……………
【居住環境デザイン研究室】	……………	立花美緒	……………
【建築保存活用研究室】	……………	野村和宣	……………
【不動産デザイン研究室】	……………	高橋寿太郎	……………
【まちづくり研究室】	……………	上野正也	……………
【デザイン・プロセス研究室】	……………	Stanley Russell	……………

《博士前期・博士後期課程》

【耐震耐風構造研究室】	……………	吉江慶祐	……………
【サステナブル構造研究室】	……………	藤田正則	……………
【災害リスクマネジメント研究室】	……………	朱牟田善治	……………
【建築環境工学研究室】	……………	岩本静男	……………
【音・光環境研究室】	……………	安田洋介	……………
【都市デザイン研究室】	……………	曾我部昌史	……………
【建築計画研究室】	……………	中井邦夫	……………
【都市計画研究室】	……………	山家京子	……………
建築系実験室	……………		……………
建築ものづくり工房	……………		……………

新機能型構法研究室

しらい ゆうき
白井 佑樹 (准教授)

最終学歴／白井 佑樹
2016 年 3 月 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程
環境理工学創造専攻修了 博士 (工学)



白井 佑樹

研究分野 建築構造力学、コンクリート系構造、合成構造、耐震設計法、新機能性構法、
研究内容 コンクリート系構造の耐震性能および継続使用性能評価、各種材料を対象とした新機能性構法
研究題目 コンクリートと鋼の合成構造における耐震性能、コンクリート系構造物に鉄筋の付着性能評価、木質面格子壁の力学挙動評価に基づいた制振構法の開発、露出柱脚とそこに取り付いた鋼ブレースの継続使用性能評価
研究紹介

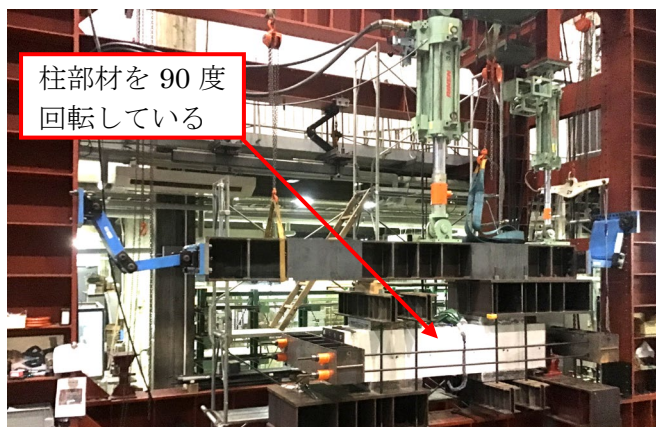
建物の設計法は、その建物が持つ性能を評価する性能設計法へと変化してきています。建物の性能のうち最も重要なのは安全性です。しかし特に阪神淡路大震災以降、地震に対する安全性の要求性能は変化してきています。大地震時に建物がどのように抵抗し、変形するか、中小地震時にはどの程度の被害レベルになるのかなどの研究を進めています。

鉄筋コンクリート造などのコンクリート系構造、およびコンクリート材料と鋼材料などから成る合成構造を主な対象として、安全性に関わる構造性能に加えて、地震後での継続使用性能の評価を実験に基づき行っています。さらには、新しい構造形式としてエネルギー吸収・損傷制御型 RC 構造やハイブリッド構造等の新機能型建築構法についても研究をしています。

卒業研究テーマ

損傷低減型構造システム／アンボントプレストレスト構法／RC 制振部材／RC 造の地震後の損傷・性能評価／合成スラブの力学性状および構造性能の把握／合成スラブの長期間載荷／木質面格子の架構実験／木骨石造建物の接合部評価

建築物の“性能”が評価される今、社会の安心の礎を築く



鉄筋コンクリート造柱部材の構造性能検証実験

発表論文

- 1) 佐藤宏貴, 坂上教夫, 白井佑樹, 島崎和司: ボイドスラブの長期たわみに関する実験的研究 (その 2): ボイドスラブの長期たわみ実用的計算法, 日本建築学会構造系論文集, 89 (822), 869-876 (2024. 8).
- 2) 白井佑樹, 島崎和司, 中村一男, 佐藤宏貴, 松浦恒久: 面材を組み込んだ架構の復元力特性の算定 面格子に無垢板を嵌合した耐力壁のせん断性能 (その 2), 日本建築学会構造系論文集, 89 (818), 428-438 (2024. 4).
- 3) 白井佑樹, 花里利一, 佐藤孝雄, 山脇光瑠, 鈴木知晃, 今井連, 島崎和司, 新津靖: 国宝銅造阿弥陀如来坐像の地震対策 その 2 地震モニタリングと 3 次元モデルによる動的解析, 第16回日本地震工学シンポジウム論文集 (2023. 11).
- 4) Y. Shirai and K. Shimazaki: EFFECT OF END BOUNDARY CONDITIONS ON MECHANICAL PROPERTIES OF REINFORCED CONCRETE COLUMNS SUBJECTED TO SHEAR FORCE, 18th World Conference on Earthquake Engineering (Milan, Italy, 2024. 7).

所属学会 白井 佑樹 日本建築学会、日本コンクリート工学会

現研究室構成員: 准教授 1 人 学部生 8 人
研究室構成員募集: 客員研究員 特別研究員 大学院学生 (社会人)

耐震耐風構造研究室

よしえ けいすけ
吉江 慶祐 (教授)

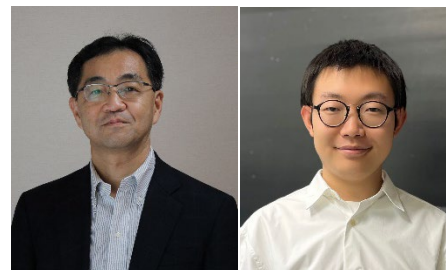
やん しゃおゆう
楊 暁雨 (助教)

最終学歴／吉江 慶祐

2007 年 3 月 東京工業大学大学院環境物理工学創造専攻博士課程修了
博士 (工学)

最終学歴／楊 暁雨

2022 年 3 月 東京工業大学大学院建築学系博士後期課程修了
博士 (工学)



吉江 慶祐

楊 暁雨

研究分野 (構造耐震耐風安全性・構造解析)

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的挙動とその予測法に関する研究, 制振構造・免震構造の構造安全性の検証方法・設計法に関する研究を行う。

研究内容

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的なふるまいの分析を通じ, 風荷重や地震荷重の性質と構造物の応答の関係を調べ, 制振構造・免震構造の地震・風に対する応答予測方法や構造安全性の検証方法や設計法に関する研究を行っています。

研究紹介

- (1) 免震構造物の弾性限界を超える領域の風応答予測手法・設計法と, 地震・風などの不規則な振動を受ける免震部材の疲労特性を調査し, 免震部材の健全性評価方法を研究します。
- (2) 曲げ変形が卓越する塔状比の大きな構造物の制振構造の方法を, 制振時の骨組みの変形の追跡し変形制御のメカニズムを調べ, 効果検証を行います。
- (3) 数値流体力学 (CFD) の構造設計へ応用するために, 建物周りの風圧力・風力を調べ, CFD モデリングの基礎資料を構築します。
- (4) 構造部材・非構造部材の力学的挙動を実験的に調べ, 耐震性能の評価方法, 設計法を研究しています。

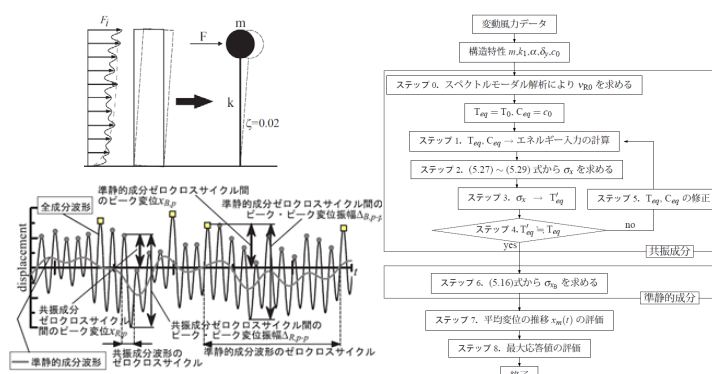


図1 弾塑性構造物の確率統計的風応答予測法

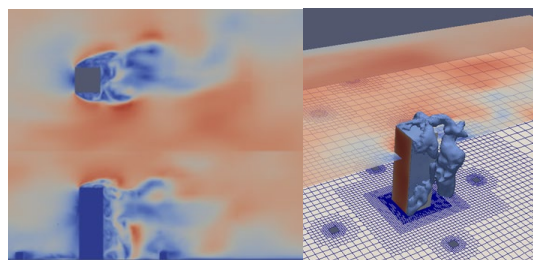


図2 建物周りの風の流れ

発表論文

- 1) 吉江 慶祐: 変動風力を受ける弾性構造物のレインフロー振幅の確率分布モデル, 日本建築学会構造系論文集, 第 818 号, 367-376 (2024. 4).
- 2) 吉江 慶祐, 北村 春幸, 大熊 武司, 和田 章: エネルギーの釣合に基づく平均成分を有する広帯域性変動風力を受ける弾塑性構造物の応答予測手法, 日本建築学会構造系論文集, 第 608 号, 21-28 (2006. 10).
- 3) 吉江 慶祐, 北村 春幸, 大熊 武司: 変動風力による弾塑性構造物への総エネルギー入力に関する研究, 日本建築学会構造系論文集, 第 572 号, 31-38 (2003. 10).
- 4) Xiaoyu Yang, Shoichi Kishiki: Evaluation of ultimate strength of exposed column bases considering the bearing stress of foundation concrete, Engineering Structures, Vol. 268, 114712, ELSEVIER (2022. 10).

所属学会 吉江 慶祐 日本建築学会, 日本風工学会, 日本免震構造協会, 日本建築構造技術者協会
楊 暁雨 日本建築学会, 日本鋼構造協会

現研究室構成員: 教授 1 人 助教 1 人 大学院生 2 人 学部生 9 人

サステナブル構造研究室

ふじた まさのり

藤田 正則 (教授)

こでら なおゆき

小寺 直幸 (助手)

最終学歴／藤田 正則

2000 年 3 月 東京工業大学大学院総合理工学研究科 環境物理工学専攻
博士課程修了 博士(工学)

最終学歴／小寺 直幸

2014 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了
修士(工学)



藤田 正則



小寺 直幸

研究分野 建築構造工学, 建築鋼構造, サステナブル構造, 耐震設計法

研究内容 制振部材の開発, 鋼と木質材料のハイブリッド構造の開発, 鋼構造の長寿命化技術の開発

研究題目 座屈拘束ブレース, 鋼木質複合構造, 鋼構造のリユース, 鋼材の耐久性, 機械式亀裂補修工法

研究紹介

鋼構造分野における環境負荷削減を目指して下記のテーマについて研究開発を行っています。

(1) 座屈拘束ブレースに関する研究

座屈拘束ブレースは軸方向力を伝達する部材(芯材)が座屈しないように, その外周を拘束材で補剛したもの(写真 1)で, 耐震・制振要素として優れた構造性能を有しています。損傷制御設計により地震時のエネルギーを座屈拘束ブレースで吸収できるため, 建物を長寿命化することができます。

(2) 鋼構造の部材リユースに関する研究

鋼構造の部材リユースは, 材料再生のための CO₂ 排出をとまなわないので, 環境負荷を小さくすることができます。その実用化を踏まえ, 設計・加工・施工・解体の領域において, 部材リユースのための鋼構造技術の提案・分析・評価を行っています(写真 2)。

(3) 鋼木質複合構造に関する研究

鋼木質複合構造は, 木質材料をできるだけ多く使用して森林再生に貢献することを考え, 同時に構造物としての機能性と安全性を損なうことのないシステムを目指しています。鋼と木質材料をハイブリッドにすることで, 各々の材料の長所と短所を補完しています(写真 3)。

(4) 鋼材の耐久性に関する研究

鋼材の耐食性を高めるため, 熔融亜鉛めっきが用いられますが, 長期に渡る自然環境下では, 腐食が進行する場合があります。ボルトのめっき層の劣化状況などを観察し, その耐久性の評価を行っています。

発表論文

1) 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの実験的研究 -充填材の影響を考慮した拘束材の局部破壊に関する検討-, 日本建築学会構造系論文集, 88 (807), 844-855 (2023. 5). 2) Proposal and application of structural soundness monitoring system for the buckling-restrained brace using steel mortar planks, Steel Construction, Design and Research, Vol. 15, 1-9 (2023). 3) 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける芯材と拘束材のクリアランス調整工法に関する研究, 日本建築学会構造系論文集, 87 (791), 20-30 (2022. 1). 4) Effects of the clearance between the core plate and restraining part on the structural performance of the buckling-restrained brace using steel mortar planks, Steel Construction, Design and Research, Vol. 15, 1-12 (2022). 5) 鋼構造環境配慮設計指針(案)-部材リユース-, 日本建築学会 (2015. 12).

所属学会 日本建築学会, 日本鋼構造協会, 日本免震構造協会, 日本技術士会, IABSE, STESSA

現研究室構成員：教授 1 人, 助手 1 人, 大学院生 6 人, 学部生 11 人



写真 1 座屈拘束ブレース



写真 2 部材リユース

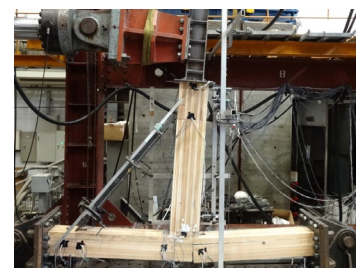


写真 3 鋼木質複合構造

災害リスクマネジメント研究室

しゅむた よしはる
朱牟田 善治 (教授)

おちあい つとむ
落合 努 (助教)

最終学歴／朱牟田 善治

1991 年 3 月 東京都立大学 博士 (工学)

最終学歴／落合 努

2001 年 3 月 神奈川大学 博士 (工学)



朱牟田 善治



落合 努

研究内容 地域の災害リスクの軽減化

研究分野 地震工学、構造工学、都市防災工学、地盤工学

研究題目 地盤震動特性評価、建物の地震応答特性評価、災害危険度評価、センシング応用技術
サイスミック・マイクロゾーニング、自然災害リスクの評価と低減に関する研究

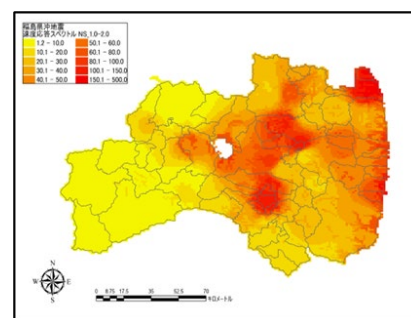
研究紹介 地震・気象災害に関連して地盤構造と建物被害の関連性、地域の防災対策を調査研究し、災害予測と防災対策をソフト面・ハード面から検討して効果的な災害リスク軽減化手法の研究



センシング技術の開発



被害調査 (液状化)



地震動強度の空間スペクトル特性

当研究室は、地震工学、地盤工学および都市防災工学をベースとして、地震によって引き起こされる地盤と建物被害発生メカニズム、気象・地震災害に関する被害予測と防災対策について研究を行っています。我が国は、これまで様々な自然災害に見舞われてきましたが、社会環境や災害環境も常に変化し続けています。例えば、2011 年に発生した東日本大震災は、これまで経験したことのない未曾有の大規模地震でしたし、現在では南海トラフ地震や首都直下地震の発生可能性が高まっています。また、地球温暖化の影響により、近年、日本近海の海水温が上昇し、気象関連の災害が多発しています。2019 年の台風 15 号や 19 号のような記録的な台風、爆弾低気圧、大雨や洪水など、これまであまり経験したことがない規模で、人々の暮らしを脅かすような激甚災害がたびたび発生するようになってきています。このような自然災害に対して、建築構造物をいかに守るか？、時代によってどんどん変化する人々のくらしや建築構造物をふまえ、災害に強いまちづくりとはなにか？、災害発生時にどう対処すれば被害を最小限に抑えられるのか？など、最新のセンシング技術なども応用し、ハード対策とソフト対策を組み合わせることで都市の災害リスクをいかにマネジメントしていくかという視点で、研究を行っています。

発表論文 1) 遠藤尚希, 朱牟田善治, 高橋健吾, 台風被害予測システム(RAMPT)の改良—樹木・土砂災害予測情報を活用した補正の提案—, 電気学会論文誌C, 144 (12), 1238-1246, 電気学会 (2024). 2) 朱牟田善治, 布施則一, 谷純一, ACMセンサを用いた腐食環境評価モニタリングシステムの試作と適用, 防錆管理, 68 (7), 2-7, 一般社団法人日本防錆技術協会 (招待論文) (2024. 1). 3) Y. Shumuta, Y. Shiba and N. Endo, DEVELOPMENT AND CASE STUDIES OF RISK ASSESSMENT AND MANAGEMENT SYSTEMS FOR POWER LIFELINES(RAMP), WCEE2024 (MILAN, ITALY, 2024). 4) 落合努, 荏本孝久, 宮野道雄, 生田英輔, 小田義也, 東北地方太平洋沖地震の地震動強さと微動観測結果の検討, 地域安全学会東日本大震災特別論文集, No.13, 1-4 (2023). 5) 落合努, 朱牟田善治, 白井佑樹, 涌井将貴, 伊山潤, 構造ヘルスマニタリングを活用した防災ワークショップの提案, 地域安全学会論文集, No. 45, 1-8 (2023).

所属学会 日本建築学会、土木学会、電気学会、地震工学会、地盤工学会、地域安全学会、物理探査学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 大学院生 2 人 学部生 11 人

建築環境工学研究室

いわもと しずお

岩本 静男 (教授)

ふじもと りょう

藤本 遼 (助手)

最終学歴／岩本 静男

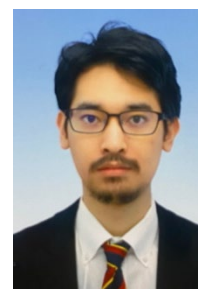
1989 年 3 月 明治大学大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻修了
(工学博士)

最終学歴／藤本 遼

2022 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻
博士前期課程修了 修士(工学)



岩本 静男



藤本 遼

研究分野 建築環境工学

研究内容 1) 建築内外の温熱環境・空気環境に関する研究、2) 住宅設備・建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究

研究題目 建築内外の気流分布を数値解析により予測する方法に関する研究、人体の温冷感を予測する方法に関する研究、建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究、住宅の冷暖房・給湯設備に関する研究

研究紹介

1. 建築内外の温熱環境・空気環境に関する研究

簡単に紹介すると、「暑くもなく寒くもない」温熱環境と「汚れていない清浄な」空気環境を作り出すための研究を行っています。主として数値計算と実験室実験の2つを大きなテーマとしています。大学院生・卒研生ともども、数値計算もしくは実験による研究を自主的に進めています。実験が深夜におよんだり、計算結果が得られずに苦しみむこともあります。新たな発見を目指して積極的に取り組んでいます。実験室内には室内気候実験用チャンバーを設置して多種多様な空調方式・暖房方式による室内気候を再現できるようになっています。①実験室内に気温、湿度、気流などを計測するセンサーを多数設置し、空調方式・暖房方式の違いによる室内気温分布や気流の分布を計測し、温冷感の違いを評価する、②実験条件を与えて数値計算を行い、計算結果と実験結果の比較・検証を行う、③被験者やサーマルマネキンを実験室内に入れて暖房方式の違いによる温冷感や快適感の評価を行う、などの研究に活用しています。

2. 住宅設備・建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究

住宅や事務所・ホテルなどの業務用建物に設置される設備では、冷暖房・空調・給湯のために大きなエネルギーを消費しています。省エネルギーのため、さらには地球環境負荷を削減するためにはどんな方策が考えられるかをテーマとし、ホテルや住宅の給湯設備、住宅暖房設備を中心に検討しています。また、実験室内には住宅用の給湯設備実験室を設置し、流量や湯温等を計測して消費エネルギーを求めたり、被験者実験による節湯効果を確かめる実験を行っています。

卒業研究テーマ 住宅用・業務用給湯システムの評価法に関する研究／室内空気分布計算における計算法・壁面境界条件に関する研究／各種暖房方式による室内温熱環境と消費エネルギーに関する研究／室内環境と着衣に関する研究／他

発表論文 1) Kae Takeda, Ryo Fujimoto, Shizuo Iwamoto, Wanghee Cho, The Proposal for Ceiling-Hanging Panels and its Impact on Cooling Efficiency, *Pertanika J. Sci. & Technol.* 33 (S2), 53-71 (2025). 2) T Ichikawa, S Iwamoto, R Fujimoto, K Sakaue, T Mitsunaga, Study on simulation of building drainage systems by CFD, Part 2 Verification on drainage characteristics of a drainage system with a basin, S-trap, and drainage horizontal branch pipe, *Proceedings of CIB-W062 Symposium* (Aug. 2024). 3) 大西玲暢, 岩本静男, 他, 給湯設備設計用水道水温の予測-全国代表都市の水道水温-, 空気調和・衛生工学会論文集 No. 320 (2023. 11).

所属学会 岩本 静男 日本建築学会、空気調和・衛生工学会、生理人類学会、太陽エネルギー学会、人間－生活環境系学会
藤本 遼 日本建築学会、空気調和・衛生工学会、人間－生活環境系学会

現研究室構成員：教授 1 人 助手 1 人 大学院生 2 人 学部生 12 人

研究室設備：給湯設備実験室、室内気候実験用チャンバー、サーマルマネキン

卒業学生数：学部生 363 人 博士前期課程 30 人 (2024 年度末まで)

音・光環境研究室

やすだ ようすけ

安田 洋介（教授）

りゅう きんう

劉 金雨（助教）

最終学歴／安田 洋介

2004 年 3 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻
博士課程修了 博士（環境学）

最終学歴／劉 金雨

2022 年 3 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻
博士課程単位取得退学 博士（環境学）



安田 洋介

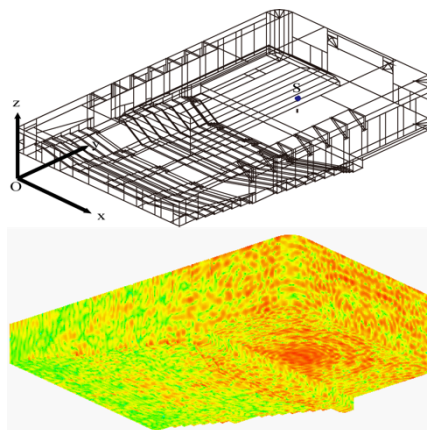
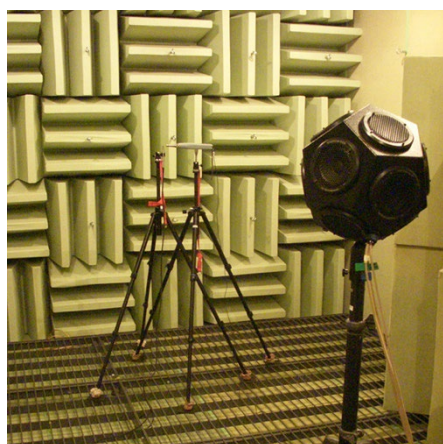


劉 金雨

研究分野 建築環境、音環境、騒音制御

研究内容 建築内外の音響設計のための数値シミュレーション手法の開発、室内音場の予測・制御、騒音伝搬対策、建築部材の音響特性の把握・モデル化、床衝撃音の予測・制御、都市騒音の予測・制御、音環境・視環境・複合環境の評価など

研究紹介 昨今、環境といえば CO₂ 削減や省エネといったいわゆる環境問題のことが頭に浮かびますが、建築に携わる上では、我々が日々の生活を営む器としての環境、またそれがもたらす QOL（Quality of Life）も同様に重視し、考えていく必要があります。当研究室ではこれらに密接に関わるものとして、建築環境工学の中でも音環境と光環境、特に前者を中心に研究を行っています。具体的には、より良い音環境の創出や騒音制御のための汎用的な数値シミュレーション手法の開発、それを応用した具体的な音場の予測、音場を形成する建築部材の音響特性の把握、建築内外での騒音伝搬予測・対策などに関わる研究を行っています。近年は、集合住宅で問題になりやすい床衝撃音の低減のための遮音機構の開発や、木造建築における遮音の問題、道路交通騒音や工事騒音といった都市騒音の予測・低減といった実務的な研究にも力を入れています。



発表論文 1) Y. Yasuda, *et al.*, Three-dimensional numerical investigation on propagation characteristics of road traffic noise from an embankment road: construction of correction formula for the effect of side slope angle, *Acoust. Sci. & Tech.*, **45**, 184-194 (2024). 2) 日本音響学会道路交通騒音調査研究委員会, 道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023”, 日本音響学会誌, **80**, 170-234 (2024). 3) T. Masumoto, *et al.*, Fast multipole boundary element method for aerodynamic sound field analysis based on Lighthill's equation, *J. Theor. Comput. Acoust.*, **31**, Article No. 2350009 (2023). 4) Y. Yasuda, *et al.*, A basic study on incidence directivity analysis using multipole and local expansions, *Acoust. Sci. & Tech.*, **43**, 77-80 (2022). 5) Y. Yasuda, *et al.*, Effects of the convergence tolerance of iterative methods used in the boundary element method on the calculation results of sound fields in rooms, *Appl. Acoust.*, **157**, Article No. 106997 (2020). 6) Y. Iwane, *et al.*, Study on reduction of tunnel blasting infrasound using silencer with tube resonators, *Acoust. Sci. & Tech.*, **39**, 428-431 (2018). 7) J. Liu, *et al.*, Validation of the low-frequency procedure for field measurement of façade sound insulation, *Buildings*, **11**, No. 547, 15p. (2021).

所属学会 日本建築学会、日本音響学会、日本騒音制御工学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 院生 3 人 学部生 5 人

建築環境・設備研究室

せりかわ まお

芹川 真緒 (准教授)

こう ねい

侯 寧 (助教)

最終学歴／芹川 真緒

2018 年 9 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
博士課程修了 博士 (工学)

最終学歴／侯 寧

2024 年 9 月 広島大学大学院先進理工系科学研究科建築学プログラム
博士課程修了 博士 (工学)



芹川 真緒



侯 寧

研究分野 建築環境工学、建築設備、温熱環境、省エネルギー、環境心理学、VR (仮想現実)

研究内容 シミュレーションプログラムを用いた室温とエネルギーの計算、住宅の温熱環境の評価、VR 技術を活用した建築・環境設計教育支援等。

研究紹介

気候変動対策は、世界的な喫緊の課題です。CO₂ 排出と深く関連するエネルギー消費の内、住宅・建築物での消費は小さくない割合を占め、建築分野での省エネルギーが必須です。一方、日本の住宅は、断熱性能が低く、冬期の寒さのために、居住者の健康に悪影響が生じていると指摘されています。これらの解決に向けて、高い環境性能を有する住宅・建築物の普及が望まれます。環境性能に優れた住宅の普及のためには、一般の居住者にその良さを認識してもらう必要があります。しかしながら、省エネルギーや光熱費削減の訴求力には限界があります。そこで、近年注目されている SDGs

(持続可能な開発目標) と関連付けた住宅性能の評価を実施しています。また、住宅の温熱環境を、居住者の関心の高いと考えられる健康性に関連付けた評価方法の提案を行っています。

一方、近年、スマートフォン (スマホ) の普及とスマホ型 VR (仮想現実) ゴーグルの開発により、環境評価の場面への VR 技術の活用が容易になってきています。これを背景に、環境に対する心理評価の取得や建築・環境設計教育の支援ツールとして VR 技術を位置づけ、その応用可能性を検討する研究に取り組んでいます。

感染症対策に関連し、大学講義室での換気の状態を調査しています。CO₂ 濃度を測定し、屋外の新鮮な空気を導入できているか判断します。講義室の大きさや在室者数によりますが、換気設備が設置されていない講義室でも、窓を少し開ければ、適切に換気されることが確認されました。一方、冷房時に、窓が閉め切られ換気が不十分である状態や、反対に窓を全開にして冷房エネルギー増加に繋がっていると考えられる状態の発生も確認されました。今後、運用の改善に繋げていく必要があります。

今後も引き続き、住宅・建築物の環境性能向上や設計教育支援に係る研究を進めていく予定です。

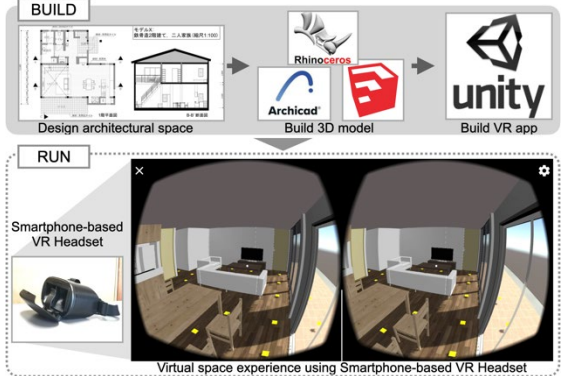
発表論文 1) Mao Serikawa, *et al.*, “Quantitative evaluation of the contributions of improved housing performances toward delivering sustainable development goals by a building energy simulation tool”, Sustainable Cities and Society, Vol. 79 (Apr. 2022). 2) Ning Hou, *et al.*, “Virtual reality space in architectural design education: Learning effect of scale feeling”, Building and Environment, Vol. 248, (Jan. 2024).

所属学会 日本建築学会、空気調和・衛生工学会、人間・環境学会

現研究室構成員：准教授 1 人 助教 1 人 院生 1 人 学部生 11 人
卒業学生数：20 人

	Health	Energy and environment		Sustainable cities	Others
Sustainable Development Goals	SDG 3 Good Health and Well-being	SDG 6 Clean Water and Sanitation	SDG 7 Affordable and Clean Energy	SDG 11 Sustainable Cities and Communities	
Calculation result	Operative temperature Living room 15.7 ~ 17.9 °C Bedroom 14.8 ~ 16.0 °C	Hot water consumption 169 ~ 149 m ³ /year	Primary energy consumption 73.7 ~ 55.2 GJ/year	CO ₂ emissions 3.6 ~ 2.7 t-CO ₂ /year	Performance improvement approximately 1,310 ~ 4,400 thousand JPY
Evaluation of contribution to each goal	Blood pressure 126.4 ~ 125.0 mmHg (-1.3mmHg)	Hot water consumption -12%	Primary energy consumption -25%	CO ₂ emissions -25%	Improvement of the performance of the house
Others		Water charge -5 thousand JPY/year	Energy cost -57 thousand JPY/year		Performance improvement approximately +1,290 thousand JPY

SDGs と関連付けた住宅性能の評価例



簡単に実現可能な建築空間の VR 体験

建築史研究室

まつくま ひろし

松隈 洋 (教授)

かん みよんちえ

姜 明采 (助教)

最終学歴／松隈洋

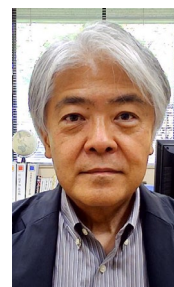
1980 年 3 月 京都大学工学部建築学科卒業

博士(工学・東京大学)

最終学歴／姜明采

2019 年 3 月 神奈川大学工学研究科博士課程建築学専攻修了

博士(工学)



松隈 洋



姜 明采

研究分野 近代日本建築史・近代韓国建築史

研究内容 モダニズム建築、建築設計方法論、建築アーカイブ、建築・建築家の史的調査研究、別荘地研究、関東大震災後の復興建築

研究紹介

1: 近代建築史・建築設計方法論に関する研究

現代の身近な生活環境を形作ってきた工業化を前提とするモダニズム建築 (Modern Architecture) の歴史と先駆者となった建築家の思想と設計方法論についての研究を行っています。特に、ル・コルビュジエとアントニン・レーモンドに師事し、戦前戦後の日本のモダニズム建築を牽引した前川國男や、同じくル・コルビュジエに師事した坂倉準三などを中心に、村野藤吾、坂倉準三、丹下健三、大高正人、鬼頭梓らについて、残された設計原図や写真など、建築アーカイブ資料を元に考察を進めています。また、それらの蓄積を元に、保存や改修の方法についても研究しています。



前川國男 京都会館 1960 年

2: 近代日本建築史・近代韓国建築史研究

近代日本建築史研究として、建築の史的調査をはじめ、建築家の活動や住宅地・別荘地の開発などを取り上げ、歴史的観点から分析を行っています。また、戦前期韓国で活躍した日本人建築家の建築活動に注目し、近代韓国建築史に関する研究も積極的に行っています。関東大震災による横浜市の街並みの変化について、震災復興期建築の建設過程やデザインの特徴を中心に研究しています。

3: 横浜の近代建築史・都市史研究

横浜の旧居留地に注目し、擬洋風建築から始まる建築のデザインの変化、あるいは、運河を中心とした景観の様相といった、街並みの変化に関する研究を行っている。このほか、日本が中国や韓国に開いた租界地などの調査も実施し、東アジアにおける建築の近代化の比較研究なども行いたいと考えています。

発表論文

松隈 洋 1) 松隈洋『建築の前夜 前川國男論』みすず書房、2016 (日本建築学会論文賞受賞)。2) 松隈洋『建築家・坂倉準三「輝く都市」をめざして』青幻舎 (2021)。3) 松隈洋『ル・コルビュジエから遠く離れて』みすず書房 (2016)。4) 松隈洋『モダニズム建築紀行』全2巻、六耀社 (2016)。5) 松隈洋『残すべき建築—モダニズム建築は何を求めたのか』誠文堂新光社 (2013)。6) 松隈洋『坂倉準三とはだれか』王国社 (2011)。7) 松隈洋編『前川國男 現代との対話』六耀社 (2006)。8) 松隈洋『近代建築を記憶する』建築資料研究社 (2005)。9) 松隈洋『ルイス・カーン—構築への意志』丸善、1997 ほか。

姜 明采 1) 姜明采、内田青蔵、須崎文代「復興記念館の建設経緯について—横綱町公園内建造物に求められた『日本趣味』について—」『日本建築学会計画系論文集』第 84 巻 757 号、日本建築学会、661-669、(2019.3)。2) 姜明采、内田青蔵、須崎文代「震災記念堂 (1930 年竣工) の建設経緯について」『日本建築学会計画系論文集』第 82 巻 734 号、日本建築学会、1028-1037 (2017.4)。3) 姜明采「震災記念堂の設計競技応募図案に見る大正期建築デザインの傾向」『非文字資料研究』14 号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、275-319 (2017.3)。

所属学会 松隈 洋 日本建築学会 / 姜 明采 日本建築学会、建築史学会、日本生活学会、日本生活文化史学会、大韓建築学会、韓国建築歴史学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 学部生 11 人

都市デザイン研究室

そがべ まさし
曾我部 昌史 (教授)

あきやま こうし
秋山 晃士 (助手)

最終学歴／曾我部 昌史

1988 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了

最終学歴／秋山 晃士

2018 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了
修士(工学)



曾我部 昌史



秋山 晃士

研究分野 建築設計

研究内容

都市やまちへの新しい視点での考察により、建築・都市デザインの可能性を実践的に追求する

研究題目

人の活動と地域との関係でみる建築・都市デザイン、まちづくり。

研究紹介

新しい可能性を一緒に探究するための場

都市の現実を相手に、われわれはどのような関わりをもつことが可能なのか。建築デザインやまちづくりの実践を通してその可能性を追求することが、この研究室の目標です。そのためには、具体的にコミュニケーションの場を構想するようなことから、新しいミーティング環境を創出することなど、さまざまなアプローチが考えられるでしょう。多様な探求を目指したいと考えていますが、その前提として、可能な限り実践的であること、そして、常識にとらわれない独自の視点を獲得することを基本的なスタンスにしたいと思っています。学生のみなさんには、このような探求に集中力をもって積極的に関わることを期待します。つまり、この研究室は、何らかの知見を受け取るだけの場ではなくて、新しい可能性を一緒に探求するための場である、ということです。

現在は、徳島県美波町での古民家再生や門前町の景観づくり、愛媛県今治市大三島での地域づくりに関連した建築プロジェクトを中心に、アートプロジェクトなどにも参加をしています。



来島海峡SA店舗ゾーン／愛媛／2019



赤松防災拠点家具デザイン／徳島／2017



古民家永晴邸改修プロジェクト／徳島／2018

発表論文 1) 著書：「アジアのまち再生-社会遺産を力に」(分担執筆)，鹿島出版会 (2017). 2) 著書：「通りからはじまる“まち”のデザイン」(分担執筆) 建築資料研究社 (2019). 3) 作品：「来島海峡サービスエリア店舗ゾーン」，愛媛県今治市 (2019). 4) 作品：「美波町赤松防災拠点」，徳島県美波町 (2017). 5) 論文：Hiroyuki Yoshioka, Masashi Sogabe, Miki Maruyama and Akira Hasegawa, Study of town making using features of the current situation - Part 1.

所属学会 曾我部昌史 日本建築学会、日本建築家協会、日本生活文化史学会、日本文化デザインフォーラム

現研究室構成員：教授 1 人 助手 1 人 大学院生 21 人 学部生 12 人

建築計画研究室

なかいい くにお

中井 邦夫（教授）

すずき なるや

鈴木 成也（助教）

最終学歴／中井 邦夫

1999 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了
博士(工学)

最終学歴／鈴木 成也

2025 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻
博士(工学)



中井 邦夫



鈴木 成也

研究分野 建築意匠、建築設計

研究内容 建築および都市の空間構成に関する研究

研究題目 ・都市建築タイポロジーに関する研究 ・戦後復興期における防火帯建築の構成に関する研究 ・空間配列による都市港湾地域の再構築に関する研究 ・住宅作品における空間構成に関する研究

研究紹介

人間は、家や病院で生まれ、学校や会社へ通い、住宅で家族と暮らし、そしてお墓に入るまで、一生を通じていつも建築とともに生活しています。あらゆる人間活動は建築や都市がつくりだす空間なしには成立しません。では、これらの多様な活動を支える空間は、どのような豊かさをもつべきでしょうか。人々の生活が多様化し、持続的な都市環境が求められるなか、私たちはどのような観点から空間をデザインしていくべきでしょうか。本研究室では、こうした問題について、実践的な活動や事例調査に基づく体系的な分析と理解を通して考察を深めます。そのことを通して、建築や都市の空間をデザインするうえでの独自の視点を発見し、研究論文や計画案としてまとめます。



台東区立浅草文化観光センター設計コンペティション佳作入賞案（2008）



富久町の家（リフォーム、2013）

発表論文 1) 中井邦夫（建築監修）、『横濱建築 記憶をつなぐ建物と暮らし』、トゥーヴァージンズ（2024. 3）. 2) 鈴木成也、中井邦夫、渡辺悠介、耐火建築促進法及び防災建築街区造成法下における長屋型ビルの立面構成、日本建築学会計画系論文集、第 89 巻、第 817 号、578-586（2024. 3）. 3) 藤岡泰寛、中井邦夫他、横浜防火帯建築を読み解く—現代に語りかける未完の都市建築、花伝社（2020. 3）. 4) 中井邦夫、横浜の防火帯建築における空所の構成、日本建築学会計画系論文集、No. 708、323-330、（2015. 2）. 5) 中井研究室、富久町の家（スノコ・ハウス）、第 30 回住まいのリフォームコンクール入賞、公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター（2013. 10）. 6) 坂本一成、中井邦夫他、建築構成学—建築デザインの方法、実教出版、84-93、103-112（2012. 3）. 7) 中井研究室+NODESIGN、台東区立浅草文化観光センター設計コンペティション佳作入賞案（2008. 12）.

所属学会 中井 邦夫 日本建築学会、都市住宅学会 / 鈴木 成也 日本建築学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 大学院生 9 人 学部生 13 人

卒業学生数：学部生 111 人 博士前期課程 29 人

建築デザイン研究室

ろっかく みる

六角 美瑠（教授）

最終学歴／六角 美瑠

2011 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了博士(工学)



六角 美瑠

研究分野 建築設計・建築意匠

研究内容 建築・環境・空間におけるデザイン・設計手法の研究

研究題目 空間フレーミング研究（視環境・窓と空間に関する研究）、伝家研究（家の歴史や生活などの継承の研究）、素材研究、建築物の改修・利活用に関する研究

研究紹介

私たちをとりまく環境と対話し、設計によって魅力的な空間として視覚的世界を構築することが建築デザインの面白さであり、役割の一つだと思います。「空間フレーミング研究」においては、建築を取り巻く外部環境を建築の「窓」を通じていかにデザイン操作できるかを研究しています。このように本研究室では、建築における構成要素と空間の関係を読み解き、距離感やスケール、人の感性に響くデザイン手法の設計への応用を考察し研究しています。また、建築の造作についても学び、素材や仕上げを探究したいと試みています。その先には、実際の住宅や地域の施設などを対象に、人やまちと関わる場としてプログラムと共に設計表現をしていくことを目指したいと考えています。



ORU 折織居 外観



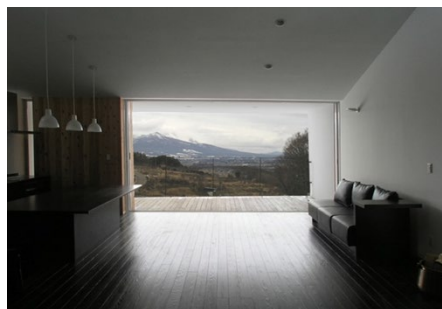
BentBox 浅間観荘 外観



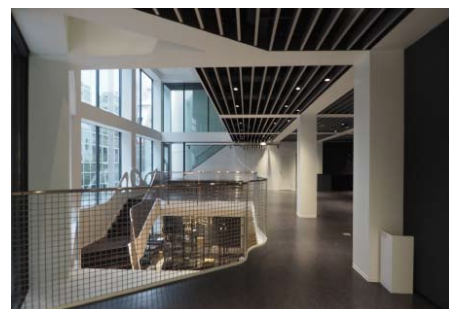
SeaForce bldg, 外観



ORU 折織居 内観



BentBox 浅間観荘 内観



SeaForce bldg, 内観

発表論文 1) 論文：「地域生態圏における空間フレーミング研究」特別教育・研究報告集，芝浦工業大学，2019 年 9 月. 2) 論文：「全球マド全史 1・2」窓学アーカイブ 2014-2016，YKKAP 窓研究所，2018 年 3 月. 3) 窓に秘められている力「静と動」「名作住宅から学ぶ窓周りディテール図集」，オーム社，2016 年 4 月. 4) 作品：「光恩寺弁天堂」『SD 2019』，鹿島出版会，2019 年 12 月.

所属学会 日本建築家協会、臨床美術学会

現研究室構成員：教授 1 人 大学院生 9 人 学部生 6 人

建築史研究室

うちだ せいぞう

内田 青蔵（特任教授）

最終学歴／内田 青蔵

1983 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻
博士課程満期退学(工学博士)



内田 青蔵

研究分野 日本建築史・近代建築史・日本住宅史

研究内容 建築の史的調査研究、住宅の史的調査研究、建築家に関する史的調査研究、建築保存再生計画、住宅地の史的調査研究、技術革新に関する史的研究、別荘地研究、日本及び海外（東アジア）の居留地研究、海外移民研究

研究紹介

1: 近代日本住宅史・近代日本建築史研究

近代日本建築史研究として、住宅の変遷をはじめ、建築家の活動や住宅地・別荘地の開発などを取り挙げ、歴史的観点から分析を行っています。

2: 横浜の近代建築史・都市史研究

大学の立地する横浜の建築史ならびに面的変化を扱う都市史研究として、旧居留地に注目し、擬洋風建築から始まる建築のデザインの变化、あるいは、インフラ整備から運河を中心とした景観の様相といった、街並みの変化に関する研究も積極的に行っています。近年は、横浜居留地と日本が開いた租界地などの調査も実施しながら、今後は東アジアにおける建築の近代化の比較研究なども行いたいと考えています。

3: 保存・再生に関する研究

欧米はもちろんのこと、わが国でも、近年、歴史的建造物の保存・再生の事例が増えています。こうした海外の事例や日本事例を取集し、その方法の整理分類といった研究も進めたいと考えています。



移築保存に携わった旧本多邸（岡崎市）



「あめりか屋」手がけた、
日本初の女優・川上貞奴の自邸（名古屋市）

発表論文

1) 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 「建築家・渡部栄治の経歴と建築作品について」, 『日本建築学会計画系論文集』, 88 (806), 1432-1437 (2023.4). 2) 内田青蔵, 「明治 43-44 (1910-1911) 年の『東京朝日新聞』連載記事「時代の家屋」に見られる住宅間取り図について—わが国戦前期の中流住宅勃興期における住宅に関する一考察—」, 『常民文化研究』 Vol.1, 3-30 (2023.3). 3) 野々村明佳里, 内田青蔵, 姜明采, 「同潤会の分譲住宅事業に関する研究（その2）—入居者選定のプロセスと広報活動について—」, 『日本建築学会計画系論文集』, 88 (804), 657-665 (2023. 2). 4) 内田青蔵他, 『和室礼讃——「ふるまい」の空間学』晶文社 (2022). 5) 下山美月, 内田青蔵, 「建築家・竹腰健造の建築活動について—戦後の代表作品である聖心女子大学キャンパス計画を中心として—」, 『宗教と文化』 Vol. 38, 聖心女子大学, 7-53 (2022. 3). 6) 渕上貴由樹, 内田青蔵, 「座敷の配置と用途にみる2階建て住宅の間取りの機能分化—戦前期刊行住宅書にみる2階建て独立住宅の理念形成に関する研究」, 『日本建築学会計画系論文集』, 86 (790), 日本建築学会, 2720-2730 (2021. 12). 7) 「日本近代における『民家』へのまなざしと民芸運動について」, 『歴史と民俗：神奈川大学日本常民文化研究所論集』, Vol. 37, 神奈川大学日本常民文化研究所, 463-505 (2021. 3). 8) 内田青蔵他『和室学：世界で日本にしかない空間』, 平凡社 (2020. 10).

所属学会 日本建築学会, 建築史学会, 日本生活学会, 日本生活文化史学会, 家具道具室内史学会, 日本家政学会, 日本産業技術史学会

現研究室構成員：特任教授 1 人 大学院生 1 人 学部生 2 人

住宅デザイン研究室

すずき のぶひろ

鈴木 信弘 (教授)

きくい ひさひろ

菊井 悠央 (助手)

最終学歴／鈴木 信弘

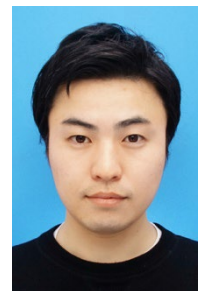
1988 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
修士 (工学)

最終学歴／菊井 悠央

2016 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
修士 (工学)



鈴木 信弘



菊井 悠央

研究分野 住宅設計・住宅デザイン・住宅作品

研究内容

住宅の設計を通して、地域・環境・暮らしの可能性と魅力を考える。

研究題目

敷地の魅力を活かし、居場所を生み出し、暮らしやすい住宅の設計。

研究紹介

現代における住宅設計は、人間の生活の基盤となる住居を構想する行為であると同時に、社会に対する意志や意義を建築的に表現しうる思索的営為でもあります。この設計行為は、社会への自己表明として位置づけられ、経済や技術といった具体的条件から、美学や哲学に及ぶ抽象的探究に至るまで、多様な思考を一つの住居に統合的に反映しうる点において、建築的にきわめて魅力的な営みです。一本の線を引くという行為に意味を見出し、エスキスにおける逡巡や試行錯誤の積み重ねを通じて、空間の構想とともに自己の設計思想や社会への構えがかたちづくられていくプロセスこそが、住宅建築における創造的思考の核を成します。本研究室では、住宅が地域社会といかなる関係性を築きうるか、といった課題にも着目し、実際の住宅設計を通じた理論的かつ実践的なアプローチによって、多角的な検討と探究を行っています。



図 1：土壁の下地となる竹木舞を編むワークショップの様子。伝統的な住宅の作り方を学び、現代の住宅づくりとの違いを確認しつつ、これからの未来の住まいを考える。

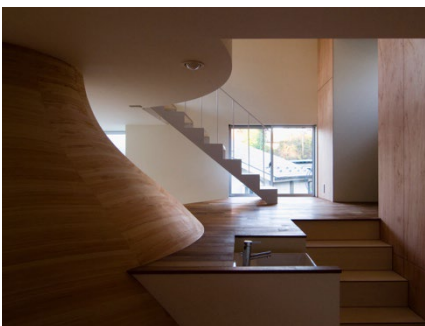


図 2：6 m 矩形に 4 m 円の主寝室を挿入し、その周囲を生活動線とした住宅。小住宅の中に豊かな居場所を多数設けることができるかがこれからの課題。



図 3：建築家の設計した住宅を訪ねて、設計者に直接インタビューを行うゼミの風景。事前に模型や図面を検討して質問を考えて臨む。

発表論文 1) 著書：「住宅の設計」(編著・執筆)，市ヶ谷出版社 (2023). 2) 著書：「最高の二世帯住宅をデザインする方法」(分担執筆) 株) エクスナレッジ (2021). 3) 著書：「かたづけの解剖図鑑」株) エクスナレッジ (2013). 4) 作品：「白水晶の家」，横浜市，2025，第 10 回ウッドデザイン賞。5) 作品：「青山学院附属英和学院スチューデントセンターオリーブ」，横浜市 (2022). 6) 作品：「戸塚 H 邸」，横浜市，2019，感境建築コンペ優秀賞，神奈川建築士会。7) 作品：「明治期 140 年民家の再生 U 邸」，東京都，2021，大田区景観まちづくり賞，第 8 回日本エコハウス大賞リノベ部門最優秀賞，エクスナレッジ社。8) 作品：鈴木信弘＋神奈川大学建築学科デザインコース教員「神奈川大学 29 号館」，横浜市，2015，神奈川建築コンクール環境賞，神奈川県。

所属学会 鈴木信弘 日本建築学会、神奈川建築士会、新木造住宅技術研究協議会

現研究室構成員：教授 1 人 助手 1 人 大学院生 2 人 学部生 11 人

生活デザイン史研究室

すざき ふみよ
須崎 文代 (准教授)

かねまき たかひこ
印牧 岳彦 (助教)

最終学歴／須崎 文代

2014 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築専攻博士後期課程修了
博士 (工学)

最終学歴／印牧 岳彦

2021 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
博士 (工学)



須崎 文代



印牧 岳彦

研究分野 建築史、住宅史、生活史

研究内容 住宅および生活デザインに関する建築史研究

研究題目 I：身体、II：技術、III：芸術、IV：共同性の 4 点に着目した生活デザインの建築史的研究

研究紹介 人間生活を成立させる建築と生活デザインの歴史について、主に住宅史、建築史、生活史の観点から研究を行っています。また地球環境にも目を向け、人間生活と自然環境との関係性の再構築を目指した調査研究を、実践的活動と合わせて追求しています。具体的な研究課題は、たとえば近代衛生論の展開、住宅の水まわり（台所・風呂・トイレ）の変容、生活共同体と相互扶助、ブラジル日本人移民住宅、旧渡辺甚吉邸など歴史的建造物の保存再生、環境やエコロジーといった視点からの近代建築史・建築理論の再検討などがあります。

(1) 近代衛生、水まわり空間の史的研究——近代以降に展開した衛生論とその実践、および住宅の台所・風呂・トイレ等の水まわり空間の歴史に関する研究。

(2) セツルメントハウスの史的研究——19 世紀後期以降の英米で相互扶助や共同生活を目的に実践されたセツルメントハウスの、国内外での展開に関する研究。

(3) 「小さな地球プロジェクト・里山スクールオブデザイン SSD」でのサーベイ——「人間－建築－自然環境」の事物連関に関するフィールドサーベイと新たなデザインの提案。

(4) 近代の建築言説・表象における「環境」概念についての研究——20 世紀初頭を中心とした近代建築の議論における、人間を取り巻く「環境」を制御するという発想の形成・展開過程についての研究。

発表論文

- 1) 須崎文代：居住生活の境域と縁－ドメスティック・ディスタンスII，現代思想，Vol. 50, No. 2, 123-134 (2022. 2).
- 2) 須崎文代：生活の《解体》考－暮らしと住まいを見つめる学問の軌跡，歴史と民俗，Vol. 37, 301-325 (2021. 3).
- 3) 内田青蔵，須崎文代，中谷礼仁，三浦清史：旧渡辺甚吉邸の建築的特徴に関する歴史的調査と評価，VSPORT 研究助成共同研究成果報告書 (2021. 9).
- 4) 印牧岳彦：コーウィン・ウィルソンによる「移動住宅」の提案とその思想的背景，日本建築学会計画系論文集，Vol. 85, No. 774, 1801-1808 (2020. 8).
- 5) 印牧岳彦：アドルフ・ロースの論考「劇場」の執筆背景および歴史的位置付けについての研究，日本建築学会計画系論文集，Vol. 85, No. 769, 743-751 (2020. 3).

所属学会 須崎 文代 日本建築学会，日本生活学会，日本生活文化史学会，建築史学会，家具道具室内史学会，日本産業技術史学会，日本家政学会 / 印牧 岳彦 日本建築学会，建築史学会，表象文化論学会，日本生活学会

現研究室構成員：准教授 1 人 助教 1 人 大学院生 3 人 学部生 11 人



図 1：フランクフルト・キッチン（フランクフルト・アム・メイン、エルンスト・マイ・ハウス）：近代における台所空間の効率化の例



図 2：再生民家「ゆうぎつか」（鴨川市釜沼、小さな地球プロジェクト）のコンポストトイレ：環境やエコロジーに配慮した循環型トイレのサーベイとデザインスタディ

居住環境デザイン研究室

たちばな みお

立花 美緒 (准教授)

最終学歴／立花 美緒

2006 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了
博士 (工学)



研究分野 建築設計、建築計画、建築意匠

研究内容 居住環境、住宅、集合住宅の建築設計、学校建築計画、図書館建築計画

研究題目 地域社会に貢献する住宅及び集合住宅の設計手法、執務空間の家具配置計画、
小中高等学校における内部広場の空間構成と利活用、課題解決型図書館の設計手法 他

研究紹介

地域社会とともに暮らす居住環境をデザインする

住まいと仕事の関係や暮らしの価値観は大きく変容しています。社会的背景と居住環境の関係を現在と過去から学び、未来の豊かな暮らしを支える住宅を実践的に提案する研究室です。近現代の住宅と集合住宅、国内外の集落、生産と消費を再縫合する暮らし等について、文献とフィールドワークでリサーチし、地域社会に貢献する建築とインテリアをデザインします。居住環境の在り方について、学生も教員も、自ら学び、共に学ぶ姿勢を大切にしています。現在は、エコヴィレッジ、執務空間、国内及びヨーロッパの小中高等学校及び図書館の空間構成と家具に関するリサーチ、医療系コモンズと住宅の設計を行っています。



蝶番の家

写真：太田拓実



長押の室

発表論文

- 1) M. Tachibana et al., "HINGE HOUSE": Space embracing plural people, activities, and objects by devising a timber frame joint, Japan Architectural Review, Vol. 4, No. 1, 22-27 (2021).
- 2) 立花美緒他, デンマークのギムナジウムにおけるコモンコアの空間構成と使われ方, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 85, No. 775, 1841-1851 (2020).
- 3) 立花美緒他, デンマークの学校における英語の授業活動とセッティングのシステム, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 87, No. 793, 510-520 (2022).
- 4) 立花美緒他, デンマークのフォルケスコレにおけるコモンコアの構成と利用状況, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 89, No. 824, 1811-1821 (2024).
- 5) 立花美緒他, 第4版コンパクト建築設計資料集成, 丸善, pp.190,191,193,198,200,201,203,211,212-223 (2024).

所属学会 日本建築学会

現研究室構成員：准教授 1 人 修士 2 人 学部生 9 人

都市計画研究室

やまが きょうこ
山家 京子 (教授)

かしはら さおり
柏原 沙織 (助教)

最終学歴／山家 京子

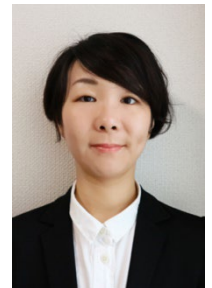
1992 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
博士(工学)

最終学歴／柏原 沙織

2018 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了
博士(工学)



山家 京子



柏原 沙織

研究分野 山家 京子 建築・都市計画 柏原 沙織 歴史的都市景観・都市デザイン

研究内容 都市空間に関する研究、まちづくりに関する実践的取組み

研究題目 都市居住とコミュニティに関する研究と設計的検討、地域資源を活かしたまちづくりに関する調査研究及び実践的取組み、郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究、公共空間の利活用に関する研究と設計的検討、関係人口の創出を促進する空間に関する調査研究、商業地における創造型景観形成に関する調査研究

研究紹介

都市空間における場の生成をテーマとし、フィールドワークに基づく調査研究を実施するとともに、持続可能なまちづくりに実践的に取り組んでいます。

本研究室では 2016 年度より、横浜市との協定に基づき横浜市十日市場駅周辺地域におけるまちづくりに取り組んでいます。たからもの探しワークショップ+マップづくり、住民のヒアリングに基づく思い出・生活カード作成などを実施し、それらを報告書としてまとめました。「たからもの探しワークショップ」(図 1) では、学生と地域住民が地域の魅力を再発見する場として、まち歩き、個人たからものマップづくりなどを行い、そこで抽出された地域たからものを建築学科生の観点から「十日市場たからものマップ」としてまとめました。また、これらの取組みから、愛着のある場所に関する考察を行い、住宅地計画を検証するとともに、今後の持続可能なまちのあり方を検討します。

2022 年度からは鎌倉市との包括協定に基づき、小町通りにおける景観形成支援に取り組んでいます。古都でありながら分かりやすい景観形成の規範がない中で、現地調査から景観特徴を抽出したほか(図 2)、学生からの設計提案を元に商店会会員や市民、学生がワークショップを通して小町通りらしさについて議論し、キーワードを抽出してシーン集を作成しました。引き続き鎌倉らしい景観形成に向けた合意形成に資する手法やツールを検討していきます。

卒業研究テーマ

郊外住宅地における生活圏および愛着のある場所・居場所に関する研究／民間空地活用事例に関する調査研究／コロナ禍を契機とした地域交流・施設に関する調査研究／海外の都市再生に関する事例研究 他

発表論文 1) Activities of the Neighborhood Association and an Evaluation of the Residential Environment in Suburban Area of Yokohama”, 共, Urban and Regional Planning Review, 11, 154-177 (2024. 8). 2) 自治体による二地域居住に関わる取り組み-全国二地域居住等促進協議会の加盟自治体を対象としたアンケート調査から-, 共, 日本建築学会技術報告集, 29 (71), 418-423 (2023. 2). 3) 民有空地の活用検討プロセスに関する実践的研究-川崎市八丁畷駅前空地における実験的取組みを事例として-, 共, 日本建築学会技術報告集, 26 (64), 1173-1178 (2020. 10). 4) A Research on Community Involvement Complementing Residents' Association -A Case of Voluntary Community Activities in Yokohama Residential Suburb, 共, ICAPPS 2019 (Seoul, 2019. 8).

所属学会 山家 京子 日本建築学会、日本都市計画学会

柏原 沙織 日本建築学会、日本都市計画学会、都市住宅学会、日本環境心理学会



図 1: 「たからもの探しワークショップ」の様子

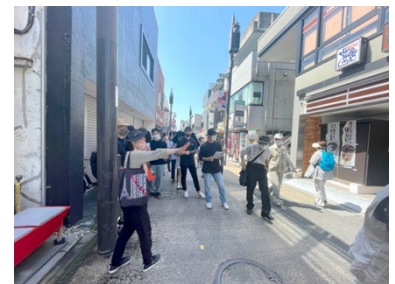


図 2: 鎌倉小町通りでのフィールドワークの様子

現研究室構成員: 教授 1 人 助教 1 人 大学院生 11 人 学部生 8 人

建築保存活用研究室

のむら かずのり
野村 和宜 (教授)

しおわき しょう
塩脇 祥 (助手)

最終学歴／野村 和宜

1988 年 4 月～ 三菱地所設計 (現在: エグゼクティブフェロー)

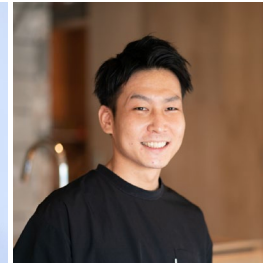
2019 年 3 月 東京工業大学大学院 博士課程修了

最終学歴／塩脇 祥

2015 年 3 月 神奈川大学工学研究科建築学専攻博士前期課程修了
修士 (工学)



野村 和宜



塩脇 祥

研究分野 建築保存活用、リノベーション、継承デザイン、都市再開発、歴史的景観、まちづくり

研究内容 歴史的建造物などの建築ストックを使い続けるためには、歴史をはじめとする多様な価値を顕在化させた上で、安全などの課題への対応、まちづくりへの対応、諸制度の活用などを検討することで、的確な方法によって価値継承と時代の要求に応えた機能更新を両立させる必要があります。そのための検討プロセスや技術的手法をはじめ、アーカイブスの構築による歴史的価値の発信方法などについて研究しています。

研究紹介

(1) 保存と活用・開発の検討プロセス

歴史的価値の継承、機能更新、まちづくりなどの与件を整理し最適案を生み出す検討プロセスの研究。

(2) 煉瓦造建造物の耐震・防火対策

明治期に建設された煉瓦造建造物の耐震・防火対策の手法における実践的研究。

(3) 歴史的な都市・集落のアーカイブス構築

都市や集落の歴史的価値を後世に残し発信するためのアーカイブスの構築と活用に関する研究。

(4) 実証実験型のまちづくり

地域ごとの特性や課題を発見し、持続的なまちづくりを目指す実験的な手法に関する研究。



図1 日本工業倶楽部会館の保存再生

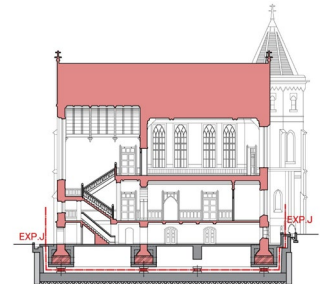


図2 煉瓦造の耐震・防火改修方法

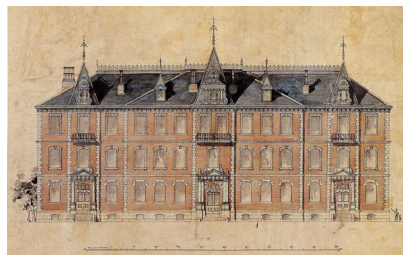


図3 街全体の建築アーカイブス



図4 空家の実験的活用 (芸術展示)

発表論文

- 1) 野村和宜, 山崎鯛介: 日本工業倶楽部会館の活用・継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用・継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その1), 日本建築学会技術報告集, 23 (55), 1043-1048 (2017. 10).
- 2) 野村和宜, 山崎鯛介: 歌舞伎座の活用継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その2), 日本建築学会技術報告集, 25 (59), 477-482 (2019. 2).
- 3) 野村和宜, 山崎鯛介: 東京中央郵便局の活用継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その3), 日本建築学会技術報告集, 25 (59), 491-496 (2019. 2).

所属学会等 日本建築学会, 日本イコモス国内委員会

現研究室構成員: 教授 1 人, 助手 1 人, 学部生 5 人

不動産デザイン研究室

たかはし じゅたろう

高橋 寿太郎 (教授)

最終学歴／高橋 寿太郎

2000 年 3 月 京都工芸繊維大学 工芸科学研究科 博士前期課程修了
修士 (経営学)



高橋 寿太郎

研究分野 建築企画、不動産マーケティング・ファイナンス、地方創生

研究内容 建築と不動産のあいだの領域にある諸事象についての研究

研究題目 建築企画のための不動産マーケティング調査に関する研究、
についての研究、建築プロジェクトの収益性とデザインに関する研究、
の改善の研究

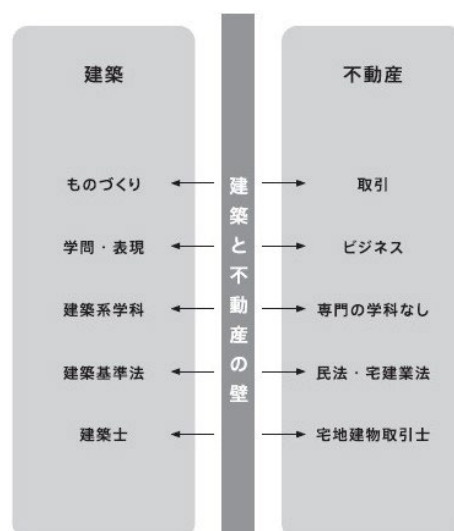
研究紹介

不動産デザイン研究室は「建築学と不動産学の融合」を理念とし、
建築やリノベーションプロジェクトの成立条件 (不動産・マーケティング・
ファイナンス) を考える分野である「建築企画」を積極的に行う
日本で初めての研究室です。

少子高齢化が加速し、空き家が急増するなど、ストック社会に向かう
産業構造が大きく変化する時代には、この建築企画と建築デザイン
やまちづくりを同時に考える人材が求められます。学生のみなさんには、
こうした幅広い分野に興味を持ちつつ、さらにチームビルディング
やプロデュースといった新しい領域の開拓を期待します。

研究室が特に重視するのは、社会課題を解決させるための「広義の
デザイン思考」です。社会やユーザーの課題解決に向けて、モノだけ
でなく、コトを構想・設計することを目指します。

リノベーションの企画と実現可能性
地方における空き家バンクシステム



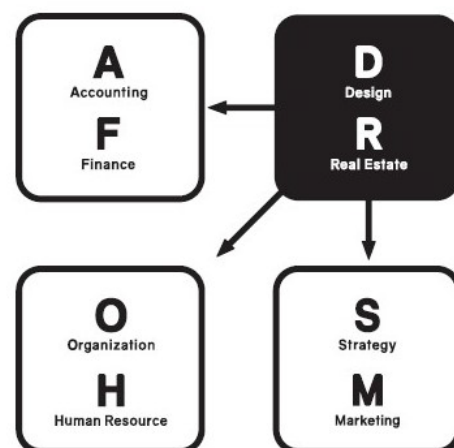
建築と不動産のあいだの壁と融合

A : 会計戦略・お金の仕組み

D : 設計・建築計画

F : ファイナンス・キャッシュフロー

R : 不動産コンサルティング



O : 組織構造・企業文化

S : 経営戦略・市場分析

H : 人材マネジメント・インセンティブ

M : マーケティング・販路計画

建築不動産とマネジメント領域の関係性



建築企画事例『イマケンビル一棟リノベーション』2018

発表論文 1) 著書『建築と不動産のあいだ』, 学芸出版 (2015). 2) 著書『建築と
経営のあいだ』, 学芸出版社 (2020). 3) 著書 (監修)『建築学科のための不動産学
基礎』, 学芸出版 (2021). 4) 著書 (共著)『建築系のためのまちづくり入門』, 学芸
出版社 (2021). 5) 著書 (共著)『建築生産 第三版』, 市ヶ谷出版社 (2022).

現研究室構成員 : 教授 1 人, 大学院生 1 名, 学部生 3 人

まちづくり研究室

うえの まさや
上野 正也 (准教授)

最終学歴／上野 正也
2015 年 3 月 横浜市立大学都市社会文化研究科博士後期課程修了
博士(学術)



上野 正也

研究分野 まちづくり、創造都市、都市計画

研究内容 創造性を活かしたまちづくり、公共空間の利活用、エリアマネジメント

研究題目 創造性を活かした都市政策・都市づくりに関する研究、創造的産業と都市に関する研究、地域資源を活かしたまちづくりの検討及び実践、郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究、公共空間の利活用に関する研究と設計的検討

研究紹介

複雑化する今日の都市・地域における課題に対して、様々なアプローチを検討し、その解決方法を探る必要があります。ここでは、ハード(建物)だけでなく、その場所での活動を考えることや管理・運営(マネジメント)といったソフト面を含めて考えることが大切です。

そこで、本研究室では、地域に求められる建築やこれからの都市像を考えるにあたって、その検討プロセスを重視し、地域調査を経て空間づくりに取り組みます。

また、まちづくりの実践的取組みとして、2022 年度より都市計画研究室と協働し、横浜市十日市場駅周辺地域におけるまちづくりの推進にかかわっています。本取組みは横浜市との協定に基づき実施しているものであり、地域への愛着を育むことを目的として、地域資源(魅力)を発掘・発信する取組みを実施してきました。さらには、十日市場地区におけるエリアマネジメント活動の支援を行っています。

このほか、京急電鉄と川崎市、そして神奈川大学にて産学官連携協定を結び、川崎市内の京急沿線におけるまちの活性化および将来ビジョンの形成に向けて、実践的なまちづくり活動を展開しています。その中の具体的な活動として、八丁駅駅前空地の活用検討を進めています。民間の空地でありながら公共性の高い場所の活用方法を検討するにあたって、社会実験を通じて地域ニーズを調査するとともに当該敷地の管理・運営方法について検討しています。また同時に、空地のデザイン(舗装面やストリートファニチャー)を検討し、実際に施工した上でさらなる実証実験を実施します。



図1：十日市場地区におけるエリアマネジメント活動の支援・活動の方向性を検討するワークショップの様子



図2：Park Line 870(パークラインはっちゃん)：学生が中心となって検討したデザイン案を学生自らが施工し実現した広場

発表論文 1) 民有空地の活用検討プロセスに関する実践的研究 -川崎市八丁駅駅前空地における実験的取組みを事例として-, 共, 日本建築学会技術報告集, 26 (64), 1173-1178 (2020. 10). 2) A Research on Community Involvement Complementing Residents' Association -A Case of Voluntary Community Activities in Yokohama Residential Suburb, 共, Asia-Pacific Planning Society 2019 国際会議 (Seoul, 2019. 8). 3) 横浜市における創造都市政策と創造産業の立地動向に関する研究, 共, 日本都市計画学会, 49 (1), 11-18 (2014. 4).

所属学会 日本建築学会、日本都市計画学会、文化政策学会

現研究室構成員：准教授 1 人 大学院生 2 人 学部生 11 人

デザイン・プロセス研究室

スタンリー・ラッセル

Stanley Russell（特任教授）

最終学歴／Stanley Russell

1985 年 5 月 Master of Architecture, University of Pennsylvania Philadelphia, PA.
修士(建築)



Stanley Russell

研究分野 建築デザイン

研究題目 建築デザイン・プロセス Architecture Design Process, サステナブル建築

Sustainability in Architecture, 建築職人技 Craftsmanship, 日本建築 Japanese Architecture

研究紹介

- 創造性を活かした建築設計をするためのプロセス 芸術作品と建築デザイン・プロセスの関連性の研究, 新しいテクノロジーを生かした建築デザイン・プロセスの研究。
- サステナブル建築 サステナブル建築の設計の研究及び実践, サステナブル建築の材料の研究と検討。
- 建築職人技 日本木造建築の研究, 日本の建築職人の技術の研究及び実践, 日本現代建築における職人技の研究
- 日本建築 日本建築の歴史の研究, 日本現代建築の研究。

発表論文 1) Design Process Studio, Presentation/Proceedings S-Arch Conference Hong Kong University, July 2017. 2) Japanese Architecture in the 21st Century: The Role of the Craftsman, Presentation/Proceedings, IaSU2016 conference, Mukogawa University, Nishinomiya, Japan, July 2016. 3) Cultivating the Craftsman's Eye in Architecture Education, International Journal of Arts and Sciences, 4 (21), 2011.

所属学会 American Collegiate Schools of Architecture

建築系実験室

さとう ひろき

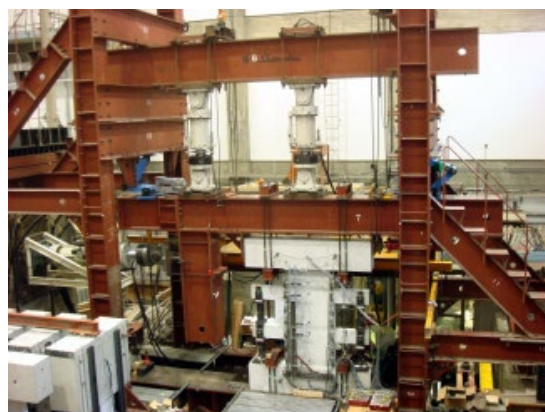
佐藤 宏貴 (教務技術職員)



佐藤 宏貴

建築学科実験棟

建築学科実験棟 (神奈川大学 12 号館) は、1967 年に竣工した国内有数の実験施設です。各実験に精通したスタッフと教員、学生が共同して、大型構造実験をはじめ、音・光環境、温熱空気環境、建築設備などに関する最先端の実験・研究を行っています。本実験施設を利用した企業との産学共同研究も行われており、制振構造や消音機構などの最先端の技術が実物件へ適用されています。



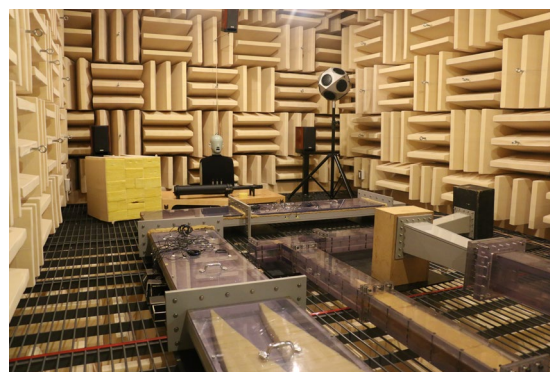
主な保有設備

【構造コース】

- ・ 構造物用動的試験装置 (島津製作所製) 最大能力: $\pm 1,000$ kN (動的: ± 750 kN) $\times 1$ 台、 $\pm 1,000$ kN $\times 2$ 台 (軸力)
- ・ 1軸振動台装置 (島津製作所製) 積載能力: 10 kN ストローク: ± 200 mm、最大載荷速度: 25 cm/sec
- ・ 多軸仮動的応答実験システム (理研精機製) 最大能力: ± 700 kN $\times 1$ 台、 ± 200 kN $\times 2$ 台
- ・ 5,000kN長軸圧縮試験機 (東京衡機製造所製) 最大圧縮能力: 5,000 kN
- ・ 1,000kN万能試験機 (島津製作所製) 圧縮、引張、曲げ載荷 (2.5 mスパン程度)、最大能力: 1,000 kN
- ・ 1,000kN材料試験機 (島津製作所製) 圧縮、引張、最大能力: 1,000 kN
- ・ 2方向永久磁石地震波振動台載荷設備 (サンエス製) 最大積載重量: 3 kN、最大変位: X・Y方向共150 mm
- ・ 起振機 加振力: 3 kN $\times 3 = 9$ kN、加振方向: 水平最大振幅 ± 250 mm、最大速度: ± 1500 mm/sec
- ・ 疲労・耐久試験システム (島津製作所製) EHF-EV101K1 最大試験力: 100 kN ストローク: ± 25 mm

【環境コース】

- ・ 音響実験施設 (無響室、半無響室、低騒音送風装置、統合音響計測システムなど)
- ・ 仮想現実立体視システム (プロジェクター MARQUEE8500/3D、120 インチスクリーン、反射ミラーなど)
- ・ 室内環境実験用チャンバー (冷凍機: 日立 RCUJ75A1, 6.7kW、コイルユニット: クボタ DSCM-1、蒸気発生器: 0~2.5 kg/h)
- ・ 給湯実験室 (実験室: 幅 4.4 m $\times$ 奥 2.7 m $\times$ 天井高 2.4 m)
- ・ インパルス応答の計測及び実時間畳込演算システム (B&K Type 4292-L、7841、Lake Huron、RME TDIF-1 など)
- ・ 多孔質材料垂直入射音響特性計測システム (B&K Type 4206)
- ・ サーマルマネキン (PT-Teknik 社) 身長 168 cm、体重 20 kg、放熱量 0~200 W/m²、最小単位 0.1 W/m²、表面温度 18~42 °C
- ・ 0~200 W/m²、最小単位 0.1 W/m²、表面温度 18~42 °C
- ・ ダミーヘッド & トルソシミュレータ (B&K Type 4100)
- ・ FFT アナライザ (HP3566A-32ch、小野測器 DS3000-8ch)
- ・ 非接触レーザー振動計 (B&K Type 3544)



建築もののづくり工房

かわち ゆき

河内 由希（教務技術職員）



河内 由希

建築もののづくり工房

当該建物は、建築実習室として竣工しました。1 階は大型木工機械を配置し様々な木材の加工に対応し、2 階には、教室が二部屋あり、研究内容や授業内容によって天井高さの違う二部屋を用途に合わせて使い分けることができる教室を兼ねた工房 B 工房 C があります。

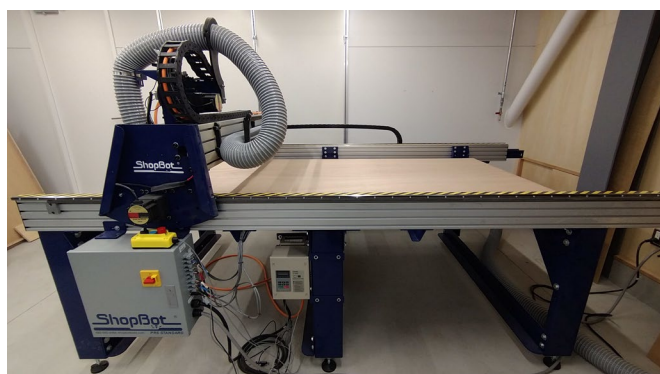
木工機械は、木材料の製作に必要とされる基本的な機械を有し、ものづくりの現場で行われている実際の製作過程が実感を持って体験できます。また CNC ルーターは、デジタルデータを元に 1200×2400（mm）サイズまでの木材加工を可能としており複雑な形状もデータ通り加工することができます。

主な業務は当学科の授業内容に合わせた木材料の木取・製作・試作と卒業制作や研究室プロジェクトに関わる、様々な試作品の製作・検討の為に利用されます。

主な保有設備

【大型木工機械】

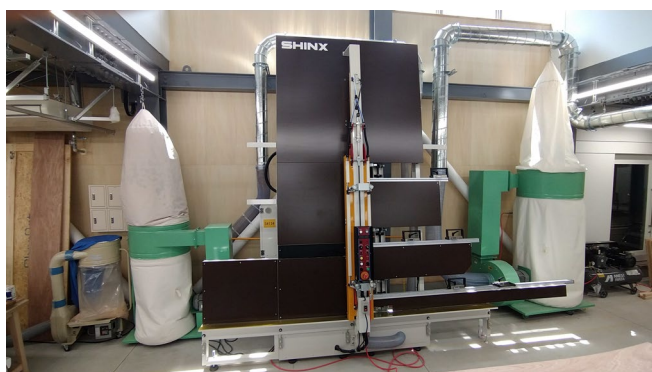
- ・軸傾斜横切り盤（東海製作所製 SFJ-1300）1 台
- ・手押し鉋盤（桑原工業製 KPN-400）1 台
- ・自動一面鉋盤（鈴三工業製 GN-45）1 台
- ・軸傾斜昇降盤（東海製作所製 NSJ-16）1 台
- ・パネルソー（シンクス製 SPN1-2400）1 台
- ・集塵機 サイレンサー付き
（鈴木工業製 型番：DT-5MⅡ 型番：DT-30MⅡ）
- ・CNC ルーター（ShopBot 製 PRSstandard96-48）1 台
- ・コンプレッサー（アネスト岩田製 TLP22EG-10）1 台
- ・卓上ボール盤（HIKOKI 製 B13S）1 台
- ・糸のこ盤（マキタ製 MSJ-401）1 台
- ・バンドソー（京セラ製 TBS-80）1 台



CNC ルーター



手押し鉋盤



パネルソー



軸傾斜横切り盤

神奈川大学建築学研究執筆規程

2023 年 07 月 31 日

1. 名称

本誌の名称は、和文名で『神奈川大学建築学研究』、
英文名で『Reports for Architecture and Building
Engineering, Kanagawa University』とする。

2. 目的

本誌は、本学で建築学分野の研究を行う学部・大
学院研究科および研究所・センター等組織の記事を
掲載する建築学系の機関誌であり、各組織の事業お
よび研究の成果を公表することを目的とする。

3. 運営および原稿の採否

本誌の編集・発行および原稿の採否は、建築学部
広報委員会および建築学研究所所報編集委員会が合
同で組織する神奈川大学建築学研究編集委員会（以
下、編集委員会という）が行うものとする。

4. 投稿資格

本誌に対する投稿資格は、以下（１）～（６）に
該当する者がこれを有する。ただし、（５）に掲げる
者および（６）で原稿執筆を依頼する学外者につい
ては、編集委員会が定める執筆承諾書を建築学研究
所へ提出することにより、建築学研究所への原稿の
著作権の譲渡に同意すると共に、神奈川大学研究倫
理綱領（以下、倫理綱領という）の遵守を誓約する。

（１）本学建築学部の教授、准教授、助教、助手お
よび教務技術職員

（２）建築学部以外に所属する本学専任教員で建築
学分野を専攻する教授、准教授、助教および助手の
うち、建築学研究所所員として登録されている者

（３）建築学部以外に配属されている本学教務技術
職員で、前号に掲げる建築学研究所所員と共に建築
学分野の研究や業務にあたる者

（４）建築学研究所共同研究または建築学研究所プ
ロジェクト研究に研究分担者として参画している研
究所客員教授、客員研究員、特別研究員

（５）前号に掲げる研究分担者以外の者で、建築学
研究所共同研究または建築学研究所プロジェクト研
究に研究分担者として参画している外部機関（大学、
研究所、企業等）に所属する者。

（６）その他、編集委員会から原稿を委嘱された者。

5. 記事の区分

本誌が掲載する原稿（以下、記事という）は報告
書としての性格を持つものとし、原著性を要求しな
い。記事の種類は、以下（１）～（１３）の通りと
する。

（１）論説

学問・技術・建築学系各組織の事業・動向等に関
する論説、意見を綴った記事である。原則として 4
頁。

（２）総説

特定の分野や主題について、関連する文献や資料
に基づいて総括的に論評した解説的色彩の強い記事
である。原則として 4 頁。

（３）受賞研究の紹介

第 4 条に掲げる投稿資格を持つ者が所属学会等
から顕著な功績のあったことを評価された研究や業
績について紹介した記事である。前年度に受賞等の
対象となった研究や業績の内容を要約する。原則と
して 4 頁。

（４）建築学科教育・研究費重点配分採択研究報告

神奈川大学より学部特別予算として学科重点配分
採択を受けた研究の報告書である。採択年度から 2
年間で得られた成果を要約する。原則として 2 頁。

（５）科学研究費間接経費を資源とする研究報告

神奈川大学建築学部教員が獲得した科学研究費の
間接経費より助成を受けて実施した研究の報告書で
ある。原則として 2 頁。

（６）私学助成関連研究報告

国や地方自治体等所管の機関より教育研究装置等
施設整備費の助成を受けた研究の報告書である。導
入年度から 2 年間で得られた成果を要約する。原則
として 2 頁。

（７）建築学研究所共同研究報告

建築学研究所より研究費の助成を受けた研究の報
告書である。共同研究 A・B 共に前年度の成果を要
約するが、研究期間 2 年の共同研究 A の場合、2 年
目の成果は次年度の建築学研究で要約する。原則と
して共同研究 A・B 共に 4 頁。

（８）建築学研究所プロジェクト研究報告

建築学研究所の事業であるプロジェクト研究

A・B・C の制度を利用して実施された研究の報告書である。プロジェクト研究の種類によらず、前年度の成果を要約する。原則として 2 頁。

(9) 随想

建築学分野を専攻する教職員の研究・開発等の思い出、意見、感想、経験談等を綴った記事である。原則として 4 頁。

(10) 研究紹介

前年度 4 月から当該年度の 3 月末までの建築学部各研究室の研究分野および研究活動、講演会記録、および前年度の博士論文、修士論文、卒業論文を体系的にまとめた記事である。頁数は任意。

(11) 研究室紹介

当該年度の建築学部各研究室の研究活動を紹介する。頁数は任意。

(12) 建築学内イベント

前年度の建築学研究所活動状況をまとめた記事である。頁数は任意。

(13) その他、編集委員会が設けた特別記事
記事の詳細は編集委員会が必要に応じて定める。

6. 原稿の作成および提出

(1) 原稿は本規程および編集委員会が提供する『神奈川大学建築学研究』原稿執筆要領に基づき作成する。

(2) 用語は和文、英文どちらも可とする。ただし、和文原稿については英文目次作成のため、原稿には英文題目の他、著者氏名および職名・所属の英文名をつける。

(3) 著者自身の公表済み著作物については、原稿中で出所を明示する等の正当な措置を講じること(著作権法第 32 条および第 48 条)により引用することができる。

(4) 原稿は神奈川大学建築学研究所事務局に提出する。そこで受理した日を原稿受付日とする。

(5) 原稿の提出期限は各年度により定める。

(6) 原稿の提出は、Word、PDF 等の電子データで行う。

(7) 図版や特殊文字等に関する編集上の注意事項がある原稿については、電子データに添えて詳細を朱書きした出力原稿を合わせて提出する。

7. 原稿の責任と権利

(1) 原稿に記載する資料の中で著作権に関わるものがある場合は、著者が自らの責任(費用を含む)で事前に許諾を得ることとする。

(2) 前号に示した許諾には、論文等の電子化およびインターネット公開に関わる掲載許可も含むものとする。

(3) 記事の著作権・編集出版権(複製権、公衆送信権)は神奈川大学建築学研究所に属する。

(4) 著者は記事が神奈川大学学術機関リポジトリにおいてインターネット公開されることに同意する。

8. 不正行為への対応

(1) 提出された原稿、または記事に神奈川大学における研究に係る不正行為等の防止及び対応に関する規程(以下、不正行為規程という)第 2 条第 5 項各号に掲げる不正行為に該当する疑義が生じ、別に定める不正行為に対する編集委員会取り扱い内規に定める手続きを経て、編集委員会が不正行為に該当する事実があると認定した場合、編集委員会は不正行為規程第 25 条「論文等の取り下げ等の勧告」に準じ、著者に対し、当該原稿については以下 i) または ii) の処分、また当該記事については以下 iii) および iv) の処分を行う場合がある。

i) 当該原稿の書き直しの指示

ii) 当該原稿の不採録

iii) 当該記事の掲載取り消し

iv) 編集委員会が不正行為の程度に応じて決定した期間の本誌への投稿禁止

(2) 提出された原稿、または記事に倫理綱領に定める研究倫理の理念と研究者の行動規範からの逸脱が著しい等の重大な不正行為に該当する事実があると本学当局が認定した場合、当該原稿または記事の著者は、前項各号の処分の他、本学当局より学内諸規程にのっとった罰則を科される場合がある。

9. 校正

(1) 校正は原則として初校までとする。

(2) 投稿原稿は完成原稿とし、原則として校正時の文言の一部修正のような軽微な修正以外、内容修正は認めない。

10. 抜刷・その他

(1) 抜刷は発行しないが、希望する著者には本誌の PDF 版を提供する。

(2) 原稿の枚数が第 5 条に定める規定限度を大幅に超過する場合は編集委員会の承認を要するが、状況により超過分の実費を徴することがある。

「神奈川大学建築学研究」原稿執筆要領

建築学 太郎* 建築学 花子**

Preparation of Manuscripts for “Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University”

Taro KENCHIKUGAKU* Hanako KENCHIKUGAKU**

1. 緒言

原稿は、テンプレート（A4判）に従って執筆し、提出の際は原稿のデジタルデータ（ファイル）を建築学研究所事務局に提出する。ファイルはMS Word（Windows または Mac）またはTeX（PDF 提出）とする。原稿記載の順序は、標題、本文、文献、付録、である。

2. 本文及び原稿の体裁全般

A4判用紙を用い、本文レイアウト（1ページあたりの文字数）は、30字×50行×2段＝3000字とする。ただしタイトルのみは1段組である。

MS Word の“ページの設定”の“文字数と行数”のタブ中の設定はフォントサイズ8、段数2で文字数30、行数50とし、“余白”のタブ中の設定は上29下22左13.7右13.7としてある。

和文文字はMS明朝、英文文字はTimes New Romanとする。ただし、記号などにSymbolを用いることが出来る。

本文、図、表及び式は原則として左右の段にまたがらないように書く。小数点は[.]を用い、カンマ[,]を用いない。句読点は[,] または、[,]で統一する。注釈の使用はなるべく避ける。

3. 見出し

諸記号の字体は次のとおりとする。

（種別）	（字体）	（例）
数学的演算記号	立体	sin, sinh
単位記号	立体	cm, kg, MΩ
ベクトル量	斜体	速度 V , 力 F
量記号	斜体	周波数 f , 長さ l
化学記号	立体	H ₂ O, BaTiO ₂

文字の大きさは表1に示すとおりとする。

4. 図、写真及び表の作成

図、写真及び表は全てカラー表示が可能であるが、製本印刷はモノクロで統一し、PDF版のみカラー掲載とする。このため、カラー表示を希望する場合は、モノクロ印刷時に識別できるよう留意する。

*教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture

**助教 建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture

図、写真及び表が単段（片側）に収まらない場合は2段（両側）にまたがって書くことができる。

図、写真及び表の横に空白ができて、その空白部には本文を記入しない。

図、写真、表の見出しは本文と同一言語とする。図及び写真の見出しはその下に、表の見出しは上に書く。

図、表中の記号類は、小さすぎて判別不能にならないようにする。また、複雑な記号類は、大きめに描くようにする。

写真は本文に貼るだけでなく、写真のファイルを添付する。

5. 数式

数式エディタを用いて記載する。

式は単列に書くように整形する。

字体はTimes New Romanを使う。ただし、Symbolは使用できる。

数式は原則として文章の行の中に入れない。やむを得ず挿入する場合には、1行高さを守る。

例1 [分数式の例]

…これは $(a+b)/(c+d)$ の形を取る。

例2 [指数式の例]

…電流は $i = I \exp(-t/x)$ の形となる。

文中でなく、式を別行にする場合には、次のように書いても良い。

その結果、[上例の式]は次の形を取る。

例1 [分数式の例]

…その結果、これは次式の形を取る。

$$\frac{a+b}{c+d} \quad (1)$$

例2 [指数式の例]

…その結果、電流は次式の形となる。

$$i = I e^{-t/x} \quad (2)$$

6. 文献記載方法

文中の文献引用は、引用箇所には文献ナンバーを上付きカッコでつける。

参考文献 (References) はナンバーに () や [] を付して本文末に列記する。

引用文献は原則として以下のように記載し、Vol., No., pp.等は省

表 1 文字及びサイズ

題目	MS 明朝	14 ポ
著者名	MS 明朝	10 ポ
欧文題目	Times New Roman	12 ポ
欧文著者名	Times New Roman	9 ポ
本文	MS 明朝	8 ポ
本文の各節・小項目	MS ゴシック	8 ポ
図・表の見出し	MS ゴシック	8 ポ
参考文献・脚注	MS 明朝 Times New Roman	8 ポ

く (Vol. 30, No. 5, pp. 177-182 ではなく 30 (5), 177-182)。また、太字、斜体を用いない。

著者名は原則として全員記述し、あまりに多い場合は「他」や「et al.」と略してもよい。また、[,] で列挙し、欧文著者の場合、最後のつなぎに「and」を加える。

例 1 論文の場合

(和文誌)

[1] 松原茂樹, 加藤芳秀, 江川誠二, 英文作成支援ツールとしての用例会検索システム ESCORT, 情報管理, 51 (4), 251-259 (2008).

(欧文誌)

[2] J. E. Lee, M. L. Fusco and A. J. Hessel, Structure of the Ebola virus glycoprotein bound to an antibody from a human survivor, Nature, 454 (7201), 177-182 (2008).

例 2 プロシーディング (Proceedings) の場合

[3] C. Büttner, S. Weinzierl, M. Yabushita and Y. Yasuda, Acoustical characteristics of preserved wooden style Kabuki theaters in Japan, Proc. Forum Acusticum 2014, R03D_1 (Krakow, 2014. 9).

例 3 書籍・著書の場合

[4] 坂村健, グローバルスタンダードと国家戦略 (日本の<現代> 第 9 巻), NTT 出版 (2005).

[5] D. Frenkel and B. Smit, Understanding Molecular Simulation (2nd ed.), Academic Press (2002).

7. 原稿作成上のヒント

このテンプレートは Windows MS Word97-2003 文書で作成してある。著者が別に書いた原稿をコピーペーストすれば、自動的に割付が決定する。

Word からコピーペーストする際、書式情報無しのテキストのみをペーストするには、対象の文字または一文をコピーした後にメニューの“ホームタブ”から“形式を選択して貼り付け…”を選択し、“テキスト”を選ぶ。

第 1 ページ標題部分は 1 段組である。この部分では、項目ごとにコピーペーストが必要である。

本文は著者原稿から図、表、脚注を除いてコピーし、テンプレートにペーストする。その後で、図等のスペースを作ってテキストボックスを挿入し、その中に図などをペースト、あるいはファイルからの挿入をする。

第 1 ページの脚注 (著者所属など) には、直接入力しても、コピーした内容をペーストしても良い。

このテンプレートについて不明な点がある場合は、建築学研究所事務局に問い合わせる。

8. 結言

校正は著者に依頼するので、校正刷りが到着後、速やかに校正を済ませて、建築学研究所事務局まで返送する。校正は内容が著者提出のハードコピーと一致することを確認するものであって、軽微な修正点を除き、変更を加えることはできない。

著者の責任による修正が生じた場合には、その修正に必要な実費を徴収する。

付録

[参 考] 神奈川大学建築学研究の配布

刷り上がった神奈川大学建築学研究は以下の各者に 1 部宛贈呈する.

- (1) 本学理事および建築学部所属教職員.
- (2) 建築学を有する国内の大学またはそれに準ずる学校.
- (3) 官公庁の研究機関.
- (4) 主要の学協会.
- (5) 民間の主要研究機関.
- (6) その他, 編集委員会が認めたもの.

[資 料] 英文用語一覧

Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University

神奈川大学建築学研究

Faculty of Architecture and Building Engineering	建築学部
Institute for Architecture and Building Engineering	建築学研究所
Department (Dept.) of	学 科
Architecture and Building Engineering	建築学
Professor	教 授
Professor Emeritus	名誉教授
Associate Professor	准教授
Assistant Professor	助 教
Research Associate	助 手
Technician	技術員
Graduate (M.C.)	大学院 (博士前期課程)
Graduate (D.C.)	大学院 (博士後期課程)
Research Student	研究生
Dean	学部長
Chairman of Dept. of ...	学科主任
Abstract	概 要

注: 准教授, 助手, 技術員, 研究生などについては種々の呼称があるが, 上記のように統一する.

神奈川大学建築学研究 第3号

神奈川大学建築学研究 編集委員会

委員長 藤田 正則 (教授, 建築学部)

委員 劉 金雨 (助教, 建築学部)

塩脇 祥 (助手, 建築学部)

小寺 直幸 (助手, 建築学部)

REPORTS FOR ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY (No. 3)

Editorial Board

Chief Editor Masanori FUJITA (Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering)

Editors Jinyu LIU (Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering)

Sho SHIOWAKI (Research Associate, Dept. of Architecture and Building Engineering)

Naoyuki KODERA (Research Associate, Dept. of Architecture and Building Engineering)

神奈川大学建築学研究 第3号

2025 年 7 月 31 日 発行

編集兼発行者 神奈川大学建築学研究所

221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3 丁目 27 番 1 号

INSTITUTE FOR ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY
3-27-1, Rokkakubashi, Kanagawa-ku, Yokohama 221-8686, Japan